黒住教祖の宗教

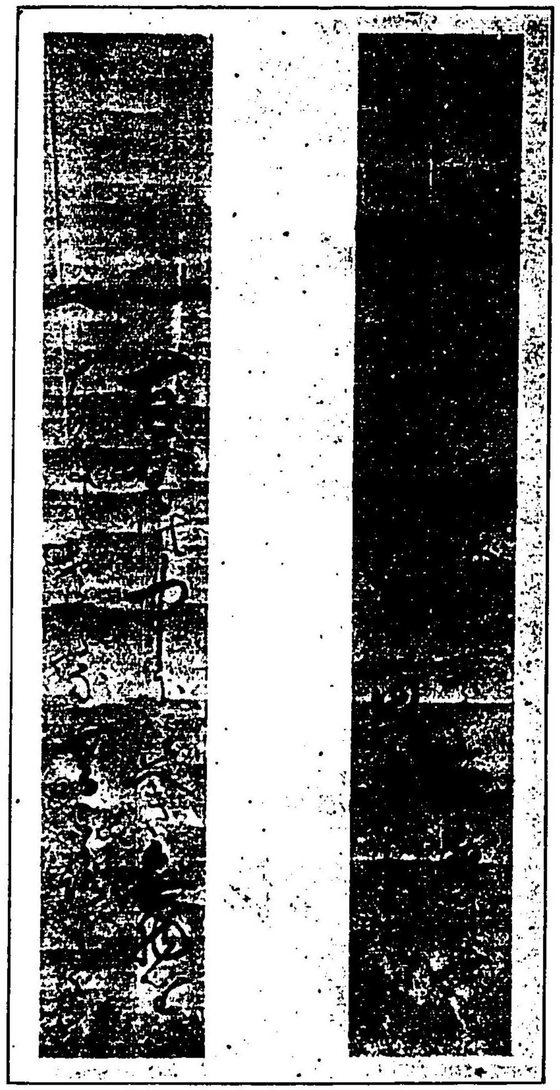
桑田無堂著

岡山 細謹舍發行

3211
76

54-76

黒住宗家御秘蔵



（岡山中西厚道藏）

自序

本書は予が曩に國の教社森督太君を介し中國民報紙上に論述したるもの、友大太田政夫君の熱心なる勸誘と、書肆細謹舍の懇切なる要請に由り更に一冊子として世に公にせんとするに至りしなり。而して今や本書の出版に際し、殆んど云はんと欲する所無し。而も一言の止み難きものは、黑住教祖の宗教と題するも、僅に予か見たる一斑に過ぎざると共に、素より黑住教の教義を代表的に披瀝したるものにあらざる事是なり。全責任は予の上にあり。若し夫れ此著にして聊か斯道の何たるやを明にし得るとせば、蓋し黑住教祖の宗教其者が至て簡明に、毫も難解不合理のものに非ざればなり。

終に尙ほ一言以て謝意を表し置くべきは、文學士黑住宗武氏を始め先輩知友諸君の多大なる同情と奬勵を、本書の出版に與へられたる事是なり。

明治四十一年三月

著者謹誌

帝國圖書館藏

防疫
41 3 26
内交

目次

緒言……一
第一章　黒住教祖の神觀……一〇
第二章　黒住教祖の人觀……四〇
第三章　黒住教祖の道德觀……七二
第四章　黒住教祖の永生觀……一四三
第五章　結論……一六九

黒住教祖の宗教目次終

黒住教祖の宗教

緒言

桑田無堂

夫れ宗教は超倫理にして、且つ超理性なり而も超理性と謂ひ、超倫理と謂ふも、沒倫理、沒理性の事にはあらず。超理性とは理性以上のものなりと謂ふの意味にて、之を謂ふべく、超倫理と謂ふも、倫理以上を意味するのみにて倫理と沒交渉の意味にて之を謂ふべからず。宗教は人心の全要求なりと謂ふは、恐らく現代に於て、最も進歩せる思想の一にして、獨り宗教のみならず、哲學と雖も人心の全要求を滿足さすものならざるべからずとは、甚だ有力なる議論なりとす。或る一流の人は、宗教は感情的のものにして、理論上彼是れと評論すべきものにあらずと謂ふべけれども、宗教も理性に沒交渉ならざる限り、理論を無視すべき筈のものにあらず。

其の理性の要求をも滿足せざるべからざるは超倫理にてあり乍ら、尙ほ道德上の要求をも滿足せざるべからざるが如しとや謂ふべけん。人心の全要求と謂へば、眞善美の三理想を包含すべきは無論にして、眞に對する要求は、理性の要求、善は意志の要求、美は感情の要求とも、稱すべく、是等總てに滿足を與ふる の宗教にあらざれば、到底理想の宗教たる能はざるなり。換言すれば、理想の宗教に於ては、人心の要求の總てに滿足を與ふるが故に、眞善美の三理想を實現するの力を有せずんばあらざるなり。

然れども世に斯の如き理想の宗教は存在せりや、將た早晩顯出し來るべきか、佛教家は曰はん、佛教こそは卽ち理想の宗教なれと、基督教家は曰はん、基督教卽ち是れなりと。佛教とは何ぞ、基督教とは何ぞ、基督教に舊新二教あり又正統派、自由派ありて、基督教の本領甚だ明ならず。佛教に聖道門、淨土門、自力教、他力教等ありて、佛教の眞相容易に判じ難し。佛教家果して佛教の眞相を知れるか、基督教家果して基督教の本領を知れるか、斯は誠に一疑問なりと謂はざるべからず。

近時我國宗教界の情景を察するに、佛教家にして成るべく基督教的に佛教を解說せんとするあり、基督教家にして成るべく佛教的に基督教を說明せんとするありて、二聖の福音てふ書冊すら顯はるゝに至れり。聞くならく比較宗教學の結論の一は、あらゆる宗教は目的と性質を同ふするものなりと謂ふに在りと。恐らく斯は或る度まで眞理なるべし。精粗の別深淺の差はあらんも貴き同一なる人性より發する現象なる以上全然異なるものゝ世に存在し得べくもあらず。されば佛教を基督教的に說く事も可能なるべく、基督教を佛教的に說く事も可能なるべし。然り或る度に於ては誠に可能なるべし。然れども吾れ人に取りて大切なる問題は佛教と基督教と孰れか勝れるや否や或は其の異同の點何の邊にあるや否や等の問題にあらずして、吾れ人に滿足を與ふる宗教は何ぞやとの疑問卽ち理想の宗教は何ぞやとの疑問に在るなり。

佛教基督教の優劣如何の問題は暫く措き予は不肖ながら偉大なる新宗教を茲に紹介せんとは欲するなり。蓋し予の所謂理想の宗教として、之を發揮し宣傳するの價値充分に存するのみならず、其の活力や實に現代人心の全要求を

滿足するものなるを信ずればなり。言ふまでも無く是れ黒住教祖の宗教なりとす。昔者ポーロ我は福音を耻とせずと云ひたるが、予は所謂廿世紀の今日而も大東帝國文化旺盛の現代に於て、黒住教祖に依て顯はれたる理想的宗教に關し、聊か言議し得るの事、寧ろ光榮なるを感せざる能はず。

何等の幸ぞ、身大日本帝國の臣民とし生れ、而も明治の聖代に人と爲り、今や絶對的宗教、天命直授の大道なりとの抱負と實力ある(少くとも予は斯く信ずる)の理由と根據を有す。新宗教、予の所謂眞善美の總てを滿足せしむる理想の宗教の爲めに微力を致さんとす。世間黒住教の眞相を知らず、僅かに我國神道各派中に有力なる一勢力を占むる者と思ひ居るべけれども、實は偉大の活力と完滿の實質を有するものにてあるなり。而も不肖ながら予が多年の研鑽と經驗は、予をして、然かく信ぜざらんとするも能はざらしむるなり。

予に於ては西洋哲學の歸結も、東西古今宗教の統一も、恐らく黒住教祖の宗教に含まれたる哲學思想、宗教的意識を外にして存する能はざるべしと思惟せらるゝなり

何となれば、教祖の宗教に含まれたる哲學思想を拒否せん事は、最も進歩したる哲學思想の破壞なればなり。又其の宗教に含まれたる意識經驗を非難する事は、最も進歩せる宗教として、從來承認せられたる佛教基督教の最善最良の思想信仰をも排斥するものなればなり。斯は甚だ無遠慮なる言論の如くなれども、予は是を以てすれば論理上、然かく推度斷定せざるべからざるなり宇宙には活力なく、生命なく、精神なく、又人には活力なく、生命なく、精神なく、隨つて大天地にも小天地にも眞もなく、善もなく、美も無くば、哲學も成立せず、理想の宗教も無望なり。斯の如き世界人生には、佛教も基督教も無價値なり、黒住教祖の宗教亦無價値なりと謂はざるべからず。然れども人には精神あり、生命あり、活力あり、而して理想の要求あり、世界亦精神あり、生命あり、活力ありて、人の要求に應ずるものありと信ぜざるべからず。宗教とは何ぞや人間以上の活力生命、精神に對する人の關係にあらずや、神と謂ひ、佛と謂ひ、所詮は活力あり、生命あり、精神ある人間以上の或る者にあらずや、宗教は卽ち此の神なるもの、佛なるものに對する人心の要求にあらずや、此の要求に多少の滿足を與ふればこ

そ、佛教も、基督教も、將た劣等宗教も價値あるにあらずや、存續するにあらずや。予は基督教に、佛教に多大の同情と尊敬を呈するもの、そは大道の多少現はれ居れるものあるを信ずればなり。人心の要求に應ずる所以のもの多少存するを信ずればなり。而も予は黒住教祖の宗教を以て理想の宗教、絶對的宗教なりと信ぜざる能はざるなり。

蓋し黒住教祖の宗教は、宇宙の活力其の者、生命其の者、精神其の者、人の活力其の者、生命其の者、精神其の者のみを根據とし、且標的と爲すものなればなり。斷じて宗派的ならざれば、宗派的ならざるが故に諸宗教の眞理を包含し得る宗教なり。宇宙と人の活力生命、精神のみを根據とし且つ標準と爲す宗教なれば古今獨歩にして未曾有なり、天地の大道なり、天命直授の道なりと謂ふを得べきなり。換言すれば絶對的宗教、理想の宗教たるを得るなり。眞善美の理想も此に滿足し、あらゆる哲學、宗教の要求をも滿足せしめ得るなり、何故に黒住教祖の宗教は斯の如き宗教なりと謂ひ得べきか、是れ不肖ながら予が本篇に於て其の一斑を明にせんと欲する所なり。

曩に牧放浪君、大阪朝日新聞紙上、黒住宗忠と題する長篇を連載し、既に一書冊として刊行せられたるが、牧君の著や黒住教祖の性格事蹟の一端を明にし、黒住教の決して輕視し、忽諸に附すべからざる所以をも明にしたりと謂ふべし。予は牧君の功勞を感謝し、其の好著たるを識認せざるべからざると共に、黒住教祖の宗教、即ち予が茲に論述せんと欲する方面に於ては、多少缺如せるものあるを感せざる能はず。

不肖ながら予は茲に黒住教祖の宗教其の者に關して、予が攻究の結果を公にせんとするもの、教祖の性格事蹟に就ては、曾く牧君の好著に讓り、成るべく教祖の性格事蹟の叙述評論には觸れざるを期せんとす、然れども斯は予の好むで然る所に非ざるのみならず、教祖の性格事蹟に就て豫め、其の大要を諒得するに非ざれば、教祖の宗教を理解せん事も、甚だ不可能なれば、予が此方面を省略せん事は誠に遺憾とする所なり。而も讀者にして、若し牧君の好著と共に、予の此の一篇の論文を精讀せられなば、教祖の性格事蹟の如何と、其の宗教の一斑をば諒得せらるゝに於て、恐らく大なる遺憾無かるべし。

さりながら、教祖の宗教のみ論述せんとすとは云へ、宗教其の者が主觀的にして、性格と離れて存せざるものなるが故、其の宗教の如何は、性格の如何を代表するものと謂ふべく、予は種々なる教祖の事蹟よりも教祖の宗教的自覺、其の信仰、其の經驗の表示に於て、黒住教祖の性格の實に偉大崇高なるを感せざる能はざるなり。黒住教祖の宗教に於ては、神の獨子なるものあるを認めず、如何なる歴史上の偉人と雖も、之を絶對的信賴の標的と爲すを容さず、隨て教祖自ら道は左京の道に非ずと斷言し、自己を標的と爲すべからずと懇示せられたりと雖も、黒住教祖の宗教は理想の宗教たると同時に、黒住宗忠なる偉大なる人格を離れて存するものに非らざるや無論にして、黒住教祖に於て顯はれたる宗教の偉大は、黒住宗忠てふ人格の偉大を証明するものなりと謂ふに於て何の不可かあらん、然りと雖も、黒住教祖を耶蘇に比し、釋伽に對し、人格の優劣高下如何を論ずるが如きは、抑も末なり。人格の優劣論は之を篇ずの要無し。黒住教祖の宗教は、教祖其の者を信ずるにはあらず、天地の大道其の者、活力生命、精神其の者、完全なる宗教的眞理其の者、最高の善其の者、圓滿なる美其の者

尙ほ換言すれば、圓滿なる神を、圓滿なる心を以て、圓滿に信じ、圓滿に且つ久遠に生活するに在るなり。然りと雖も、其の能く黒住教祖の宗教と謂はれ得る所以は他なし、誠に黒住教祖は斯の如き宗教の創傳者なればなり。

されば黒住教祖の宗教を黒住教と稱する事に於て亦何等の不都合も無し。而して之を信ずる者卽ち黒住教徒に於ては、黒住宗忠なる人格を教祖として信奉し、特殊なる崇敬の情を表するは、寧ろ至當の事なりと謂はざるべからず。而も黒住教を以て黒住教祖の宗教と見るべき以上、其の宗教の本領は黒住宗忠の神を信ずるに在りとは、決して言ふべからざるなり。若し斯く信ずるものあらんか、斯は眞個教祖の門人と稱すべき、或は所謂御道の人と稱すべき資格無きものたるなり。

誤解する勿れ、予は黒住教祖の宗教如何を開陳論明せんとするものなれども決して獨斷的に、或は又安信的に之を試むるものに非ざるなり。又他の宗教宗派を批難排斥せんと欲するにも非ざるなり。黒住教祖の宗教に於ては、毫も敵視すべき何ものをも有せざるなり。尙ほ誤解を避けんが爲に一言すべきは、予

が此の一篇の論文は單に理論的のものにあらずして、且實驗的なる事是なり。若し教内の諸君にして、徒らに難解なる理論を以て高尚奥妙なる御道の眞理を解かんとするものなりと見られんか、斯は甚しき誤解なりとす。蓋し予が此の一篇の長論文は、一面沈思默索見聞攻究の結果たると共に、一面予が幼時よりの宗教的經驗の結果なればなり。

第一章　黒住教祖の宗教

黒住教祖は　天照大神を信じたまひぬ。而して教祖の　天照大神を信じたまふや、獨日球の主宰神としてにあらず、天地万物の親神として信じたまひぬ。加之天地万物の本體として信じたまひき。

黒住教祖の神觀に於て大切なるは、神を本體的に見られたると、親神に見られたる事是なり。本體的に見られたるが故に天地に充滿せる御神德の御本體が、直に　天照大神なりと信じたまひ、親神と見られたるが故に、天地万物を以て、神或ひは神の部分とは見たまはず、却つて天地万物は神の生みたまふ所と信

じたまひしなり。本體にして且つ親神なり、故に、天地万物は神の御腹に於て、神の生々化育したまふ所なりとは、恐らく黒住教祖の神觀にして且世界觀なりと謂はざるべからず。換言せんか、黒住教祖に於ては、天地万物を離れて神を認めたるにあらず、天地万物に充滿せる活力、神德の本體を神と認むると同時に、天地万物以上のもの、即ち天地万物に超越せるものとして之を認め、隨て神は天地万物の内外に在すもの、天地万物は神の御腹に在るものと見たまひしなり。一本の草花の咲くも、神の御德御働にして、其の一本の草花の中にも神が宿りたまふなり。天に赫々たる太陽も、暗夜を照らす星辰も、地上の万象も皆な天地の一心なる　天照大神の宿りたまふ所、又　天照大神の御德の顯現ならざる無し。太陽は、機械なるか、決して然らず、太陽は　天照大神の偉大なる神德顯現なり。教祖は曰へり、月も日も我も皆一心より出づと、一心とは即ち天地の一心にして、唯一なる天地の大靈、活物の本體なり。而して心は活物、形は死物なりとは黒住教祖の明に示したまへる所、哲學的に言へば、黒住教祖が實在を心と見られたるは爭ふべからざる所にして、天地万物の本體は決して有形の物に

あらず、而も如何なる有形の物も、其の本體は、無形の心なり太陽は誠に有形の物なり、而も有形の物なるが故に、其の中に、無形の心なしと謂ふべきにあらず、否獨り其の中に無形の心ありと謂はんよりは、有形の物其者が無形なる心の所生所顯なりと謂ふべきなり、有形の物の中に、無形の心あるは無論なれども、有形の物其者を以て直に無形の心なりとは謂べからず、獨り太陽のみならず、月も星も又人も其の形を指して心とは無論謂ふべからず、然るに教祖は明に心は活物、形は死物と斷言せられ、心とは外にはあらじ、天地の有無を離れし中の活物とも詠じたまひ、亦天は無にして有、人の心も其の通と謂ひたるより考ふるも、教祖が太陽の形體其者を直に　天照大神と信じたまひたるにあらざるや、毫も疑ふべからず、而も太陽の本體は日の神にして、卽ち　天照大神なる事は無論なりとす。故に神は太陽の本體にあらず、万物の本體にあらずとは固より謂ふべからず、乃ち黒住教祖の神觀は、太陽卽神說にあらず、自然崇拜にあらずと雖も、太陽の中に在す神は、太陽の中に在すのみならず、太陽の本體なりと爲すなり、太陽の本體卽ち日

の神、天照大神なりと稱するなり。然れども太陽の本體は獨り太陽の本體たるのみならず、一切のものの本體たるなり、加之天地万物を生みたまへる親神なり、而して此の本體にして親神なる御神は、本體たり又親神にいませば、天地万物の何物とも同一視すべからず、天地万物は、皆な宇宙の大靈、天地の一心たる　天照大神の御腹に於て、天照大神自らの所生所顯たるなり日も、天照大神に非ず、月も、天照大神に非ず、人も亦　天照大神に非ざるなり。然れども人も月も日も、否草木金石も、　天照大神の御德の顯現ならざる無し。御德の靈現なるが故に、　天照大神は一切のものに、其の本體として、親神として在さゞる無し。若し月に月の神あり、日に日の神あり、人に人の神あり、一切のもの、各、別に神ありとせんか本體ありとせんか、斯は黒住教祖の神觀に非ざるなり、黒住教祖の神觀に於ては、日の神は又月の神なり、月の神は、又人の神なり、日に月に人に、天地万物個々の物に、各、別個の神在すと爲すに非ざるなり、天地の一心なる御神が、總てに充滿して居たまふと信ずるなり、總てに充滿して居たまふが故に、月にも日にも我にも居たまふと信ずるなり、乃ち教祖の信じたまひし　天照大神

は天地の大心靈にして、日月の本體たるのみならず、萬物の本體なり、天地萬物は斯の御神を本體とし、斯の御神の御腹に於て、而も斯の御神の御德に由つて、生々く化育せらるゝものたるなり。されば黒住教祖の信じたまひし神を、物質的に太陽と見るが如きは、甚だしき大誤解なりと謂ふべきのみ。

前に云へる如く、教祖は天地万物の本體は心靈にして、且つ斯の心靈に於て、即ち所謂神の御腹に於て、天地萬物は存するものと見たまひたるが、而も其の天地萬物は、御腹に於ての、所生所顯なれば、天地間何物も神を離れて在るにあらず、又神の在さざる所も無きなり。乃ち神は普遍在なりと謂はざるべからず、然るに天地萬物は神の部分にあらず、其の總計が神にもあらず、神は總てに在すと同時に、總てに超越したまへば、神の天地萬物に於ける關係は、普遍在に超越に在り、即ち神は天地萬物の内外にあるにて、内外にある故に、太陽の内にも外にも、月の内外にも、否一切の萬象の内外に在すを知ると共に、天地萬物は神の御腹の中に在るものなるを知るべきなり而も神を天地萬物の内外に認むると謂ふは天地萬物を神の御腹に認むると同一の事たるのみ、何となれば神は

天地万物の内外に在すが故に、天地万物は神の御腹に在り得ればなり、人或は謂はん、天地の内に神を認むるは可、天地の外に神を認むるは不可なりと、斯は天地てふ語に惑へるが爲にして、天地と謂ふは日月星辰及一切有形物の總計を謂ふにて、少くとも予は斯かる意義にて、今之を用ふるなり、然れば天地の内外に神を認むると謂ふに何等の不都合無きなり、否加之最も進歩せる哲學思想に於ては、神の内在性と共に超越性を認むるものにして、神の内在性のみを認めんか斯は論理上、萬物を神の部分と見る汎神論に陷るものにして、人の理性を滿足せしめ能はざるのみならず、宗教に於ける人心の要求に應せざるものたるのみ。而も黒住教祖の神觀は萬物を神の部分と見ざるものなる事は、天地萬物の親神なりとの言に於て明に之を諒すべく、又教祖の神觀に於ては、神の内在性を認められたる事は、神の御腹云々の語に於て、既に疑ふべかず、又教祖は道はみちみつるなりと解し、道直に　天照大神なりと曰ひたるにても明なりと謂はざるべからず、且教祖は道直に　天照大神なりと曰ひたるのみならず、單に天といひ、或は日月榛といひ、天地は活物なり等曰ひたるを見れば、黒

住教祖が信じたまひし御神は、天地の内に充満したまへる内在の御神なる事、亦決して疑ふべからざるなり。予が不肖ながら教祖の神觀に於ては、神の内在性と共に超越性を認むるものなりと斷言するは、決して無理由無根據にあらざるなり。然り而して黒住教祖の神觀に於て、尙ほ大に注意すべきは、圓滿を以て神の性質と見られたる事是なり。教祖が誠の本體は　天照大神の御心と曰ひ、或は誠はまる事なりと說き、丸き御神也、○きに奉仕る者也なゞ曰ひたるを見れば誠をまる事、卽ち圓滿の意味に解きたまひたると共に　天照大神の性質を圓滿と見たまひたるや疑ふべからず。圓滿とは何ぞ、完全なり、充全なり、缺ぐる所無きなり。而して圓滿の神は卽ち圓滿の心にて、誠直に圓滿の心、卽ち天照大神なりとは實に黒住教祖の信仰なりとす。而も是れ甚だ注意すべきの信仰にあらずや。蓋し亦偉大の思想にあらずや。

黒住教祖が　天照大神を圓滿の神と認めたまへるや實に健全なる思想なるのみならず、天地の活物の本體たる神に關しての最も完備せる信念なりと評せざるべからず。圓滿てふ事は前に謂へる如く、何も缺ぐる所無きの謂なれば、

哲學者の所謂絕對の意義にも解すべく、單に神を愛と見るが如き思想信仰よりも遙に勝れりと謂はざるべからず。斯く言へばとて、予は教祖の信じたまひし神が、愛の神に非ずと謂ふにはあらず。圓滿の御神なるが故に、自ら愛の德も完備せるなり。圓滿と言へば總てを具備せざるべからずして、圓滿なる者は神の外にあるべからず。而して圓滿を以て神の性質と見るを外にして、如何なる言辭も、神の性質、神の御德を形容すべきもの無し。加之圓滿の御神と見る事が、神の見方に於ける最も完全せるもの、充足せるもの、卽ち圓滿なる見方なりと謂はざるべからず。何となれば圓滿の御神なりと認むる事は、神を圓滿に見る事にして、圓滿に見ると謂ふに於て何も缺点あるべきにあらず。隨て完備せる見方也と謂はざる可らざれば也。天照大神は圓滿なる御神なれば、其力に於て、其の御德に於て、何も不足ある無し。故に　天照大神に於ては、自由自在にして自由自在なるが故に、天照大神に憂慮も無く、苦心も無し。憂慮も無く、苦心も無くば、快活の心あるのみ。聞くならく黒住教祖は「面白きは大神の御心なり」と曰ひたりと。圓滿の御神に於て、固より憂慮も、苦心もあるべきにあらざれば、恐ら

く面白き御心ならんのみ。面白き心は快活の心なり。美なる心情態なり。美とは何ぞ。所詮は快感なり。快感卽ち面白き心なり。而して面白き心は愛心より生ず。愛の滿足其の所に快感あり。神は萬物を愛したまふて、生々化育は行はる。而して神に於て快感は絶へざるべし。神豈に萬物を愛せざらんや。愛すれば卽ち面白からざるを得ざるなり。神は單に愛なりとは謂ふべからざれども、愛は神の一性質なりと謂ふに、毫も不可あるべきにあらざるなり。

人の靈性の三要素或は人心の三大要求は眞善美にあり。而して其の根柢は、天地の本體に存せざるべからず。則ち天地の本體たる神は、眞善美の三德を完備せるものならざるべからず。神は乃ち美の神たるのみならず、善の神ならざるべからず、又眞の神ならざるべからず。而して黑住教祖の信じたまひし神は圓滿の御神なれば、眞善美の三德完備の神たらざるべからざるや、無論なりと謂はざるべからず。圓滿の神に於ては、眞も、善も、美も、圓滿に具足せりと謂はざるべからず。

論ずる者あり、或は評して、是れ神を人間の如く思ふものにて、神は人間の如き

ものに非ずと謂はんか、予は答へて曰はん、人間は神の生める者なる以上、又天地の一部たる以上、人間に於て存する眞善美は天地の本體たる神に於て存せざるを得ず。人間自らに眞善美の面影を有し、且つ人間は眞善美の發展充實を理想とすべきものなる以上、神に於て、眞善美の俱存を認めざらんとするも、能はざるなり。神を人格的に見るは、誤りなりと言ふ者もあるべけれども、或る度に於て人格的に見るにあらざれば、神の事は、如何とも解すべからず。神を一の心靈と見るも、實は人格的に見たるなり。或る度に於て人間的に見たるなり。人間的に見るは人間としては、到底免るべからざる所にして、人間的に見る事が、決して不合理なりとは謂ふべからざるなり。何となれば人間も天地の勢力の所生所顯にして、天地の勢力の何たるやを知るは、其の所生所顯卽ち其の結果に就きて、考察するの外無し。而して天地の勢力の所生所顯にして、人よりも尊貴なるもの、他に一も存する無し。

而して此の尊貴なる人間に存するものゝ根柢は、天地の勢力に存すと謂はざるべからず。果して然らば、人間に存する心豈に天地の勢力に存せざらんや。而

も人の心に存する眞善美、豈に天地の心に存せざらんや。而して天地の心は神なり　天照大神なり　天照大神豈に眞善美の德を具備したまはざらんや。眞善美と謂ふも所詮は心の性德なり。

神を心靈的に見るの誤ならざる以上、圓滿の神と見、而して眞善美の具備した る神と見る事は決して、背理にあらず、不當にあらざるなり。而も神を人格的に見る事は決して、不當不可なりと謂ふべきにあらざるなり。何となれば、人間にして、多少神を諒解し得る限り、人格的に見るは當然の事なればなり。神と人間と全然無關係のものなれば、到底神の事は知るべからざるなり。而も神の事は、知るべからずとの議論の、到底成立すべからざるは、茲に論ずるまでも無き事にて、少くとも、予の此には必要とせざる所なり。

想ふに、神を人格的に見るは、非なりと爲す論者の如きも、反思積察せば、自ら其の非なるを悟る事難からざるべし。兎に角、圓滿なる神は、天地の大心靈にして、而も總ての德を具備する御神なれば、自ら眞善美の德を、圓滿に具備したまふ神と謂ふべく、黒住教祖の圓滿の神を信じたまへる以上は自ら眞善美の德

を具備したまふ御神を信じたまへりと謂はざる可らず。

天照大神は圓滿の御神なれば、隨て御神德は何れの處、何れの時、何れの物にも、充滿せざる無し、而して御神德の充滿は卽ち御神力の充滿にして、神德と謂ひ、神力と謂ふ、唯だ名を異にするのみにて、實は一なり。而して神德、神力を離れて、別に神あるにあらず、天あるにあらざれば、神德神力の御本體が直に天照大神なり。故に神德、神力の充滿は、直に天照大神の遍在、何れの時、何れの處、何れの物にも充ちて居たまふを意味するなり。誠に黒住教祖の信じたまひし神は遍在、充滿の御神なり。教祖が道直に天照大神なりと曰へる所以亦自ら明ならずや。黒住教祖の信じたまひし御神は、親神なるが故に、萬物を生々化育したまふ神なり。世界萬物は、親神の御腹にあり、親神の活動に依て、生々化育するものなれば、益々善美のものと進化發展するなり。約言すれば、神の御德は、益々世界萬物に於て顯現するなり。黒住教祖が神代、今日、今日、神代なりと曰ひ、御神德も次第に厚く相成ると仰せられたるも、亦他意あるにあらざるべく、天照大神の御開運を祈るとの一語の如き、明に世界萬物に於ける神德の益々發顯して、世界萬

物の益々善美の境に進化發展する眞理を表示するものと謂ふべきなり。此に於ても、予は黒住教祖の思想信仰の、甚だ健全にして、偉大なるを感せざる能はざるなり。

然り而して、黒住教祖は、何故否如何にして、斯の如く神を觀たまひたるやと考察すれば、教祖は決して、哲學的思索に依て斯く神を觀たまひしにあらざるなり。固より或る度に於ては教祖も哲學的思索即ち、哲學的に、天地万物を考へたまひしならんとは謂ふべけんかなれども、恐らく哲學的思索は、教祖が直感的、直覺的に神の御德を實驗自得したまひたる後の事にして、一言以て約すれば、教祖は特殊絶大の宗教的經驗、心的事實に依て天地の本體たり、活物たり、生命たる大心靈即ち神を見たるなり。換言詳語すれば、黒住教祖は、爭ひ難き自家心中の經驗、事實に於て、神と合一し、其の直覺自覺に於て、神の如何なる、性德なるやを悟りたまひたるにて、先つ哲學的に思索して、而して、後神を信じ、神と接したるが如き、次第にあらざるや、疑ふべからず、然れども本來、智情意の三作用は、密接不離のものにてあれば、教祖の直感直覺に於ても、自ら智情意三作用を含

み居りし事は、勿論なるのみならず、教祖と雖も、其の直接見神の大事實に基きて、幾分哲學的思索も試みたまひしなるべしとは、予の想像し得る所なりとす。而も前陳せる如くに、教祖が神を觀たまひたるや、決して理論的に思慮分別したまひたるが爲にあらずして、直覺的に、直感的に、又實際的に、經驗的に、天地の活力其の者、天地の生命其の者、天地の精神其の者に接觸自覺したまひたるが爲なる事や、疑ふべからず。

理論的攻究、或は哲學的思索は、決して宗教の敵にあらずと雖も、理論的攻究、哲學的思索に依てのみ、神の何たるやを知らんと欲するが如きは、迷妄の見なり。神を知るには、神と一ならざるべからず、或る度に於て、人の心が、自覺的に神と一ならずんば、神は知るべからず、然り神に關する何等の事も知るべからずと謂はゞ、極端の言なるべけれど、神の御性德、神は何ぞやとの疑問の解決は、直接神を心に自覺せざれば知らるべきにあらず。然るに、神を心に自覺すると謂ふ事は、或る度に於て、神を接觸逢着せざれば、不可能なり。而して、神と接觸逢着すると謂ふは、神と一に成る事なり。されば、神を知るには、神と一ならざれば、不可

能なりと謂はざるべからず。予不肖ながら多少の宗教的經驗無きに非らず。而して斯の經驗と、多年の哲學的思索とに依りて、黒住教祖の宗教如何を考察するに、黒住教祖が抱懷したまひたる宗教的思想信仰の偉大は、其の神と一なりし心的事實經驗の、如何に偉大にして、鞏固確正のものなりしかを証するものと思惟せざる能はず、近くは如上教祖の神觀に於て、予は斯く感せざらんとするも能はざるなり。

黒住教祖の神觀は、哲學的思索の結果にあらずして、直接經驗の結果、換言せば神と合一の直感自覺より來れるものなるが故に、神は天地に充滿したまふ御神なるのみならず、萬物の親神にして、又圓滿の御神なるのみならず、難有しより外に申上方無き御神なり。

天照大神の御神德は、實に難有きものにて、天地に充滿せる御神德が、直に天地に充滿せる惠の御德なり。丸る活しの御德なり。黒住教祖に於ては、單り道を說き、理を談じて、神の信仰すべきを教へたまひたるにあらず、直に神と合一せる活信活力を以て、神德の顯現と、人の當に神と合一して、人の德を全ふすべきを

証明したまへり。而も予は斯く云ふ言語の不充分なるを感ずると共に、黒住教祖の宗教に於ては、談理講道は抑も末にして、實際に神德を顯現し、自得の德風に於て、大道を宣傳する事、甚だ大切なるを感せざる能はず。換言すれば自ら神德を知りて、而して後人に知らしむる事大切なり。而も神德を知るとは神德の貴き難有きを、確認自得する事にて、ただ智力の上にて、或は哲學的に、理論上、神は斯くあるべし、斯くあらざるべからずと知の謂にあらず、寧ろ直感的に實際的に神に接觸し、神の活動を自覺體認するものならざるべからず。素より是れ單り感情の事にあらずと雖も確かに智力以上の事たり、超理性の事なりと謂はざるべからず。而して超理性にて理論以上なれば、自ら言語文字の及び能はざる所實に有難しとより外、說明の辭無きなり。有難しとは誠に感情的なり。然れども其の有難き感情の中には、言語文字の及ばざる、而も確乎不拔なる直接經驗、或は明白疑ふべからざる、自覺自識を含み居るなり。所謂論より証據以上のものの其處に在るなり。何故に論より証據以上のものの其處に在りと謂ふかならば、自家心中の事實として、疑はんとするも疑ふ能はざるもの在ればなり。

黒住教祖が天照大神の御神德は難有しとより申上方無しと示されたるや、惟ふに教祖自らに於て、言語文字の及ばざる而も確乎不拔の大自得、大自覺、神人合一の意識より發し來れる訓言なりと解せざるべからず。黒住教祖に於ては乃論より証據以上のものありて、神を信じ、道を說きたまひしなり。而して黒住教の宗教は、斯の論より証據以上の大自得大自覺と、其の宣傳普及にあるなり。黒住教祖の宗教的大自得、大自覺を離れて、黒住教祖の宗教及び其の傳道布教は存せざるなり。故に黒住教祖の宗教に於ては、哲學的思索、理論的攻究も、之を排斥せず、總てを活用するものなれど、單に理論に依り、神學に據りて、神の信ずべきを說く者にあらず、又歷史上過去の事實、或は傳說を根柢として、神の愛を說く者にあらず。歷史上の事實も、如何なる傳說も、之を無視せず、相當の價値を認むる事、科學の示す所、哲學の說く所も、之を無視せざると、同樣なれども、黒住教祖の宗教に於ては、確乎たる事實、其の者、活きたる經驗、其の者を以て、神德を知り、且つ知らしむるを以て大切なりと爲す。而して神德を知る事は、神の難有き事なり、而も理論以上の根據、疑ふべからざる心內の經驗、或は

爭ひ難き事實に訴へて神の難有き事を知らしむるは、黒住教祖の宗教に於ける一大特色なりと謂はざるべからず。乃ち黒住教祖の宗教に於て、神を說くや、神と世界との關係、或は神の性質、如何の問題に關し、理論的說明を試むるが如きは、其の旨とする所にあらず、實際に事實に神德を知らしむる事、味はしむる事、其の主眼とし、大切と爲す所なり。而も黒住教祖の宗教は、如何にして、實際に、事實に、神德を知らしむるか、之を味はしむるか、此に於てか、予は夫の所謂神德靈驗に就きて、聊か開陳する所無かるべからず。

神德靈驗は神德の特殊なる顯現にして、人をして神德の難有きを知らしむるものなり。廣義にて謂へば、天地間の事、一切神德の靈妙なる顯現ならざる無しと雖も、神德靈驗は、人の特殊なる心狀態に於ける、特殊なる神德の靈妙なる顯現なり。現又は人の特殊なる肉體的狀態に於ける、特殊なる神德の靈妙なる顯現なり。加之人の心念を通して自然界にも、特殊に顯現する神德をも、神德靈驗と稱すべきなり。之を一層通俗的に言へば、天地間の事、人に取りては、一切御蔭ならざる無しと雖も、特別に心にも肉體にも御蔭を蒙る事が、卽ち神德靈驗にて、又心

以外、肉體以外の物にも、特別なる御蔭を蒙る事が、神德靈驗なりと謂ふべきなり。故に平生の無事安穩なる事が、既に難有き御蔭にて、特別なる場合に於ける、特別の御蔭のみを難有く思ふは、甚だ不可なり。黒住教祖の遺翰の一に曰く「何事も難有事計に候得共、何とも不思日をおくり候がぼん人の常に御座候」と、黒住教祖に從へば天地間の事、一切難有からぬものは無きなり。何故に一切難有からざる無きやと謂へば、天地は天照大神の御腹にて、御神德が充滿し居ればなり。御神德の充滿して居ればこそ、萬物が生々し、人も貴き心と肉體を以て、生活し居れるなり。平生の難有き事を知らざるは、實に恐れ入つた御事なりと謂はざるべからず。然れども所謂凡人のかなしさ、其の難有き事を知らで、甚だしきは、青年有爲の資をもちながら、夫の煩悶病にかゝり、自ら此の世を去らんと企つるものさへあり。斯の如き世の人々に、神德の有難きを知らしむるには、非常特別の場合に、特別なる御蔭を受けしむるより、善きは無し、或は病が癒へ、災難が免かれ不思議に心に明りが入るなどの事あれば、斯は誠に御神德なり。神は難有しとの事、心の奥底に徹し易く、隨て平生の難有き事にも氣を附くるに

至り易きなり。

黒住教祖は、病の癒るは、道の入口なりと說きたまひしとの事なるが、神德を知るの初步なるが故に、又道の入口なるなり。

黒住教祖の宗教は、一言に約すれば、神德を知るの外無く、而かも神德を知ると謂ふは、神の難有き御事を知るが、第一の事、卽ち初步にして、愈々御一體所謂神人合一の場に至るも、神德を知る範圍內にありて、實は愈々御一體になられば、眞に神德を知る事は不可能なり。神の御事は、神又は神と一體なる者にあらざれば、知るべからず。されば、神を知ると謂ふ事は、神と一となられば、能はざるは言ふまでも無く隨て神德を知るを外にして、別に黒住教祖の宗教は存せず。何となれば、黒住教祖の宗教は、神人一體てふ事を離れて無く、而して其の神人一體てふ事の場合は、神德を善く知る場合なればなり。黒住教祖は、心明かなる時は、則ち天照大神我一心にあらはれ給ひて、運をそべ給ふ事疑ひ有べからず。有かたし〳〵と曰ひたるが、惟ふに、心明なる場合は、卽ち御一體の場合なるが故に、天照大神我が心の表に顯はれたまふて、御蔭を

賜はるなり。されば神德靈驗は、特殊なる神德の顯現にして、神を知り、道に入る門なれども、其の意義價値の貴ぶべきや、亦自ら明なるものありと謂ふべし。何となれば特殊なる、而も顯著なる靈驗は、人をして神に往かしむる第一の門口たればなり。最も有効なる方法なればなり。而も是れ人爲の門口にあらず、方法にあらず。天照大神の定めたまひ、行ひたまふ所なり。天命、神意の然る所なり。而も黒住教祖は神德靈驗を入口とせる大道を自覺自得し、且つ普及實現せんと努めたまひしなり。而して斯は、實に難有き天の御思召に起因するものにして、黒住宗忠てふ大人格の出顯其の者が、既に偉大なる神德靈驗なりと謂はざるべからず。

所謂神德靈驗に種々あり、信念に由て病の平癒するあり、禁厭に由て大患の全治するあり、或は說教聽聞の場合、知らず覺へず、盲眼の開くなどありて、其の御蔭の顯るゝや一樣ならずと雖も、而も神德の然らしむる所なるに至ては、皆な一なり。而して御蔭の特に顯はるゝや、平生神の有難き事を知らざるものも、驚然として、神德の難有きを悟り、神を信せざらんとするも能はざるに至るなり。

論するものあり、或は謂はん、今日科學の旺盛なる時代に於て、不可思議なる奇蹟を說くが如きは、不可なりと。黒住教祖の宗教に於ては、不可思議なる奇蹟を說くものにあらず、又之を行ふものにもあらず。

神德靈驗は、決して不可思議なる奇蹟にあらず、之を說くは、敢て奇蹟談を試むるものにあらず、神德靈驗を以て、神の妙力の然らしむる所と爲すは可、而も不可思議なる奇蹟と爲すは不可なり。黒住教祖に從へば、神力の妙の顯はるゝは、當然の事にして、少も不思議なる御事にあらざるなり。

黒住教祖は明に「妙は彌あらはれ候得共、此妙とても天地の妙也、我妙に御座なく候間皆天地の妙也」と斷言し、又「いろ〳〵妙成事も御座候得共、一々申上候も難筆盡彌以天地はいき物に候得ば、うたがひをはなれ執行仕候得ば難有事は天地にみち候得ば、やまひくらひの物其場にてなおり候と、是等をまたふしぎにおもふは、重々まよひ成」と曰たるが、實に天地には難有き神德充滿せる事なれば、種々なる妙即ち御蔭の顯はるゝ事、毫も不思議とするに及ばざるのみならず、却て重々まよひなりと謂はざるべからず。科學なるものも、畢竟するに、天

地の活力其の者の動作に於ける攻究にあらずや。而して哲學上其の活力の本體が神なりと謂ふ事の否認すべからざる以上天地を活物と觀て、而して種々なる御蔭は天地の妙、即ち其の本體たる神の力の發動顯現なりと爲す思想信仰は、決して迷想迷信にあらず。迷想迷信と思惟するこそ謬妄の見なれ。

神を認めず、或は宇宙万物の外に神を認め所謂自然の理法なるものを、神の外に認るものに於ては、黒住教祖の宗教に於ける所謂御蔭話は、不思議に思はるべく、又不合理に想はるべけれども、神に於て宇宙万物を認め、神の力を離れて、別に理法なるものあるにあらず、自然の理法は、自然に於ける神の活動の形式に過ぎざるを知る神は理法以上のものにして、其の活動の形式に拘束せらるゝものにあらざるを知るべく、隨て神力顯現の種々特殊なる妙用を呈するや、當然の事なりと思惟せざるべからず而して論より証據、自然の理法を以ては說明し難き神の活動、神力の特殊なる顯現として、種々なる神德靈驗は、少くとも黒住教祖の宗教に於ては、明確なる事實として存するなり。獨り教祖在世の時に然りしのみならず、神德靈驗の事實、即ち特殊なる御蔭の實際に顯はるゝ事

は、現在に於て毫も疑ふべからざる明確なる事實なり。所謂神德靈驗の意義性質を解せずして、漫に迷信なりと謂ふが如きは、思はざるの甚だしき者と評せざるべからず。

然れども神德靈驗は、特殊なる神力の顯現なれば、特殊なる事情に由ての顯現なり。而して、其の特殊なる事情は、全然神の御思召のみに由る事情もあるべく、全然人の心に由るの事情もあるべくして、一定すべからずと雖も、人の心構、即ち心的狀態の特殊なる場合、而も特殊なる神德の顯現を蒙り得べき場合、尙ほ換言すれば、神の御心に通ふ場合に於ては、如何なる特殊なる廣大絕妙の御蔭も顯はるべきなり、蒙るべきなり。獨り身の上と謂はず、心の上と謂はず、神の御心に副ひさへすれば、如何なる御蔭も蒙るべきなり。即ち風波の難も、水火の厄も免れ得べきなり。其の他如何なる事、如何なる場合と雖も、御蔭を蒙り得べきなり。約言すれば、御蔭に依ては、天地世界をも自由にすべきなり。

禁厭によりて、病が癒ると謂はゞ、人或は奇異の感を抱くべけれど、禁厭によりて、病の癒る事は、爭ふべからざる、而も枚擧すべからざる事實にして、之を疑ふ

は、事實を無視するものなり、或は其の病の癒るは、禁厭の効にあらず、唯だ心の作用なりと言ふものもあらんが、心の作用には相違なしと雖も、禁厭する者及之を受くる者の心の作用のみとは、謂ふべからず、既に大天地に遍滿せる神を認むるものに於ては天地間一切の事物其の有形と無形を問はず直接間接に神の活動を離て存せざる事を認めざるべからず。されば、禁厭に於ける心の作用に由て起る事も、神德の然らしむる所なりと認めざるべからず。單に人の心の作用のみとして、禁厭に於て顯はる靈驗を解するは、不合理なり。況んや禁厭に於て、之を施すものも、之を受くるものも、神德を信ずる心を以てするに於ておや、たとへ受くる者に於て、神德を信せずとも、施すものに於て、神德を信じ、而も一體の心を以て、之を施す場合に於て、毎に靈驗の著しきを見れば、決して單に人の心の作用として解すべからず、施す者に於て、充分なる信念を有する場合には、無論神德の靈驗は著し、而も是れ神を信ずる心の作用なれば、神の活動の加はりしもの、神德の顯現なりと見るにあらざれば、不可なり、之を單り人の心の作用のみと解するも

のは、無神論者か、然らずば神を遠方に認むるものにして、神は天地に、又吾れ人の身にも、心にも在すを信せざるものにして、無神論の妄謬、或は神の內在性を論するが如きは、予の玆に必要とする所にあらざるなり、然れども既に、天地に充滿せる神德、或は內在性を神に認むる者なる以上、黒住教祖の宗教に於ける、神德靈驗を、迷信なりとか、或は單に人の心の作用のみなりとは、斷じて思惟し能はざる所なりと謂ふべし、少くとも合理的に或は論理的に、然かく排斥し去るを容さざるなり、獨り禁厭によりて、顯はる神德靈驗のみならず、祈念によりて、說教によりて、或は神水其他に於て、顯はるゝ神德靈驗と雖も、或は之を疑ひ、或は之を嘲笑排斥するが如きは、天地間一切の物皆な神德を含有するを知らず、殊に信念のある所、其處に、或る度の神人合一あり、而して特殊なる神德の顯現するを知らざるが爲にして要は神の何たるやを知らざるに起因すと謂はざるべからず。

黒住教祖の宗教に於ては、神を天地萬物の內外に認むるもの、卽ち神に於て萬有の存在を認むるもの、神の性を圓滿と見、神の活動を、天地萬物に充滿して、生

〳〵不息なるものと見、而して神德靈驗なるものは、人の心と、神と一となれる場合、即ち或る度に於て、神の御心に、適合せる場合に於て、特に顯はるゝ神德と見るにて、毫も不思議なる奇蹟談にあらず、又背理の事柄にあらざるなり、而して其の神德靈驗の形式即ち神德の顯現の樣は、必ずしも、彼此と限るべからずと雖も、神の御心に適ふ場合に於ては、如何なる事情に於ても、如何なる場合に於ても、神德は顯はるゝなり例へば單に信念に由り、或は祈念に由て、特殊なる靈驗あるも、又說教、或は神水に由て御蔭の顯はるゝも、人の心の神の御心にかゝひて、神が人の心及內外の事物に特殊なる御力を加へたまふが爲めなり換言すれば、信じて疑はざる心は、即ち神の御德に、任せたる心にて、此の心には、神の御德、特に賜るなり、知らず、覺へず神の御德にのみ信賴せる場合と雖も、神の御力の加はるや亦疑ふべからず何れにせよ、苟も神の御心に適ひなば、それだけ神の特殊なる御蔭を蒙るべきは、無論なりとす。而も神の御心に適ふと謂ふは多少神の御心と一となれるにて、一となれるが故に、神の御德特殊なる神の御蔭顯はるゝなり本來が、平生神の御德を蒙り居れるなるが其の平生御德を蒙

れる事は、即ち本來が、神を離れて在るにあらずして、素と一體のものなるが爲めなり、而も其の素と一體のものが、特に神の御心に適ふ場合は特に心から一體となれる場合には如何なる自由自在の御德をも蒙る事を得るなり、而して之を疑ひ或は不思議と思ふは、誠に重々の迷なりとす。

黒住教祖の神觀に就ては、尙ほ謂ふべきもの一にして止まらずと雖も、茲には黒住教祖の宗教に於ては、一神の御腹に於て多神の存在を承認せる事に關し、聊か論述して後、直に第二章に入らんと欲す。

黒住教は一神教なりや、多神教なるやと謂はゞ、無論一神教なりと謂はざるべからず何となれば、唯一の神を信賴し、而も絕對的信賴を、此の神のみに置くものなれば、なり、然れども所謂子なる神を認むるものにして、親神の御腹に於て、多くの子なる神の存在を認むるなり。所謂八百万の神とは人なる神にして、吾れ人が、實は八百万神たるの資格を有するなり。隨て八百万神たる吾れ人は、同胞相愛し、相敬せざるべからざるが故に、同胞中の先覺者、社會國家の功勳者を、殊に尊敬するは、亦當然の事なりと謂はざるべからず、祖先禮拜も亦之を當然

の事なりと謂はざるべからず。而して斯は誠に親神たる天地大靈の御思召に副ふ事なりと謂はざるべからず。否親神たる御神の御心にかなへばこそ、當然の事たるを得るなり。黒住教祖の宗教に於ては、唯一なる宇宙の大心靈にのみ信頼すべしと主唱すると、同時に一切は、斯の大心靈の御物、卽ち天の御物にして、一切之を大切に難有く思はざるべからずと爲すなり。隨て天の生みたまひ、天の御心に適へる性德功勞ありし人の靈、或は祖先其他關係淺らざる者の靈は、特に崇敬禮拜するを以て、天の大御心に適ふものと爲すなり。然れども若し祖先其他の禮拜を以て、天の御心に適ふ所以と爲さず、祖先其他の者の靈に信頼して、何かの御蔭を蒙らんと欲するが如きは斷じて黒住教祖の宗教にあらざるなり。

黒住教祖の宗教に於ては、信頼すべき神としては、唯一の天を認むるのみ。然れども禮拜に於ては、多神を認むるなり。隨て祖先禮拜も、之を是認するなり。而も其の多神を禮拜し、祖先を尊崇するや、決して、天地の一心靈たる御神に對する信頼崇敬の心を離れて、之を爲すを許さざるなり。黒住教祖の宗教に於ては、總て

てに於て、大御神の難有き事を認むるなり、八百万神の禮拜も、祖先の崇敬も、大御神の御神德を難有く思ふが爲なるなり、詳言すれば、八百万神の功德も、祖先の恩惠も、大御神の御神慮御神德を離れて存せず、而も八百万神も、祖先も、天の御物なれば、之を禮拜し、崇敬するも、天の御物を尊崇する所以なりと爲すなり。若し唯一の御神にのみ信頼する以上、八百万神、或は祖先を禮拜するが如きは、不可なりと謂はんか、唯一の御神のみ信頼する以上、人類同胞相互に信頼し、敬愛する事亦不可なりと謂はざるべからず。世豈に斯の如き沒倫理の事あるべけんや。

神に對する信頼心を基礎として、或は敬愛心を本として、人類相互に信頼し、敬愛することこそ、健全なる宗教心の實踐的に顯はるゝものにあらずや。されば唯一の神のみ信頼する心は、神を信頼するが爲に、人類相互に信頼すべからずと爲すものにあらず神に對する敬愛心は、亦人類相互の敬愛心を禁ずるものにあらざるなり。而して多神の崇敬、祖先禮拜の如き、畢竟するに、天の御心に副ふ所以、天に事へまつる所以の一として是認するのみ。何等の不都合かあらん。然り

と雖も、人たるものゝ、天地の一心靈たる御神卽ち天照大神に對し奉り、如何に信賴し、如何に服事すべきかの疑問に對する、黒住教祖の宗教に於ける解答は不肖ながら、予が第二章黒住教祖の人觀、第三章黒住教祖の道德觀に於て、稍詳細に論述せんと期する所、茲には、たゞ如何なる意義にての一神教なるやを、聊か序でながらに辨じたるのみ。

第二章　黒住教祖の人觀

黒住教祖の人觀とは、黒住教祖の人間に關する見方及人間の生活に於ける觀想にして人生觀とも稱すべきなり。然るに人間に關する見方、其の生活に於ける觀想は、神に關する見方觀想を離れてあるにあらず。

黒住教祖の人觀は、實に神觀を離れてあるにあらざるなり。されば其の人觀は、神と人に於ける關係の觀想なりとも謂ふべきなり。固より、先づ神の何たるを知り、人の何たるを知らずば、其の關係は知り難きが如しと雖も、若し神と人の間、初より無關係なれば、神の事は知るべきにあらず、神につき幾分にても知り

得しならば、うは神と幾分の關係あるが爲なり、本來何等かの關係ありてこそ、神は人に知らるゝなり。而して人は如何なる關係を、神に有するものなるかの疑問の解決は、自ら人の何たるやを、幾分明にするものにして、人は神に對し、斯の如き關係を有するものなりと謂ふは、人とは何ぞやの疑問に、幾分答へたるものと謂ふべきなり。又一方神は人に如何なる關係を有するものなるかとの疑問の解決は、自ら神の何たるやを、幾分明かにするものにして、神は人に對し、斯の如き關係を有するものなりと謂ふは、神とは何ぞやの疑問に、幾分答へたるものと謂ふべきなり、乃ち神を知る事は、多少人を知る事を含み、人を知る事は、多少神を知る事を含み居れるものなれば、神觀と人觀とは、決して全く分離すべきにあらずと知るべし。而して斯は、實に神と人が、本來無關係のものにあらざるが故なりとす。無關係なれば、沒交渉なり、相互に何等の活動無く、影響無きなり。人は神を知る能はず、神亦人を知る能はざるなり。關係ありとは關係する所ありとの謂にして、關係する所ありとは、互に交渉し、影響する所ある謂約言すれば、關係は相互の活動を、意味すと謂ふべし。人が神を知ると謂ふは、人

の一種の活動にして、神が人を知ると謂ふも、一種の神の活動なり。人間相互の間に於ても甲が乙を知り、乙が甲を知ると謂ふ事は、甲乙各〻が互に一種の活動を爲すものにして、甲の乙を知る所以の活動無くば、甲は乙を知る能はず、隨て乙は甲に知らるゝ能はず、乙の甲を知り、甲の乙に知らるゝ事亦然り、神を人が知ると謂ふは、人の神に對する一活動なるが、何故に、人は神に對し知り得る活動を爲し得るやと謂はゞ、人の未だ神に對し、知るてふ活動を爲さざるに先ち、神が人に關係し居れば、活動して居れば、神が人に關係して居ればこそ、換言すれば、人に對する神の活動あればこそ、人は神に對する活動を始め得るなれ。人が神を知るは、人と神に關係あるが爲なるが、其の關係たるや、神が人に關係したまふが爲、即ち神が常に活動したまふが爲なり故に神と人に關係ありと謂ふは、神の人に關係したまふを意味し、其の神の人に關係したまふや、神の先づ人に活動したまふを意味せりと謂ふべし。されば神の人に對する關係、即ち活動が、根本的原始的にして、人が神を知り得るてふ事は神が根本的に原始的に、人に關係し、活動したまふが故なりと謂はざるべからず。然れども神が

根本的に、原始的に、人に關係するを知るは、人の知るにて、人の一種の活動なり、而して神が、原始的に、根本的に、人に關係するものとして神を知りたるにて、即ち神の何たるやを幾分か知れるなり、又一方には、人は神の、斯の如く關係するものにして、神に斯く活動さるるものなりと、人自ら知りたりとせば、則ち人の何たるやをも、自覺したるなり、少くとも幾分人の何たるやを知り得たるなり。此に於てか、人が神を知るてふ事が、人自らを、幾分か知る事を意味するものなる事隨て人觀の、全くは、神觀と離つべからざるをも、知るべきならずや。

實に神を知るは、人を知る所以なり。而も人は如何にして神を知るやと謂はゞ、自らの裏に神を發見すればなり。天地万物に、主宰の神なかるべからず、現象の奥に、物自體即實在なかるべからずと觀ずるも、畢竟は人が其の心に於て、之を認むればなり。自ら省察して之を發見すればなり。されば、或る學者の謂ふたる如く、神は人心の創造なりとは、謂ふべからず。所詮は發見にして、創造にあらず。デカートは「吾れ思ふ故に、吾れあり」と謂ひたる

が彼は斯くて自我の存在を發見したるなり。自我とは何ぞ、吾れ人は自ら省みて、其の存在の疑ふべからざるを感せざる能はず。否寧ろ自ら省みて自我を發見せざらんとするも能はざるなり。而して吾れ人の思想將た心識の發達し來るや、自我の活動に就き、其の知る事漸くに精緻に、漸くに增進し來るなり。而して知る事の粗より精に、或は漸次に增進し來るや、無きものを創造するにあらずして有るもの、或は自然に顯はるものを發見するのみなり。人は本來宗教的動物なりと謂ひ得んか、人の心の發展し來るに隨ひ、自ら神を發見すべき性質を有するが爲なりと謂ひ得べし。人の自ら省みて自我の存在を發見するも、神の存在を發見するも、同じく心の發見なり、自覺なりと謂ふべきのみ。之を人心の發見と謂ひ、自覺なりと謂ふは可、而も人心の創造なりと謂ふは不可なり、而して神を知ると謂ふ事實は、爭ひ難き、又疑ひ難き事實にして、人が其の心に於て、自由勝手に創造したるの事實にあらず。疑はんとするも疑ひ難き、活きたる事實。其者の發見なり。神に對せる直感自覺の事實なり、經驗なり。疑ひ深き者には、自我の存在も、尙ほ疑はるべし。唯物論者には、自我の存在を信ずべき哲學的

根據なし。一切を物質の變化と見ればなり。汎神論にも、自我の存在を信ずべき哲學的根據なし。一切を神のみと見ればなり。健全なる哲學思想に於ては、神に於ての自我、自我に於ての神、卽ち一體的の神と人を認めざる能はず、而も一體的に神と人を認め得るは、神人の一體的關係を發見すればなり。而して發見てふ事は、詮する所、人の自覺にして、心內の事實なり。心內の事實なればこそ、確乎不拔なれ。却て疑はしく思ふは、俗人の見にして、心內の事實、自ら發見せる心的事實なればこそ、疑はんとするも疑ふ能はざるなれ。目に見、耳に聞く事をのみ、正確と思ふは、凡人の誤にして、目に見へず、手に取れず、而も疑ひ難き、活きたる神德の顯現ぞ。何よりも勝りて正確なりと謂ふべし。人が自らの神と隔て無く一體のものたるを知るは、一體的事實、或は關係の發見にして、一たび其の關係を發見し、自覺せんか、顯然たる事實として、永く人の心に生くべし。而して人が神との一體的關係を發見するは、一方には、神の何たるやを、幾分か知る事にて、一方には、人自らの何たるやを、亦幾分か自覺する事たるや、復た論ずるまでも無きなり。而も其の神との一體的關係を自覺するは、自らの心に於て神の活動

を自覺發見するにあらざれば、能はず。換言すれば、神德の顯現を自覺するにあらざれば、神の活動、神德の顯現に接しながらも、神を知る事能はざるべし。一層通俗に之を謂へば、神の御力御德を蒙りながらも、若し氣がつかずば、せん方なきなり。神の力、神の御德は、天地に充ち、人の身も心も、神の力、神の御德の中に在るもの、神德の顯現、御蔭を外にして、人はあるにあらず、あり得べきにもあらず、何等の活動も爲し得る者にあらざれど、此に氣づかぬ者は神德をも神德と思はず、御蔭を御蔭とも思はぬなり。而して神の御事に氣づかぬ者は、人自らの事にも氣づかぬ者と謂ふべく、たとへ自らの存在を知れりとても、神と一體的關係を有するを知らずば、自ら人としての貴き性德を知らず、其れだけ自らをも知らざるものと謂ふべきなり。

人とは何ぞ、人の性質を知るは、人自らにあらずば、人間以上のものならざるべからず。而も宗教に於て人間以上のものを、神とし、佛とし信ずるも、所詮は、人間自らが、然かく觀ずるが故なり。人の自ら觀ずる事、自ら覺識想念するを外にして、何等の世界觀も無く、神觀も無し、世界觀と謂ひ、神觀と謂ひ、人の觀想たるに

相違無しされば、とて、人の觀想なきが故に、虛妄なりとは謂ふべからず、眞否孰れとも定かならずとも謂ふべからず。人の觀想なるが故に、眞否定かならずと謂ふか、虛妄なりと謂ふか、其定かならずと謂ふも、虛妄なりと謂ふも、人の觀想にあらずや。人の觀想なるが故に、信ずべからずとせば、其の之を人の觀想なるが故に、虛妄なりとか、眞否定かならずと謂ふも信ずべからずとや謂はん、然れども斯は懷疑說に陷りたるものにして、矛盾自殺の談論のみ。人の觀想には眞なるあり、妄なるあり。世界觀と謂ひ、神觀と謂ひ、或は人生觀と言ひ、眞なるもあるべく、妄なるもあるべし。而して何づれを眞の世界觀、神觀と、見るべきか、人生觀と見るべきか、人自からの心に於て、滿足する所のものを外にして、眞否の標準とて存するにあらず。究竟する所、人の自覺自觀にあるなり。世界に神ありと爲すこと、迷妄にあらざるか、天を仰げば、赫々たる太陽の六合を照らすあり、地を見れば、森羅の萬象顯然たり。是れ何者の作用ぞ、所現ぞ、殊に驚くべきは、人てふ自我內心の現象にぞある。一喜一憂、或は思慮し、或は執意し或は煩悶し、或は喜樂す。千變萬化

の意識情態是れ何者の作用ぞ、所現ぞ、人自らに於て其の意識作用の主を心と呼ぶか、天地外界の作用の主を心と見るは、何故背理なるか唯物論の妄なるは、意識現象の主を物質と見ればなり、天地外界の作用亦物質の所現と見ればなり、何故に人は自らに於て、心の存在を疑はざるやと謂はゞ、一定の空間を占むる物としては、即ち有形物としては自ら滿足せざればなり、而も心の存在を疑はざるは、自我の存在を疑はざるなり、心は自我、自我は即ち心なりと謂はざるべからず、夫の一喜一憂するもの、思慮するもの、執意するもの、而して哲學的思索を試み、宗教的信念を浮ぶるもの、豈に一に心てふ自我にあらずして何ぞ、而して人既に自我てふ心、心てふ自我を認んか、赫々たる太陽も、地上の萬象も、心の所生所顯と見ざる能はず、否な加之自我てふ心も、自我てふ心の宿れる肉體も、同一にして、而も唯一なる心の所生所顯と見ざる能はず、乃ち一切は天地の一心たる神の所生所顯と見ざる能はず、此の天地の一心たる神は、人間以上のものならざるべからずと雖も、同じく心たるに至ては、一なり、人の心は有限神の心は、無限神の力は大人の力は小なりと雖も、同じく心なり、心たる性質を有

し、力を有するに至ては、一なり、黒住教祖は曰く、天は無にして有、人の心も又其通ふりなり、と、又曰く、いにしへの心も無形、今の心も無形、なりと無形なるが故に、有れども無きが如くなり、而も無きと思ふは迷妄の見なり、無形なるが故に無しと謂ふか、人の心も亦無しと謂はざるべからず、而も人の心は、無形にして、而も實有なるなり、無形なれども、活物の本體なるが故に、神は太陽に於て六合を照らし、萬物を生々化育したまふなり、人の心も、無形なれども、活物なるが故に身體を自由に使用するなり、黒住教祖は、明に心は活物、形は死物と斷言したまひ、人に於ても、天地に於ても、心をば活物と認めたまひしや疑ふべからず、人若し心ならずば、天地萬物の本體を心と觀する事能はず、天地萬物の本體、哲學者の所謂實在を心と觀るは、人自らが、心なるを觀すればなり、而して觀すると謂ひ發見すると謂ひ、知ると謂ふも、異名同義にして、人は自ら省みて、自我の心なるを觀するなり、知るなり、而も自我の心なるを觀すると謂ひ、知ると謂ふも、人自らが其の心なるを發見するの謂なるに外ならず、而して既に、人自らに於て、心を實有とし形を非實有と見んか、天地萬物に於て、心を實有とし、物質を

非實有と見るは、人間思想の必然にして且論理の當然なりと謂はざるべからず、人若し自らに於て、心を認めずんば、天地萬物に於て心を認むる能はず、己れに無き者を天地萬物に認むる事は人の爲し能はざる所なり。然るに人は自らに於て心を認むるのみならず、人自らの本體自我其の者が、心なるを認めざる能はず隨て天地萬物に心を認むるのみならず、天地萬物の本體約言すれば、天地の實在其の者を心と認めざる能はず、然り而して天地萬物の本體即ち所謂實在は、唯一ならざるべからず。たゞ有るもの、存在するもの、即ち現象としては、複雜多種なるもの存在すと雖も、實在たり、本體たる誠の活物は唯一の心あるのみ、二元論は、到底人心の滿足せざる所にして、又眞理にあらず既に心を實在と見、而も實在に二あるを許さずとせば、天地萬物は、唯一なる實在、黒住教祖の所謂天地の一心、即ち天照大神の所生所顯と觀せざるべからず、一切は天地の一心たる神の顯現にして、人も亦斯の神の顯現の一なりと謂はざるべからず。而も予が茲に神の顯現と謂ふは、神の顯現したまふ所なりとの意義、即ち神の生み、且つ顯はしたまふ所なりとの意義にして、一切を神自體の現れと爲すに

あらず。換言すれば、天地萬物其の者、即ち天地萬物の現象其の者を、神と見、或は神の部分なりと爲すにあらず。天地個々の物を、神の部分と見、其の總計全體を神と見るが如き汎神論(萬有神教)は予の是認し得る所にあらず黒住教祖の宗教に於て亦斷じて取らざる所なり。天地個々の物を離れて神の力を見んとするは、或る學者の謂へるが如く、迷誤なりと雖も、天地間一切の物を以て、直に神とし、或は部分と見るが如きは斷じて不可なり。天地間一切の物を、神の顯現する所の現象と見るは、可なれども、直に神自らの現れと見るは、決して健全なる思想にあらず。若し一切のものを神と觀し、神のみ存在すとせんか、自我てふ觀念は、迷想ならざるべからず。一たび自我てふ觀念或は自我の存在を信ずる事の、虛妄なるを知らんか、心なるものゝ存在は虛妄に歸せざるべからず。天地萬物に心を認むる事も、虛妄ならざるを得ず。天地萬物を直に、神の現れと見る汎神論も、亦虛妄ならざるを得ず、何となれば、斯の如き汎神論と雖も、實在を心と見るものなればなり。人果して自我の心たるを知らば、天地の實在をも心と見るは、當然必至の事なりと雖も、自我は即ち天地の實在たる心の一部分なりと

は謂ふべからず。自我なる心は、天地の一心たる神が、其の御腹に於て、生みたまひ、顯はしたまへる心なりとは謂ふべし。否斯く解せざれば、吾れ人の心に、少くとも理性的滿足のみならず倫理的滿足も、宗教的滿足も、存する能はず、吾れ人は自らの省察覺識に於て、自我の心たるは、發見し得べきなり。而も自我は、卽ち天地の神なりとは觀じ能はざるなり。或は神の一部分とも觀じ能はざるなり。然れども自我なる心は、神なる大心靈の中に、存する事は、之を思索發見し得べきなり。否な吾れ人の思想、心識の發展と共に、自我は畢竟するに現象我にして、本體我たる神を、離れて存するものにあらず、自我は神の中に、或は神に於て存在する心なるを發見せざる能はざるなり。換言すれば神人一體なる事を發見せざる能はず、而も自我を無視するにはあらざるなり。心としての自我は、決して虛無にあらざるなり。

抑も黒住教祖の人觀に於て最も注意すべきは、人を心靈的に見られたると、神と人の關係に於て、其の一體的不離の關係を認め、且つ人を神の子にして、神と成るべき資格を有すると觀られたる事、是なりとす。

第一章神觀に於て、既に陳べたる如く、黒住教祖の神は、天地萬物に內在なる神にして、且つ超越なる、而も人格性を有する神にして、決して無心無覺の神にあらず。

神を以て無心無覺のものと爲すは、卽ち無意識と爲すにて、無意識なるものは、物質のみ。既に實在を心と見る以上、實在卽ち神は有意識なる心と見ざるべからず、意識を有する点に於ては、人も神と同一なり。而して神を有意識に見るは、輓近の哲學思想に於ても、拒否し能はざる所にして、人自らに於て、意識的活動を認め、意識的活動の主體として、心を認むるの、是なる以上、天地萬物の實在を以て、意識的活動の主體たる、大心靈と見るは、當然の事なりとす。

人も天地萬物の一にして、其の一たる人に於て、意識的活動を認むる以上、天地萬物の實在、本體に於て、意識的活動を認めざるは、背理なり、矛盾なり。天地勢力の所產、結果とも謂ふべき人に於て、意識活動を認めながら、其の原因たる、天地勢力を無意識と見るが如きは、到底愚論妄見たるを免れざるなり。天地は實に活力の顯現なり、活きたる勢力の所生所顯なり。而して實に黒住教祖は人は天

地の子なりと斷言し、神人一體を喝破す。教祖か所謂天照大神は、天地の本體、活力の主體にして、其の性德や圓滿なり。人は斯の圓滿なる神の御腹に生存を保てるものにして、其の心たるに至ては、神と同一の性質を有し、且つ神の子として圓滿の性德を發揮養成し得るなり。

吾れ人は、自ら生れんとして生れたるにあらず、又自らの力に由て、生存し、活動するにあらず。吾れ人は、自我の心なるを知ると共に、天地の心なる神に在るものなるを知る。神は天地に充滿したまふ神なれば、自我は、神の御腹に在るものにして、離れんとするも、離るゝ能はざるものなるを知る。神は我にあらず、我は神にあらず自我なる心と、天地の心とは、一ならざるも、即ち自我なる心は、神なる心にあらざれど、天地の心の外に、自我なる心あるにあらず、神の外に、我ある にあらざるなり、自我なる心は、天地の心の所生所顯にして所謂現象我なり、小我なり、小我たり、現象我たる心は、大我たり、實在たる神の生たる愛子なり。然り實に、愛子なり。天地間に於て、人ほど尊貴なるもの、無ければなり、而も神の生めりと謂ふも、神の外に生れたるにあらず、神の中に即ち所謂御腹の中に生れ且

神を直に、本體と爲すものなり。黒住教祖は、人の本心は天照大神の分心なりと曰ひ、「天照らす神と人とは隔てなく直に、神ぞと思ふ嬉しさ」とも曰ひ或は誠の本體は天照大神の御心なりとも示したまひて、黒住教祖が神に於て、人の存在を認め、其の一體にして、不離本心は即ち神なりと認めたまひたるや、誠に疑ふべからず。而して一方、教祖は、天照大神を親神樣と稱へたまひ、「千早振る神の生み出す生の子よ、親の心を傷ましむるな」とも詠じたまひ、又「難有事は我も天地の子なり、我產子も天地の子なり」と曰ひ或は天の子なりと言はれたるを見れば、神人の關係に於て、單に一體的關係のみならず、親子的關係を有するもの、即ち神の子なるが故に、神るや爭ふべからず。而して親子的關係を有するものと見たまひ、心神と成れば即ち神なる旨明に宣と成るべき資格を有するものと見たまひ、心神と成れば即ち神なる旨明に宣言したまひぬ。然れども滔々たる世界、能く神人の一體的關係を悟り、親子的關係を知り、而も能く神と成りつゝあるや、黒住教祖は鬼の心に成りて鬼の行をすれば鬼なりと示したまひたるが、現實社會に於ける、人の生活は果して、神子らしき生活即ち神の子が、神の子たる性德を發揮して、將に神と成らんとしつ

つあるにや、寧ろ鬼の心にて、鬼の行を爲し居らずや。

滔々たる世間、神の心と成らず、鬼の心もて、鬼の行を爲しつゝありや、否や、之に對する黒住教祖の見解感想の如何を陳ぶるに先ち、予は尙ほ教祖の自我に對する見解に就き述ぶる所なかるべからず。

我われと思ふ我身は天の我

我ものとては一物もなし

黒住教祖は、斯く詠じたまひぬ、此の歌に於て、甚だ注意すべきは、天の我れなる語なり、天の我とは、何の意義なるやと、謂はゞ、恐らく天の御物たる我と謂ふの義なるべし。我身既に天の物たり、我か物とては、何もあるべき無きなり、黒住教祖に從へば、自我卽ち我は、虛無にあらず、天の御物として、天の御腹に有る者なり、聞くならく、釋尊は、自我ありと爲す觀念の迷想なるを說きて、人をして執着を脫せしめんとしたまひたりと、又基督は神の愛を說きて、人に罪を悔改め、神に歸せしめんとしたまひたりと、而して黒住教祖は天我れの理を說き、神人一體の實を証し、人をして難有く天の御腹に生活せしめんとしたまひたるなり。

而も教祖が自我の虛無を說かずして、天我を示し、罪の悔改を謂はずして、難有き神德を知らしめたまへるは、佛教家と謂はず、基督教家と謂はず、虛心平氣に、其の意義價値の如何を考索せられて然るべき所なるべし、蓋し天我の說や、確乎不拔の大眞理にして、獨り所謂我執を去らしむるのみにあらざるべし、不肖ながら予一個の經驗よりするも、耐へ難き困難に遭逢する時、煩悶憂愁の我を襲ひ來らんとする時、一たび天の我なるに想到せんか、胸裏濶然として、開け頭腦亦清涼に、元氣俄然として湧起し來るを覺へずんばあらず、予が過去の生涯に於て、幾度か同樣の經驗を繰返したるにや、予之を知らず、而も其の一たび教祖の神詠を想起し、天我の大眞理に逢着するや、未だ曾て、所謂御陰を蒙らざりし事、無しとは謂ひ得るなり。

黒住教祖は、罪に泣かしむるよりは、惠に泣かしめたまひぬ、罪を悔改めて、天父に歸せよと教ふるよりは、我を離れて、天に任せよと示したまひぬ、自我ありと思ふは迷なりと、は說きたまはざりしも、天の我を我が我れと思ふは、神と隔をつけるにて、罪惡の根本なる旨明示したまひぬ、黒住教祖の宗教に於ては、神德

を知る事が、大切なり、又神と人とは、本來が一體のものたるを知る事大切なり。而して自我が心にして、其の自我の心も、天の御物にて、天の御腹に在る者なれば、かりにも自分のものと思ひ、自分の勝手に、而も自身の力で何事も爲さんとするが、罪惡の根本、或は根本的罪惡にして、此の迷想邪念が、直に鬼になり、惡魔たるを、知る事甚だ大切なり、而も何故、之を迷想邪念と爲し、鬼なり、惡魔なりと爲すかと謂はゞ、天の御物なる我を、我がものと爲すは、大迷想にして、而もあらゆる煩悶、あらゆる罪惡の根本にして、其の害毒や、至て怖るべきものなればなり。若し、幸にして、人たる者、自我は、天の我にして、我ものにあらず、天の御物なるを自覺確認せんか、一切の私心私慾は、跡無く、至公至明の心を以て、而も憂愁無く煩悶無く、生々快活の心を以て、斯人生を樂むを得べし。何となれば、所謂我を離れ、天に任せ、直に神人一體的生活を送るを得ればなり、人苟も天の我たるを知り、而も神德の難有きを確認體得せんか、我を離れ、天に任せ、天命の儘に、難有く、何時迄も神の御腹に、生活し得るに至るや、疑無きなり。

黒住教祖の宗教に於て、甚だ大切なるは、神人の一體的關係を知り、而も神德の

難有き事、天地に難有き御神德の充滿せるを知り、而して、人は、難有き御神德の中に、天の御子にして、又天の御物として、生れ居れるものなるを知りて、天の子たる所以、即ち神の子たる所以の性德を全ふし、且善美の活動を爲さざるべからず、而も一切我が力を頼まず、我が意を出ださず、万事を天命の儘に爲さざるべからずと謂ふに在るなり。約言すれば、人は天と一體なる、天の子、天の我なれば、天の子として、親なる天の御心のみを、天の御力御敎のみに依て、遂行すべき筈のものなりと謂ふ事甚だ大切なりとす。

黒住教祖は、人生を悲觀せず、之を悲觀するは、天の御心に戻る所以と見たまひたり。然れども世間人情の常は、兎角くに、此の人生を悲觀し、又宗敎によりては、却て人生の悲觀すべきを敎へ、以てあらゆる執着心を脫せしめんと圖るあり。或は現世よりは、未來世を重んじ、現世の苦艱に堪へて、未來世の幸福を望むべきを敎ゆるもありて、其れ相當に、理由もあり、價値もあるべけれど、黒住敎祖の宗敎に於ては、現世は、寧ろ樂むべきもの、之を苦むは、人の心の爲す所にして、天に對し、恐れ多き事、即ち罪惡の一と爲せるなり。何故に、之を天に對して、恐多き

事と爲し、罪惡と爲すやの理由は、後章に於て、聊か詳述せんとする所にして、茲には、之を詳論するの要もなけれど、黒住教祖が、人生を悲觀せず、樂觀したまへる事實は、之を牢記し置くの要あるべし。

黒住教祖は曰く

誠に常に承知仕ながら我物と思ひ天より生付られし生物をいため廣大なる不生不滅の樂みを失ひ候世の憐さ限りなくおしき事也

○誠に世の中の事は其人の心ほどづゝの事と奉存候誠に古人の言にも心程の世を經ると申事の御座候を皆うつかりと口計りに流れて仕廻申候心神に成候へば則神也佛に成候へば佛也邪に成り候へば直に邪也

○乍憚御自身を御自身と不思召天地のものと思ひ給はばたゝ有難のみに相成り可申候

○皆人々天は天人は人と存候所より罪を作り候と奉存候……誠に我を離れて難有事も難有とすれば一切萬物一として難有からん物一つも無御座候只よき事をのみとれば皆よき事計成るものを惡事のみとるは甚

た殘念の事に奉存候

○あら嬉しかゝる樂しき世の中を、

誰か浮世を苦の土といふ

心一つ開くれば何か一つ苦しみはなし何につけても樂み難有事計也皆心一つを開くとふさくとの二つなり

○人は萬物の靈長たるもの故こゝろのもちやうにて何になりともなられるものゆゑ心を神にして神の行ひをすれば神也心を佛にして佛の行ひをすれば佛なり鬼の心になり鬼の行ひをすれば鬼なり畜生の心になれば畜生なり今何になるとも心のうちに拵候もの出來次第になるなり

○何事も心一つと奉存候其心を天に奉仕たゝ難有にて日を送り候へば是に勝る樂しみは無御座候

○生死も富も貧苦も何もかも心一の用ひやふなり

是のみにては、不充分なるべけれど、黒住教祖が、如何に、人生其者を觀したまひたるやは略明にして、其の樂觀の而も超越的なる事、最も注意すべき所なり。何

故に超越的なるやと謂はゝ、人間の生涯に於て或は苦あり、樂ありて、苦多きが爲に、悲むべき、厭ふべき人生なりと觀する、所謂厭世觀に對しての樂天觀、即ち人間の生涯には、苦もあれども、樂多ければ、寧ろ人生は樂しむべきなりと爲すが如き、苦樂を對照比較しての樂觀にあらずして、苦樂の對比を超越せる樂天觀なればなり、或は之を絶對的樂觀とも稱して、可なるべし黒住教祖に從へば、人は本來樂しむべき筈のものなり、何となれば有難き天の御腹に生活するものなればなり、有難き御神德の中に住みながら、我が心より苦しむは、恐にして、可憐の至とも謂つべきなり、生も死も、富も貧苦も、何もかも心一つの用樣に在りて、而も難有き事は、天地に充滿しあれば、樂は勝手次第なるなり、其れを樂まず、心から苦しみ惱むは、可憐にして、又惜しむべき事にてあるなり。

然れども其の苦しむ所以の根本は、天の御神德を知らざるに在り、天と人を、別に思ひ、御一體のものなる事、天の御物にして且天の愛子たるを知らざるにあり、天の御物にてありながら、我が物と思ひ、我と魔道に陷るなり、難有き御神德の中に住ながら、心からして、天と隔をつけ、天は天、人は人と、別々に考へ、我と罪

惡に陷り、我から鬼とも邪とも成り居れるが、大方の世の常の有樣なるぞ、惜むべし。

黒住教祖が、人生を悲觀せず、所謂超越的樂觀を唱道せられたるや、予は實に其の天を信ずるの深厚にして、且つ思想の雄大なるを感ぜざるあたはず、殊に生死も貧苦も心一つの用樣に在りと爲し、心一つ開くれば何か一つ苦しみはなし、何につけても樂難有事計なりと、宣言し、其の心を天に奉任たゞ難有にて日を送り候へば是に勝る樂みは無しと、明示せられたる如き、予は其の信仰思想の偉大と雄麗なるを感せざる能はず、嗚呼、古來聖賢の教へを垂るゝや、鮮しとせず、宗教的天才の信仰を教ふるや、亦乏しとせず、而も斯の如き唯心的教說と、樂天的訓諭を垂れしもの、何れの處にかある、苦樂も一に心の用樣に在りと斷言すると、共に其の心を天に任せで、難有く日々を送るを以て、至極の樂なりと訓示したまへるに於て、予は實に現實の人生をして、直に高天原たり、天國たり、極樂たらしむる大眞理の顯はれ居れるを見ずんばあらざるなり。

蓋し黒住教祖に於ては、天地に充滿せる難有き御神德を、自覺體認したまふて、

而も人は、心の用樣にて如何樣にもなれるものなるが、其の心を、天に任せなば、萬事苦に成る事無し、苦に成らねば、樂計なりと、自ら心に覺得したまひ、經驗したまふて、古來無比、未曾有の樂天觀を唱道したまひしなり。此に注意すべきは、教祖の樂天的に、人生を觀したまへるや、其の神觀世界觀に基くものにして、畢竟は神人の關係に於て、確乎たる自覺確信と、不拔の實驗覺識を有したまひしが故なる事是なり。黒住教祖が「天照らす神と人とは、隔なく直に神ぞと思ふ嬉しさ」「天照らす神の御腹に住む時は、ねてもさめても難有きかな」「難有き事のみのこと有がたいなり」等詠したまへるを見れば其の樂天觀は、神人の完全なる合一的經驗より來れるものなる事、毫も疑ふべからずして、唯理論的に、或は哲學的に人生は如何なるものなるか、如何にあるべきかなど、考究したまひたる結果にあらざるや、知るべきなり。

黒住教祖に於ては、神人一體の意識明確に、而して難有き御神德の中にての事にてあれば、何もかも難有からず、面白からざるものとては、無かりしなり。「小子

執行は天命次第行くも歸るも生るも死るも天地なれば少しも苦に成る事無御座候」死何ものぞ、生何ものぞ、生るも天地、死するも天地なり。而して天地は直に天照大神の宮なり、御腹なり、人生なるもの、畢竟するに、神の御腹にての人生なり。神の國は、死後に在るにあらず。今日唯今が神の國にて又神の代なり、極樂なり、天堂なり。現實の人生、實際の生活を、妄迷視し、虛無視し、悲觀厭世して、未來の幸福を求むるが如きは、黒住教祖の宗教にあらざるなり。黒住教祖の宗教に於ては、人生を尊重するなり。人の實際生活をして、天に任せたる心の安樂世界、自由自在の極樂淨土たらしめんとするなり。換言すれば、人をして神の子たる德を完ふせしめ、今日の神代をして、益々神代たらしめんとするものなりとも謂ふべきなり。

黒住教祖の人觀につき、尙ほ論述し置くべきは、教祖が、人心の自由を認めたまひたる事是なり。人心の自由とは、卽ち所謂意志の自由にして、教祖が、此の自由を認めたまひたるは、前に抄錄せる訓言論示に徵するも、甚だ明にして、人に自由の意志あればこそ、神の心にも、鬼の心にも成れるにて、人の生活は、神の御腹

にての生活にてありながら、人は神慮に背戻し、天命に違反する事、往々にしてあるなり。隨て神人は本來が一體的關係を有するものゝれ共、意識的には、神と相去り、相離れ得て而して此に罪惡の根源もあり、人性の尊重なる所以も存するなり。

人の心には自由あり、自由無ければ、心の活動無し。而して人の自ら心に、自由あるを悟るは、心に自らの活動あるを知ればなり。前にも陳へたる如く、人は自我の心なるを、自覺するなるが、其の心なるを自覺するも、自我の意識的活動の主體なるを知ればなり。若し心に意識的活動無からんか、人は自我の存在を知り得べからず。此の活動あればこそ、活動の主たる心あるを知り、而も此の活動を離れて、自我無きを知るが故に、意識活動の主體たる心が、即ち自我、自我は即ち心なるを知るなり。然れば自我の活動てふ事は、心の活動を意味し、心の活動は、心の活動し得る自由を意味するなり。蓋し自由無くんば、自我の活動無きなり。人には此の自我の自由、自ら活動し得る自由ありて、あらゆる自覺確識も、あらゆる云爲行動も爲し得るなり。實に人の心に、自由ありと謂ふ事は、人の人たる

所以、少くとも其の尊貴なる所以の一なりと謂はざるべからず。

人にして若し自由無き者ならんか、道德上何等の責任も無かるべく、又あらゆる智力活動、理性作用も存せざるべし。何となれば、或る物を知り、或る事を考ふると謂ふも、一の活動にして、自ら心の自由、自我の意志を含めばなり。善を善とし、惡を惡とし、眞を眞とし、僞を僞とする、倫理的の判別、認識的の斷定も、若し人の心にして、機械的に、或は必然的に動くものありとせば、如何にしてか成立するを得ん。所詮自由無くんば、眞も無く、善も無きなり。自由無き所には、知も無く、行も無きなり。加之、美も亦存する能はず。何となれば、如何なる美觀の、外界に存するも、美を美と感ずる心の活動無くば、人に取りては、美なるもの毫も存せざればなり。眞、善、美は、人の靈性の三要素にして、且つ人の活動の理想なりとは、哲學者の說く所、而も人自らが、其の三要素を、其の心に、又外界に發見するは、發見し得る活動を爲せばなり。活動のある所、自由あり、否自由のある所にこそ、活動あり、發見も存するなれ、否發見も、一の活動にして、自由無くんば、人は自らに於て將た天地に於て、眞、善、美の存在を發見し能はざるなり。本來人は自らの活

動を、自らに發見するが故に、天地萬物に活動を發見するなり。自我の心なるを知るが故に、天地の本體の心なるを知るなり。而して人は自我の或度に於て自由の活動を爲すものあるを自覺するが故に天地の本體たる心も、自由の活動を爲すものたるを知るなり。而も自我は、天地の大我たる神の所生所顯を知るが故に、神の自由は、無限絶對の自由たるを知るなり。人なる自我は、有限なれど、天なる大我は無限ならざるべからず。自我の活力、活能は不完全なれど、神の活力、活能は、完全圓滿ならざる可らず。而して、有限に不完なれども、人なる自我が、心にして、且活動の自由を有する事は、無限に絶對に、圓滿なる神が、心にして自由の活動を爲すと同じ。而も人の心は、神の心の中に在り、人の活動は、神の活動の中に在る者にして、人の自由も、神の自由の中に存するものたるや疑を容れざるなり。然り而して神の自由の中にての自由なるが故に、無制限の自由にあらず。人の活動は、全然神の支配を脱する能はず。天爲を離れて、人爲は存せざるなり。而も人爲なるもの存せざるにあらず。人は實に、自らの主と成りて、自ら活動し得るなり。此に於てか、乃ち善惡も成立し、罪惡も可能なり。何故に天は人を

して、罪に行かしめたまふや、惡に陷る事あらしめたまふやと、問ふは、何故に天は人なる自我を生みたまひしやと問ふに同じく、無價値の疑問なりと謂はざるべからず。人が人にてある以上、人が自由を有する尊貴なるものにてある以上、人が心の用樣にて、神とも成り、鬼とも成るは決して悲嘆すべき運命にあらざるなり。

人の心に、自由あるが故に、或は神とも、佛とも、鬼とも、畜生とも、成れるなるが、神の子が、神と成るは、當然の事として、親神たる天の欲したまふ所たるや、謂ふまでも無し。隨て鬼たり、畜生たらん人の心には、安全喜樂は存せざるなり。人が人らしく暮して、直正の幸福を得んと欲せば、必ずや、天の御心に副はずばあるべからず。天は總てを惠み、總てを愛したまへども、人の心ほどづゝに惠み、且つ愛したまふと謂ふは、人の心の用樣に由て、天の惠みたまひ、愛したまふ所以の樣々なるを謂ふにて、惡人は忌み、善人は好みたまふと謂ふにては無し。天は丸る生しの神にて、總てを愛し、總てを惠みたまふや、疑無きなり。されど天の愛、神の惠の顯れ方は、一樣にあらず、人

々の心ほどづゝ、其れ〳〵に、千差万別なりと謂ふべきなり。神の自由と、人の自由、神の活動と、人の活動との關係につき、序手ながら一言せんか、前に既に論じだる如く、神人は一體なれば、神の活動を離れて、人の活動無く、神の自由を離れて、人の自由無ければ、人の活動は、常に神の活動を離れて存する能はず、人が自由に爲すと謂ふも、神が然か爲すを容したまはずば、人は何も爲す能はず、人が惡心となり、惡事を爲すも、實は御蔭なりと謂はざるべからず、惡心となり惡事を爲せば、善心にて、善事を爲すとは、神の活動の顯れ方、神德の顯れ方に於て、大に異なるは、無論なれども、神の活動の一なるに至ては同じ、神の德の顯現なるに至ては同じと謂はざるべからず。然れば人の心の用樣、自由の用樣は、神の活動に影響するものなりと謂はざるべからず。人たるものが、善心をもちて、善事を爲すと、惡心をもちて、惡事を爲すとは、神の活動を多少左右するものなりと謂はざるべからず、黒住教祖は善人にも、罪ありと曰ひたるが、人が全く人ちしく、神の御心に副ふ心を以て、神の御思召のみ行はんとすると、鬼畜生の心となりて、鬼畜生の行を爲すとは、神の御德の顯れ方に於て、或は神の活動に於て、大

に異ならざるを得ざるなり。之を惟へば、人は罪惡に對し、悚然として恐怖せざるべからず。然れども如何なる罪惡の徒に對する神の活動も、完滿なる、難有き御德の顯現なれば、御惠みならざる無く、御蔭ならざる無し。一切難有き天命を漏れたるもの無きなり。斯く悟れば、人は罪惡に泣くを要せず、直に天命、神慮の有難きを悟りて、神の心と成り、神の行を爲すべきなり。而して神の心と成り、神の行を爲すとは、如何なる意義ぞや、又如何にしてか、神の心と成り、神の行を爲すべきか、換言すれば、完全なる神人合一の場に達し、以て人道を全ふすべき所以、果して何ぞや、斯かる疑問の解決、而も黒住教祖の宗教に於ける解決は、予が將に第三章黒住教祖の道德觀に於て、論述せんと欲する所なり。

然れども茲に一言し置くべきは、次章の道德觀と謂ひ、又第四章の永生觀と謂ひ、既に論述したる第一章の神觀及本章の人觀を離れて、別に存するにあらざれば、讀者に於て豫め前二章を精讀玩味せられん事を望まざるを得ず。蓋し神人の關係を離れて宗教無く、又宗教に於ての道德無し、而して宗教の優劣は、其の神觀人觀を見れば自ら明なり。而も神觀と人觀に基ける道德觀を見れば、宗

教の眞相眞價値蔽はんとするも、能はざるべし。予は本篇に於ては成るべく比較研究を避けたれば、黒住教祖の宗教が、如何に他と異なれるかは、明諒ならざるべきも、讀者にして虚心平氣に精讀せられなば、自ら其の一班は、諒得せられ得べしと思惟せずんばあらず。然れども予の見を以てすれば、黒住教祖の宗教に於ける、大特色は、其の神觀、人觀に基ける道德觀に於て、最も顯はれ居れるを惟はざる能はず、卽ち宗教の實踐的方向に於て、顯著なる大特色の、最も善く顯はれ居れるを見るなり。請ふ是より第三章黒住教祖の道德觀に移らん

第三章　黒住教祖の道德觀

本編も、漸くにして中心點に達しぬ。如何なる宗教も、其の道德、實踐の方面に於て完備せずんば、之を唱道するの價値乏しと謂はざるべからず。而して不肖ながら予が多年の研鑽と、經驗に據り考ふる所にては黒住教祖の道德觀に於て、健全完備の倫理的理想の現はれ居ると共に健全圓滿の宗教的意識、信仰の顯はれ居るを感せざる能はざるなり。本章は乃ち其の一班を明にせんと期する

所なるが、成るべく簡潔に、物せんとは、欲するも、恐らく本編中最も多くの紙面を要するものなるべく、又予の努力の最も多く費やさゝる所なるべし。讀者は幸に之を諒し、徐ろに沈思精察以て、黒住教祖の宗教、殊に其の道德觀を、成るべく充全に理解せられ、諸君の日常の生活に有力なる參照とせられん事、予の切に希ふ所なりとす。

抑も黒住教祖の道德觀は、倫理學上、所謂快樂說の要求と、克己說の要求を滿足するものにして、人をして一片の私心私慾をも斷絶せしむると共に、一塊の憂心煩悶をも消滅せしむるものなり。換言すれば至眞至善、至美の心を以て、道德の標準倫理の理想と爲すものにして、自ら人心の全要求に滿足を與ふるもの、正しく生活すると同時に、樂しく生活せしむるもの、完全なる義務心のみを以て行動すると、同時に完全なる喜樂の情を以て行動せしむるものなり若し西洋倫理學史に通するの士にして、予が是より叙述說明する所を看んか、恐らくカントの如き嚴正なる克己說も、或はベンザム、ミルの如き個人的或は公共的快樂說も、輓近盛に唱道せらるゝグリーン一派の自我實現說、パウルゼンの活動

説も、其の健全なる分子、其の最良の主張は、黒住教祖の道德觀に含まれ居るか、然らずば、黒住教祖の倫理思想を以て、總合統一すべきを諒する事、難からざるべし、否獨り西洋の倫理學説のみならず、和漢古今の道德説、佛耶兩教の道德論と雖も、其の良善なるものは、少くとも黒住教祖の道德觀を以て、之を總合し、之を統一し得べきなり、予の此の言を以て獨斷と爲す人は、暫く獨斷として可なり、大膽不遜なりと爲さば、暫く大膽不遜として可なり、然りと雖も、讀者は漫に予の言を嘲笑して休むべからず、必ずや進んで黒住教祖の道德觀が、果して如何なるものなるや、否やを考究すべきなり、其の倫理學者たると、何種の宗教家たるを問はず、冷靜なる頭腦と、公平なる態度を以て、予が是より説明論述する所を、精讀一番せられんか、恐らく予が讃辭の、必ずしも無理由にあらざるを諒せん。

蓋し黒住教祖の道德觀は、圓滿を理想と爲すものにて、圓滿の中には、總てが具備せざるべからず、至眞至善至美が、果して、人の現實にすべき理想なりとせば、圓滿は卽ち至眞至善至美を包含する理想なり、眞と謂ひ、善と謂ひ、美と謂ひ、人

の空想にあらざる限り、天地の實在は、之を具備せざるべからず、神は實に眞善美の完備せる、圓滿の實在なりと謂はざるべからず、人は、圓滿なる神の子にして、神の御德を現はすべき者なれば、自ら人としての圓滿の心を、具備するを以て、理想とせざるべからず、則ち人自らが、たとへ小と雖も、圓滿の心、眞善美を包容する心を有するを以て、人の理想とせざるべからざるなり、黒住教祖は誠はまる事なりと曰ひ、或は我も身も心もすべて、天地のたつた一の誠ばかりぞと詠じ、而も誠の本體は、天照大神の御心なりと説きたまひたるが、誠はまる事なるが故に、之を圓滿と解するは當然なりと謂ふべく、而も神人は一體にして、人の心の中にも、神は在すが故に、圓滿なる心は、全く神と一となれる心、卽ち完全に神と合一したる心が、卽ち誠にて、此の誠の中には、眞も、善も、美も含まれ居れりと謂はざるべからず、

誠てふ語は、黒住教祖の宗教に於ては、道德上の理想を示す語にして、其の圓滿を意味するや、既に言へるが如し、而して圓滿を意味するが故に、誠の心は、圓滿の心にして、圓滿の心は、直に至善至美にして且つ眞實無妄の心なりとす、普通

誠と謂へば、眞實無妄の意味に用ふるも、黒住教祖の宗教に於ては、眞實無妄なるのみならず至善、至美をも含むものと爲すなり。而も人は既に謂へる如く、神を離れて在るにあらず、人の本心は、直に天照大神の分心、分心なるが故に、即ち天照大神なり。人は神を本心とし、本體として居るものなれば人が眞實無妄にして、且至善至美の心と成るは、天地に實存せる眞善美の本體たる神と、全く合一する外にあるべからず。

全く神と合一すら爲せば、人の心は圓滿と成るなり。圓滿の心には、不滿足無し。何等の憂愁も、煩悶もあるべからず。如何なる不仁不義も、行ふべきにあらず。圓滿なる心は、至正至眞の心なり、至善至美の心なり。此の心を外にして、豈に道德上の理想あらんや。而も此の心を外にして、宗教の理想もあるべきにあらず。道德上の理想は、直に宗教の理想なりと謂はざるべからず。黒住教祖の宗教に於ては、道德の理想と宗教の理想を別たざるなり。黒住教祖は曰く、誠ほど代に有難きものは無し。誠一で四海兄弟と、而して四海兄弟とは、博愛を意味し、而も博愛の道德も、神人合一の誠より生ずる所と爲すなり。誠はまる事にて直に一

心一體なり。誠の本體は天照大神の御心、天照大神の心が、直に圓滿なる誠の本體にて、人は此の誠のみの心即ち天照大神の御心のみに成るを、外にして、人の道無く、神に對する道も、人に對する道も、一切天と一體なる誠の中にありて、他にあるにあらず。天と一體と成れば、天は圓滿の御心なれば、人の心も圓滿と成るなり。圓滿の心となれば、即ち所謂神の心と成れるにて、或は之を天心と謂ふも可なり。神の心にて、神の行を爲すを外にして、何等の人道もあるべきにあらず。人に對して爲すべきを、道德と謂ふか、神の心なる誠を外にして、眞正の道德あるべきにあらず。神に對して爲すべきを宗教と謂ひ或は信心と謂ふか、神の心なる誠を外にして、眞正なる宗教も、信心もあるべきにあらず。宗教即道德、道德即信心なりと謂ふべく、而も神人の完全なる合一、即ち所謂御一體の場を外にして、道德も、宗教もあるべからず。而して誠の心は、其の御一體の心にて丸き中に丸き心を有つが、誠の心と成れるなり、神の心と成れるなり。而して此の誠の心は、神の御心と一心一體にして、不離の心なれば、万事を天命の儘神慮の儘に行ふ心なり。即ち神の心にて神の行を爲すものなり。神人一體の場合に於て、

自我なる者滅するにあらず、自我なる心は却て大生氣、大活力を以て行動すれども、神の意を、神智人力にて行ふのみなれば、神の子たる者が、親なる神の御腹にて、親なる神の命の儘に、而も親なる神の御力に導かれて、一切を爲すものなれば神の心にて、神の行を爲すものなりと謂ふに、何等の不都合無かるべし。人を以て神の子なりと爲すは、基督教に於ても、然りと謂ふ者あらんが、予も亦然りとせん。而も神人の完全なる一體的關係に至ては、予之を基督教の經典に於て、發見せざるなり佛教は或る一派の説に依れば、多少神人の一體的關係を認むるが如し。而も自我と神の關係に於て、一體的關係親子的關係を明白に認め、而して完全なる神人合一を、簡明に説破せしもの、殊に其の道德觀に於て、圓滿なる心、直に神と一體なる心、至眞、至善、至美にして、正。し。善にして、且快活喜樂の心なりと爲す、雄大偉麗なる思想信仰を唱導せるもの、予は獨り黒住教祖の宗教に於て、見るを得たりと謂はざるべからず。

完全なる神人合一の心は、卽ち圓滿なる心にして、直に誠の心なる事、既に言へるが如し。而して人が、斯の誠の心のみと成り完全に神と合一し、一體とならん

には、全心全力を神の物とし、あらゆる活動自由を、全く神の命の儘に任せ用へざるべからず。前に言へる如く、神人は本來一體的不離の關係を有するなれども、人には自由ありて、自ら活動し得るものなれば、全く神と心を一にし、神の心にて神の行、或は眞の人たる行を爲すと爲さざるとは、人の自由なり。然れども人の道は、神と一心一體と成りて、神慮、天命の儘に行動するにあるや、論ずるまでも無きなり。苟も神の存在を信じ、人の神の子たるを知り、而も神は近く、人の心にも在すを知らば、神と一心一體と成りて、神慮、天命の儘に行動すべしと謂ふ、道德觀を否認すべき理由無し。而かも黒住教祖の道德觀は實に此の思想を以て中心と爲し、神體と爲すものなり。卽ち御一體の儘の心にて、万事天命の儘、行ふべしと謂ふが、黒住教祖道德觀の中心思想なりと謂ふべきなり。

黒住教祖の種々なる實踐的修養上の教訓は斯の思想を中心とし、標的と爲すものにして、吾れ人が眞に、御一體の心にて、万事を處すれば、眞正の道德は、勃まり、眞正の信心も、成れるものと謂ふべきなり。

黒住教祖曰く

○我を離れ候事のみ執行仕候……何事も天に御まかせ被成候はゞ万事たのしみの外は無御座候一切をしへは天よりおこる也其をしへを請て日々樂暮こそ信心なり

○何事も〳〵御任可被遊候……天道まかせ程世に安心成事は無御座候心安く暮し候こそ高天原と奉存候其原こそ神はましますと奉存候

○まことの本體は天照大神の御心也其有がたき事を一筋におもひ萬事御任申上是にて何事も氣遣なしと疑をはなれ候得ば直に御かけは目の前に顯れ可申候皆人々疑なしとは思ひ候得共苦に成たり病おこり候も皆疑也例の誠は丸事にてすぐに一心一體也……彌々以天照大神へ御任せ遊し萬事少も御氣遣なしと御定可被遊候

○何事も皆天命を樂時はもつたひなくも天照大神様のはら也

○道は誠に勤安き物也……其つとめといふは道に住事也其道と申は兼々申上る天照大神也則丸き御神也先便にも申上候通○支に奉任る者也其任する事安き事也唐も大和と是迄其所が氣の付ぬ事の不思議なる御事也道

といふと名に迷ひ誠の道をはなれたる人天下一とう也其道をはなれぬが我とく所の道也御縁ある御人は晝夜共に道に住またふべし少にても道をはなれたまふ時は直にあやうき事也御油斷あるべからず時に一首

天地にたゝ一筋の其道を
すぐに行てこそ樂しかりけれ

誠に〳〵一筋のみちが常のみちも常ほゞ難有事は無御座候

○萬事御一體と御定被遊候得者誠に大丈夫に御座候

○兼て申上候通り生物は御心に御座候間誠にさつぱり御任被成候得者おくびよふは少も〳〵出不申此所より外に道は無御座候……

天照す神と人との一心の
手つなゆるさずのりたまへ君

○何事も〳〵一切天に御任被成候はば誠に〳〵不思議に參り候物と奉存候

○何事も〳〵天に任せ候程強き事は無御座候

○何事も我をはなれ今日より心は則天照大神なりと只有かたしと餘念を離れ可被成候時に一首

天照す神の御心我心

へだてなきこそ有難きかな

以上抄錄せる所に據るも、黒住教祖の道德觀の果して、如何なるものなるか、略之を諒得すべきにあらずや、予は讀者の先づ之を熟讀玩味せられん事を望むや切なり。

宗教の理想は、神人の合一にありて、黒住教祖の宗教は、實に此の理想を、最も容易に、且つ完全に實現せんとする者なり、而して黒住教祖に於ては、此の理想實現の實踐的實行的教訓として、離我任天の大訓を傳へたまひぬ。予が前に抄錄したる教祖の訓言論辭に徵せんか、黒住教祖に於ては我を離れ、天に任するを、外にして、神人合一の道無く、隨て人の實踐すべき道德も眞正なる信心も無きなり、而も是れ誠に、黒住教祖の宗教に於ける、顯著なる大特色にして、且つ教祖に於て始めて現はれたる宗教的大眞理なりとす。人若し離我任天の眞意義を

悟り、之を實踐せんか、神人の完全なる合一は、即ち離我任天に在る事を悟るべく、我を離れ、天に任せたる心が、直に神と一體にして、至眞、至善、至美の心、誠の心なるを知るべし。

黒住教祖は、實に「我をはなれ候事のみ執行仕候と曰ひぬ」而して又「何事も天に御まかせ被成候はゞ万事たのしみの外は無御座」と明言したまひぬ。茲に注意す可は、教祖自が、我を離るゝ事のみ執行すと曰ひ、而して他に對しては、何事も天に任せなば、万事たのしみのみと斷言し、任天を勸誘したまへるにあり。聞くならく、釋尊は大覺を得て後、種々なる方便を以て、衆生を濟度せんと務めたまひたりと、而も釋尊の得たる大覺の眞意義、世に明ならず。吾れ人をして佛教の難解を嘆せしむ。耶蘇基督は天父の愛を說き、罪の悔改を唱へ、且つ種々なる奇蹟を行ひ、殊に十字架にかゝりて、万民の罪を贖ひたまひたりと。而も贖の說は漸くにして、世の信を失ひ、奇蹟は、奇蹟たるの証無く、耶蘇の人格論益々熾にして、信仰益々衰へんとし、基督教の本領容易に判すべからざる事と成りぬ。夫の所謂自由派神學者の言に依れば、基督教の本領は、基督の基督教に在り、而して

基督の基督教は、神を天父と信じて、之を愛し、人類を同胞として、互に相愛するに在りと。基督教は、果して、單り神を天父と信じて愛し奉り、人類を同胞として、互に相愛するにあるか、或は基督の如く神を信じ、人に對して行ふにあるか、予は耶蘇基督其人を尊敬すべしと爲す者なる事、釋尊其人を尊敬すべしと爲す者なるが如し、否基督釋尊のみならず、支那の孔夫子も、希臘のソークラテース、又將た如何なる聖賢君子にせよ、天に對して有難く敬愛すべしと爲す者なり、故に佛教にせよ、基督教にせよ、決して之を罵詈排斥せんとするの意志あるにあらず。然れども新なる大宗教を要求する人、現代の一大要求なるを感ずるもの、佛教家と謂ず、基督教家と謂はず漫に我田引水の陋態を固持せず、宗教其の者、眞理其の者を標的として、攻究せられん事を望まざるを得ず。而も予は黒住教祖の宗教に於て、現代人心の要求を滿足せしむるものゝ具備するを信じ、佛教家と基督教家たるを問はず、進んで黒住教祖の宗教を研鑽せられて、然るべきものなるを信ずるが故に、方に不肖ながら、黒住教祖の宗教に於ける、大特色とも稱すべき、離我任天の眞意義を、稍明にせんとするに當りはからずも、言を

釋尊基督に及ぼせしのみ亦他意あるに非ざるなり。

序でながらに尙ほ一言せんか、黒住教祖の宗教は、餘程佛教に似たるが如く、又基督教に似たる所あるが如し、例へば佛教に於て心外無別法を說き、卽身成佛を說ずるが如き、亦は禪に於て無を重んじ、無念無想を唱ふるが如き、或は淨土眞宗にて、他力を主とし、念佛歸命を說くが如き、黒住教祖の宗教に於て、類似の点無しと謂ふべからず、試に思へ、卽身成佛は、其解釋の如何に由ては、所謂神人一體にあらずや、心外無別法は、心のみ實有と見るものにて、廣き世界も我が一心の內にありとの教祖の言と、似たらずや、而も離我任天に於ける、實際修行の方として、無念成れとは、教祖の一訓辭にして、又無を養へとの教語もあり、此邊餘程禪的なりと謂つべし、而して天照大神を、念じ、信じて、任すべしと謂ふが如き、所謂南無阿彌陀佛の意義に近からずや、黒住教祖の宗教、豈に佛教に似たる所無からんや。

次に基督教に就て謂はんか、基督教にて神の愛を說き、而して神の導を祈るが如き、黒住教祖の宗教に近きものありと謂はざるべからず、且つ試みに夫のバ

イブルを一閲せんか、保羅の書翰其他に於て黒住教祖の訓誡に類似せる金言、名句必しも鮮少ならざるなりされば基督教亦黒住教祖の宗教に似たる所ありと謂はざるべからず然りと雖も予は黒住教祖の宗教に於て全く佛教基督教を超越せるもの他に比類無き大特色の存するを疑ふ能はず而して離我任天の教の如き少くとも之が大特色の一なるを認めざる能はざるなり蓋し離我任天は人をして完全なる神人の合一に至らしむる所以にして而も予の他に發見し能はざる大教なればなり、讀者試に前に掲げたる我を離るゝ事のみ執行すとの教祖の自白と天に任せよとの垂教に就き考察せよ離我任天の教は簡明にして而も宗教的大眞理を現はすもの他に比類無き偉訓なりと謂はざるべからず然れども離我任天の眞意義は果して如何是れ予の先づ説明せんと欲する所なり黒住教祖の遺訓に從へば我を離るゝは一切我が物との觀念を去り而して一切我が智我が力我が心にて爲さゝるにあり換言すれば少も我が我れてふ觀念を出さず一切を我にて自分にて爲さゝるに在り教祖が我が我れと思ふ我身は天の城我物とても一物もなしと詠じたまひたると身

も我も心もすてゝ天地のたつた一の誠ばかりにと曰ひたると又何事も天の爲すのと思ひなば苦にもせぬにも成らぬものなりと歌ひたまひたるなど併せ考ふれば我がものと思ひ自分で自分の心を爲すが我にて我かとのと思はず自分で自分の心を爲さゝるが我を離るゝにて即ち身も我と心と一切すてゝ天地のたつた一の誠たる神の御心任せに爲すが我を離る修行なりと解すべきなりされば我を離るゝ事が遂に神の御心と一になる事にして又天に任する事なりと解すべきなり

我を離るゝと天に任すとは別事にあらず、我を離れずば、天に任すること能はず、天に任せざれば、我を離れたるにあらず。一にして二、二にして、一なりと謂はざるべからず。而して全く我を離れたる心は、全く天に任せたる心なり、全く天に任せざるは、それだけ未だ我を離れざるなり。黒住教祖の宗教は、全く離れ、全く任するは神を信ずるの至れるものに、全く任する宗教なり。而して全く離れ、全く任するは神を信ずるの至れるものにして、圓滿に神に信頼し、圓滿に神に服從する心にて、此心が即ち圓滿なる神と一となれる心直に圓滿の心、誠の心なりと謂ふべきなり。宗教を口にするもの、

動もすれば、神人の合一を言ふ而も彼の人々の所謂神人の合一とは如何なるものぞ。神人合一の言は爲し易し而かも神人合一の内容は如何、人をして神と合一せしむる所以の道は、果して何ぞや。黒住教祖は我を離る事のみ執行すと宣言したまひぬ。何となれば、教祖に於ては我を離るゝを外にして、宗教無く、信心無く、道徳無ければなり。神人の完全なる合一は、人か我を全く離るゝの外無く、我を離るれば、天が人を至眞、至善、至美に導きたまへばなり。人間總ての性徳は、圓滿に發展し、人間總ての職分は、自然と勤まればなり則ち人心の全要求が此に滿足を得ればなり、少くも人の心は正しく且つ喜樂の情に充つべきなり、而も心の正しく、して且つ喜樂の情に充ちたるを外にして、善美の心、至眞の心あらんや。佛教の目的も、所詮は轉迷開悟、離苦得樂にあらずや。基督教も人をして、罪を去り、神と一なる喜樂の生涯に入るを以て目的とせずや、東西古今の倫理説も、畢竟は、人をして、正しく且つ滿足せしむるにあらずや。而も離我の實行は、黒住教祖の執行せられし所にして、且つ廣く世に宣傳せんとせられし所、實に古今未曾有の大教なりと謂はざるべからず、何となれば、神人合一の目的に

至ては、珍ならずとするも、離我の教は、全く獨創の大識見なればなり。

離我の訓は、黒住教祖獨創の大識見なるのみならず、教祖は、實に身親から之を實踐躬行して、完全なる神人合一の意識に到達したまひたるなり。而して離我が直に任天なれば、離我の訓は、任天の教を外にして解すべからず。予は離我を以て、黒住教祖獨想の大識見なりと言ふは、任天と一なる離我を指ざせるなれば、寧ろ離我任天の訓は、黒住教祖の獨創の大識見なりと謂ふを可なりとせん。

誠に斯かる意義にての離我或は任天は、予之を古今如何なる宗教如何なる學説にも發見せざるなり。而して大に注意すべきは、教祖の離我の効驗任天の効果につき示したまひたる所なり。曰く「何事も天に御まかせ被成候はゝ萬事たのしみのみに御座候」と。簡單なる章句なれども、絶大の意義を包含すと稱せざるべからず。何事も天に任すとせば、是れ全くの信頼なり、信任なり、所謂丸る任なり。而も丸る任せを爲せば、万事樂みの外無しと云ふ。斯は、如何なる斷言ぞ。如何なる大福音ぞや。予は基督教のバイブルに於て、或は佛家の所説に於て、任すを以て直に道を説き、而も人をして極樂の生涯に入らしめんとしたるもの

あるを知らざるなり。而して何故に、黒住教祖は、任天を以て、喜樂のみ存するの道を爲したまひしやと謂ふに、教祖自ら說きて曰く

一切をしへは天よりおこる也其をしへ請けて日々樂み暮すこそ信心なり人、全く天に任せなば、一切教は、天より起るなり。人、此の天の教を請けて、所謂天命の儘に、而も我を離れたる心にて行動云爲し、以て此世に處す。成程苦は無かるべき筈なり、あるものは樂みばかりなり萬事たのしみの外無しとの言堅剛なる基礎あり、健全なる理由ありと謂はざるべからず。傳へ聞く耶蘇基督は人の衣食住に煩悶するを警め、先つ神の國を求めよと敎へたまひたりと、又釋尊もあらゆる煩惱を去れよと示したまひたりと。而も耶蘇も、釋尊も我を離れ、天に任せ、天の敎を請けて日々樂み暮せよとは、示されしを聞かざるなり釋尊の事は、暫く措き、耶蘇基督の如き、其の宗敎的意識信仰に於て、同情を表すべきもの、一にして止まらざるべしと雖も、之を黒住敎祖の宗敎的意識に對照すれば、未だしのものありきと謂はざるべからず。斯は素より夫のバイブルに記されたる所に據て言ふなるが、耶蘇は、神の愛を說き、全心全力を盡して、神を愛すべ

き旨示したるも、所謂丸る任せの敎訓は存せざるなり、又耶蘇は我を離るゝ事のみ執行したりとは許すべからず。兎に角に、耶蘇基督に於ては、黒住敎祖に於けるが如く、神人一體の敎說明白ならず。殊に何事も天に任しなば、萬事樂みの外は無しとの思想顯はれ居るを見ざるなり。耶蘇の敎を、福音なりと謂ふか、黒住敎祖の敎は、大福音なりと謂はざるべからず。黒住敎祖自からも曰へり「任する事安き事也唐も大和も其所が氣の付かぬ事の不思議なる御事なり」と、實に然り、唐も大和も氣の付く人格出でざりしなり。否獨り唐大和のみならず、東西古今に、何人も氣付かざりし大眞理、大福音は、天より黒住敎祖に賜りたるものなるぞ、尊としとやいはむ。希くば黒住てふ名に惑ふ勿れ。我を離れて、天に任する事が、人の眞正の道德にして、且つ眞正の宗敎なれば、何人も其の眞意義を悟りて、神人合一の理想を實現せざるべからず。一種の宗派心を以て、判斷の公平を失ふが如きは、宗敎家の最も愼むべき所なるべし。若し離我任天の敎說は、不合理なりと謂ふか、請ふ其の理由を示せ。若し黒住敎祖獨創の見にあらずと謂ふか、請ふ予の惑ひを

質せ兎に角に、予は離我任天の教説に於て、其の實行に於て黒住教祖の宗教の、大特色の顯はれ居るのみならず、滔々たる世の、罪惡に沈淪せる可憐なる蒼生、否同胞をして、罪なく穢れなく、正善にして、且つ慨はしき喜樂の生涯に入らしむるは、離我任天の宣傳に在るを疑ふ能はざるなり。

離我任天の眞意義につきては、幾分か、既に其の大體を略述したるも、たとへ重複の嫌あるにせよ、黒住教祖の道德觀に於ては任天實行の効驗を、考索論述する事、必要なりとす、不肖ながら予は、右の順序に由り、暫く叙述說明を試みんとす。

第一離我任天の原理如何と謂へば、既に論述したる所にても、略明なる如く、一切が天の物にて、我が物とては、一物も無く、人は天の御用を勤むるを以て、天に對する、第一の義務とすべきなり。否人の一切の義務は、結局天の御用を勤むる範圍内の事ならざるべからず。臣民として、大君又は國家に對する義務も、子として、親に對する義務も、人類として、同胞相愛する義務も、天に對する御用を勤むる細目たるに過ぎざるなり。忠孝も、博愛も、如何なる德義、善事にせよ、天に對

する覺悟を以て、爲すべきにて、即ち天の御用を勤むる一として心得、之を重んせざるべからず親として子を教育するも、君として民を治むるも、或は政治家、教育家、實業家、其の身分職責の如何を問はず、一切天に對する義務、御用として、之を爲さゞるべからず。人の身分により、職業により、或は時により、處により、人の爲すべき所のもの千種万樣なりとするも、天に對する義務として、天の御用の一として、之を成し遂げざるべからざるに至つては、皆な一なりと謂ふべし。果して、一切が天の御物にして天の御用を、勤むるが、人の道なりとせば一切の事柄に於て、天意に合するを旨とせざるべからず、一切が天の物にして、人は天意に合ふ樣、即ち天意の儘に行ふべきものたるなり。苟も天地の本體が、神即天にして、且つ神意即ち天の御思召の、何物にも、何事にも、在るを知らば、人は、天の物として、天の御思召の在る所を果し、又何事を爲すにも、天の御思召、即神意に合する樣、爲すべきは、明白の理なりとす天の物にて、ありながら、我が物と思ひ、我が智慮、分別を以て、我が私心私慾を以て、自らの爲に、或は他人の爲に、行動云爲するは、明に背理の事にして、天に對する罪惡なりと謂はざる可らず。我が物

にあらざるに、我が物と思ひ、天意、神慮の如何を顧みず、我儘勝手に働くは、誠に人の道にあらず、天に對して、恐多き御事なりと、謂はざるべからず。而も世間、幾人か我が物と思ひ、我が智慮分別を以て、一切を行ふ者にあらざるぞ。たとへ善人と、世より尊敬せらるゝものにせよ。黒住教祖の宗教より、看れば、正に罪あるもの、甚だ多しと謂はざるべからず。何となれば、彼輩未だ大道を知らず、神を離れて、自分勝手に動けばなり。

既に天の物にして、天の御用のみを勤むるが、人の道なりとせば、一切天意の儘、神慮の儘、勤め行ふべきは、當然なり、然るに、天意、神慮の如何を顧みず、我智、我慾、我力を以て、勤め行ふは、決して、天の御心に合ふ所以にあらざるなり。天の御用のみ勤むべきを知らば、天の御思召、御命令をうけて、一切を勤め、行ふべき筈ならずや。天の心は、天之を知らしめたまふのみ。而も天が知らしめたまはずんば、人は天の御用を、天の御思召に合ふ樣爲し能はざる事無論なり。

天の物にて、天の御用を勤むべき、人は天と一體不離のものなれば、人が天の、御用を、天の御思召の儘に、天命の儘に、行はん事は、不可能の事にあらず。天と一體

なる人にてあれば、天に任せなば、一體不離なる天は、必ず人に教を賜ふべきなり。

人は直接、天より教を受けて、教の儘に、行ふの信仰なくば、人は天の御用を、天意の儘に行ふべからず、人が我を離れて、一切天の命の儘に、行ふに於て、始めて天意の儘に、神慮の儘に、行ひ得るなり。されば人が全く神と合一に至り、而して後神の意の儘に、行ひ得るものにして、而も其の全く神と合一するは、全く神の御心のみとなる即ち我を離れて、全く天に任すの外あるべからず。全く我を離れて、天に任したる心は、少も私心私慾無き、至公至明の天心なり。神と一體の心なり。人此の一體の心となりて、始めて天の御用を天の御思召の儘に行ひ得るなり。天の心と一ならずして豈に天意を知り得んや。

天の心と一となりてこそ、天意神慮は知り得るなれ。而して天の心と一となるは、少も我が物と思はず、我が思慮分別、我力を頼まず、全く天の御心任せに、全く我れ無き心とならざるべからず。全く我が思慮分別を頼まず、我が力に依らず、天の御思召を、天の御力、神の御德のみに依りて、成し行ふが、我を離れ、天に任せ

たる者の行動にて、斯の如く心得、斯の如く行ふが直に神人一體の人、神の心にて、神の行ひを成すものなりと謂ふべきなり。何故に、人は我を離れて、天に任せねばならぬかと謂へば、我を離れて、天に任せねば、天の御心の儘に行ふ能はざればなり。少しにても、我が我れを出だせば、其れだけ、天と離るゝにて、是れ罪惡なり。一切天の御物なれば、一切を、天の御物とし、一切天の御敎の儘に、而も天の御力のみに依りすがりて、勤め行ひなば、天の御力にて、天の御思召を行ふ譯なれば、万事成就せざる事無きなり、さりながら斯く云へば、既に離我任天の効用論となれば、茲にては詳しく謂はざるを可とす。而も離我任天の心は、全く神と一となれる心にて、神人一體の心神の御思召の儘に、働く心なる事は、最も忘るべからざる所なり。而して離我任天の原理は、以上聊か述べたる所にても、我の天の物たる事、即ち天の我にして、我が物とては、一物も無しと謂ふ事と、神人はもと一體的不離のものにして、人にして全く天の物として、天に丸る任せを爲さば、全く天意の儘、天命の儘に、行動し得べきものなる事にありと謂はざるべからず。

人力を盡して、而して後天に任するとか、又は人事を盡して、而して天命を待つとか謂ふが如きは、黒住教祖の所謂任天の場合にあらざるなり。黒住教祖に於ては、人力と神力とを別に見るが、抑も迷妄の見にて人は天と離れざるものなれば、人の力は、天の力を離れてあるにあらず。而して人の本心は、直ぐに天なれば、天に任すると謂ふも、實は本心の命令の儘に任するのみなりとは、謂へざるも、本心の儘に任する事なり本心の命令の儘に任するのみが、天に任するなりとは、謂へざるも、本心の儘に任する事は、天に任する上に於て、大切なる部分なり。人は本心が、直に天なるを知り、本心の命令が、天命なるを知るべきのみならず、天地の本體が、天にて、天地間一切天命、天の御思召の外にある物無ければ向ひ來る事柄も、天命と思ひて、修行すべきは、勿論なれども、天に任するに於て、甚だ大切なるは、本心の命令が、直に天命なるを、思ひて、本心の命の儘に、慰せず疑はず、難有く、是を行はざるべからず。我を離れたる心は、天と一體となれる心、天の御心任せの心なれば、天は必ず、万事に於て敎を賜はるなり。我を離れたる心に於ては、所謂良心の命令が直ぐに天の命令なるなり。

人眞に善く、神人一體の理を悟り、而も神意の儘に、行はんとせば、所謂良心の命令を、直に天命と承知し、難有く天命の儘に行ふを以て、心とせざるべからず。少くとも、我を離れたる人の良心は、天心にして天と一體の心、良心の命令は、直に天命にして、良心の命に從ふは、卽ち天命に從ふもの、天に任するものと謂ふべきなり。

若し神人の關係、一體不離ならず、人は神の物、天の物にあらずとせば、我を離れて天に任すべき所以無かるべしと雖も、既に論じたる如く、神人の關係は、一體的不離のものにて、神の活動を離れて、人の活動無しとせば、而して人は神意、天慮の儘に、一切從ふべきものたるを、知らば、一切我を離れて、天に任せ、一切天の敎の儘に、勤め行ふべきは、人の正しき道なりと謂はざるべからざるなり。

人が全く我を離れ、天に任せなば、人の心にも、世界何れにも在す神は、我が心の內外に活動して、我を導きたまふべきなり。而して此の眞理、此の信仰を否定せん事は、神人の一體的關係を認むる限り、不可能なりと謂はざるべからず。

離我任天の原理に關しては、尙ほ論すべき点あるべきも、略右にて、明なるべけ

れば、次には、離我任天の實行に關して、聊か述ぶる事とせん。

如何にして、實際、我を離れ、天に任する事、可能なるや。是れ甚だ大切なる疑問なり。既に離我任天の人の道たるを、悟りたる上にて、如何せば我れを離れ天に任せて以て前に謂へる如く、完全なる神人合一に至るべきか、斯は實に甚だ肝要なる疑問と謂はざるべからず。

黒住教祖に從へば、念すると謂ふ事、秘と謂ふ事、生かすと謂ふ事、無念と謂ふ事、是等總てが離我任天の實行上に於て、大切なる修行なるが如し。請ふ順序を逐ふて、之を說明せん。

黒住教祖曰く

萬事何事も御計被成候には乍恐天照大神樣を、御念し被成候て其上にて、決而御氣遣者無御座と思召御取定可被爲下候

我を離れ、天に任する爲に、何人にても、又如何なる場合にても、念する事、必要なりとは、謂ふべからざるも、既に離我任天の實行に、經驗を積み、平素、概ね神と御一體の場に居るの自覺ある人を除きては、念すると謂ふ事而も敎祖が茲に曰

へる如く、萬事何事にても、之を爲す場合、天照大神樣を念じて、之を行ふ事、甚だ肝要なりと謂ふべきなり。

念ずると謂ふ事は、如何なる事なるかと、考ふれば、念ずる事が、直に我を離れ天に任する意味を含み居れるなり。我を離れ、天に任するために、念ずべしとは謂ものの念ずる事が、直に離我任天の實行なる事を、知らざるべからず。萬事を處するに、天照大神を念じて、處すべしと謂ふ事は、萬事を、天に任せて、御神慮、御蔭のみにて、之を爲すべしと謂ふも、同樣にて、其の御神慮任せ、御神德任せの、一の實行が、念ずる事にて、人は念ずる事に於て、實に我を離れ天に任せたる心、神と一と成れる心の場に達するなり。神を念じて事を爲すは神と一體の心、卽ち丸。る。任せの心を以て、事を爲すなり。念じて而して後、起る思慮、分別は、人の思慮分別にあらずして、天よりの敎へなり、神智、神慮なり、所謂天命なり。人が自己の思慮、分別を以て、何事をも、成さんとするが、抑も、の迷妄、罪惡にして、所謂我なり、一切万事を、爲すに全く御蔭のみにて、天命の儘、成さんと心がけ、而して　天照大神を念じて爲さば此の心や、其の場合に於ては、全く我を離れ天に任せたる心に

て、人の全く神と合一せる場合なり。斯の如く、万事神を念じて行ふ事とせば、邪念惡心等の起るべき筈も無く、難有く、面白く、天命を樂み暮し得べきなり。而して斯の如く万事を處するに神を念じて行ふ事が勤まれば、人は万事を處するに、我を離れ天に任する、實行、修行をも爲すものと謂ふべきなり。

念ずるてふ事には、絶對的信賴、信任を含みて、全く依りすがり、全く任せ奉る事を意味す。故に神を念ずる事直に我を離れ天に任する一の仕方なり。人萬事に處するに當りて、心に神を念じなば、其の時の心は、我を離れ天に任せたる心にて、又神と一となれる心なり。實は神と一となればこそ、我を離れ天に任する事が、出來たるにて、神を念ずれば、少くも其の瞬間は、神に全く信賴し、全く委任せるにて、同時に神と一となれるなり。神を信賴し、實際に御蔭のみにて行はんとする心は、我智、我力にて行ふの心にあらず。されど其の行はんとする事柄が、自分の爲ならで、天の御用の爲なる事の心が、甚だ大切にて、其の天の御用の爲、天の御爲の事柄のみに、自分の一切の仕事を爲すにあらずば、固よりたとへ事を爲すに、念じて行ひたりとて、そは我を離れ天に任せ、神と一となれるものとは

謂ふべからず。されど自分の事業、一切の勤を、天職、或は天の御用と心得、其の天職、天の御用を、天の御教、天の導のまゝに勤めんとの心を以て、一心専念に、即ち全く任する心を以て、而も一片の疑念なく、萬事を處するに當り、天を念じて、而して之を爲す事とせんか、斯かる心にて念じ、念じて少も疑はざる、大丈夫の心を以て、萬事を處せんか、是れ實に我を離れ天に任するに於て、甚だ有効なる實際の修行にて、又我を離れ天に任せ、以て神と一體たる實行なりと謂ふべきなり。事毎に念じて爲すの修行、實行を積まんか、眞に我を離れ天に任せたる人、天心の人、神の心にて、神の行を爲す人たるの性格、自ら成立するに至るべきなり。此に至ては、事毎に念ずるの修行を爲さずとも、常に神を離れず、所謂常に道に住むの人、常に神に任せたる誠の心を以て、難有く、面白く日々を送り得べしと雖も、人の心は動き易き物なれば、我を離れ天に任せ、常に道に住む修行として、常に、事毎に、成るべく念じて、處する事を怠らざる事、恐らく殆んど何人にも必要有効の修行なるべし。

兎に角に、離我任天の實行、神と合一して行動する上に於て、念ずる事は、甚だ有

効なる修行なりと謂はざるべからず。教祖は少にても道を離るゝ時は直にあやうき旨教へ示したまひたるが、其の少にても道を離れぬ修行を爲すは、少にても神に離れぬ修行を爲すにありて、其の少にても神を離れぬ修行としては、我を離れて天に任する修行、甚だ大切にて、而も神を念じて、万事を處する實行は、此の我を離れ天に任す實行、修行として、甚だ大切なる、又甚だ有効なるものなるを知るべきなり。

基督教にても、神の導を求むる事、大切となり居れるが如し。而して如何にして、神の導を實際に得らるゝやと謂へば、恐らく全く信頼して、心の中に神の教へを聞くの外無かるべし。而も黒住教祖の宗教に於ては天に對し、神に對し、何卒我を導きたまへと願ひ求むるにあらず。唯だ我を離れ、天に任する事を主と爲し、我を離れ、天に任せすら爲せば、一切教は天より賜ると爲すなり。故に神の導の存在を信ずる点は、基督教と同様なれども、黒住教祖の宗教に於ては、神の導を祈る事を爲さゝるなり。神よ、我を導きたまへと願はざるなり。黒住教祖の宗教に於ては、我を離れたる心は、直に神と一なる心にて、我を離れさへすれば、天に

任せさへすれば、天は我を導きたまふを信ず。されば、實行として、修行として、大切なるは、神に導を願ひ求むる事にあらずして、我を離れ、天に任する事が大切なるなり。

天は天、人は人と、別々に考へ、人が天に對し、何事に拘らず、斯く爲したまへと、願ひ求むるが如きは、未だ宗教的意義信仰の至らざるものと謂ふべきなり。

念ずる事は、祈禱と異なるや、否や、斯は少しく説明を要する所なり。祈禱は、神人の交通なりとは、基督教家の屢々言はるゝ所なるが、想ふに神に對し、或は感謝し、或は祈願する時、自ら神と合一する感あるが故に、神人の交通なりとの解も生ずるならんが、抑も神に對し、或は感謝し、或は祈願する事殊に祈願する事が、祈禱其の者の重要なる性質にて、神人の交通は、其の効驗の一なるべし、凡そ宗教に於て、神佛に祈願するてふ事は、甚だ大切の事と成り居り、祈禱卽ち祈願するに於て、神佛の御蔭を蒙るべしとは、概ね宗教信者の常なるが如し、中には感謝のみすべし、祈願に及ばずとの信仰を拘く者も、あるべけれども、否加之全く自力にて、少も神佛に信頼せず、隨て祈禱を排斥するが如きもあるべけれど

も、大方世の宗教、或は宗教信者は或る何かの形式に於て、或は感謝し、或は祈願する事ありて、祈禱てふ事は、先づ宗教界普通の現象と謂ふべし。而して基督教の如きは、祈禱を以て、信仰の生涯に於て甚だ大切なる勤と爲す者なるが如し。天父の恩惠を感謝し、且つ天父の導を祈りて、而して神の聖旨の儘に、日々生活せん事は恐らく最も高尚なる基督教的信仰生活の理想なるべし。予は斯かる信仰生活の理想に、多大の同情を有するものなりと雖も、黒住教祖の宗教に於ての、信仰生活の理想に比すれば未だしのものありと謂ざるべからず。蓋し黒住教祖の宗教に於ては、離我任天を、信仰生活の理想と爲すと同時に、普通の意義にての祈禱を必要とせず予の見を以てすれば、寧ろ程度の低きものと爲すものなればなり。換言すれば、普通の意義にての神に對する感謝、祈願は、黒住教祖の宗教に於ては、敢て必要とせざればなり、否獨り必要とせざるのみならず、却て不必要にして、幼稚なる信仰と爲すべきものなればなり。蓋し神を、心の裏に認め、神人の一体不離的關係と、親子的關係を認め、吾れ人の勤むべきは、一に我を離れ、天に任すにあれば、神よ我を導きたまへと祈るを要とせざるなり。吾

れ人の心だに、神と離れずは、神は吾れ人を導きたまふを疑はざるなり。吾れ人にして、全く我を離れ、天に任せなば、何等の求むべきもの、願ふべきものなきなり。吾れ人の願ひ求むべきは、我を離れ天に任する事のみ。而も神よ我をして我を離れしめたまへ、天に任するを得せしめたまへと、神に對して祈るべきにはあらず。我を離れ、天に任する事は、吾れ人が、自力にて爲すべき所爲し得べき所なり。吾れ人にして、神と一體なるを悟り、而して神の物なるを知り、神意、天命のみ行はんとせは、一向專念に而も直に、我を離れ天に任すれば足る。神は常に我の内外に在すなり。我は神の神德の内に在るなり。我なるもの、全心全力を神に投せんか、神は直に我に顯はれたまふなり。何んぞ、故らに神よ我を助けたまへ導きたまへと言はんや。神は、祈らざるも助を請はざるも、其の助くべきに、助け、導くべきに導きたまふや、必せり。然らずと爲す者は、未だ信仰の足らざるなり。神を信ずる事の深からざるなり。天は天、人は人と別に思ひ居れるなり。人荷も神人の一体不離なるを悟り、而も天の我にして天意を行ふが、人の道たるを知らば、人の勤むべきは、人の自由活動を、天意の儘に任する在るのみ。而して任す

る事、易き事なり。故らに、神よ導きたまへと云ふの要斷じて無きにあらずや。乃ち黒住教祖は、神の導を祈れと言はずして、たゞ念せよと教へたまひぬ。念する は、神を、恰も眼前に在すとして、斯く爲したまへと祈願するの謂にあらず。心の中にて神を念する事なり。心の中にて神を念ずるは、たゞ全く神にのみ、信頼する心狀態なり。是れ以上は、言語文字以て説明し難し。而も見樣によりては、祈禱の一種なりとも謂ふべく、祈禱と全く異りたるものとは謂ひ難なり。

念ずる事は、實に心中にて神に信頼し、全く神に任せ奉る事にして、普通祈禱に於ける、斯く爲したまへとか、助け導きたまへとか謂ふ如く、神に對し願ひ求むることにてはなし。念ずるは心の活動にて、主として信頼するにあり。祈禱する心の活動は、主として願ひ求るにあり。されば念ずる事と、祈禱とは、同じからずと謂はざるべからず。然れども、神に對し祈禱し、祈願する心は、幾分信頼の心ありてこそ、あり得る所にて、信頼の心無くば、少くとも眞面目なる祈禱、祈願は爲し得べからず。而して眞面目なる祈禱にてあれば、祈願にてあれば、神に對する信頼を含み居るなれば、若し眞面目に且つ信じて、祈らば、其の中に、自ら我を離

れ天に任する心を有する事と成るべし。されば念じて事を爲すも、祈りて導を求め、而して後、神の助導を疑はず、全く信頼して事を爲すも、神の導、天の教を受くるに於ては、同一なるべし。祈禱、祈願を爲すに於ては、祈禱、祈願に由て、神の御助、天の御導を受け得ると考へ、而も信じて祈り、疑はずして願へば、必ず神は聽きたまふと、一心決定して、神に祈り、神に求む其信じて疑無き心は、我を離れ天に任せたる心なれば、神と一と成れる心、全くの信頼心、信任心を得たるもの、神の御導、天の御教の、斯の如く祈り求むる者の上にもあるべきは、當然なりと謂ふべし。何となれば、願ひ求めず、直に神に念じ、始より信頼して、天の御教、御導を受くるに比すれば、思想の高下、信仰の優劣は、あれども、念ずるも、祈禱するも、信頼の心を以てする、信頼の活動なれば、同一の性質を有するもの、隨て同一の結果を有せずと謂ふべからざれば なり。然りと雖も祈禱し、祈願するを以て、神と交り、神の導、神の助を蒙る上に於いて、必要缺ぐべからずと爲すは、幼稚の信仰、未熟の見識なりと爲さゞるべからず。若し祈禱なるものを、廣義に解して、信頼する活動、其の者を、祈禱の本質と見んか、念ずる事も、祈禱の一なりと謂ふべし。

加之斯かる意氣にて、祈禱の語を用ひなば、念ずるは祈禱の形式、方法の最も進歩したるものとや、謂ふべきならん。而して實に、黒住教祖に於ては、斯の如き意氣の祈禱を是認し、隨て念ずる事を以て、離我任天の實行上、甚だ有効なる修行を爲したまへるなり。何となれば、祈は日乘りとも訓したまふて、御一體の場合、即ち全く神に任する所以と修行と見たまひたる事、毫も疑ふべからざればなり。されば黒住教祖の宗教に於ては、普通の意義にての祈禱を、必要と爲すものに、あらざるのみならず、神の助を、願ひ求むるが如きは、未だ信仰の至らざるもの、宗教的意義に於て、幼稚なるものと見ざるを得ざれども幼稚なるが故に、劣等なるが故に、之を排斥すべしと爲すにはあらず。普通の意義にての祈禱にも、健全なる分子あり、とするもの、所謂祈禱の効驗も、之を無視するものにあらざるなり。さりながら、黒住教祖の宗教に於ては、祈るよりは、念ずるを可とし、願ひ求めて、而して後、神の導、神の助を、信ずと謂ふが如き信仰は、決して其の是認し得る所にあらざるなり。蓋し神に對し、吾れ人の爲すべきは、神を離れざるにあり、神の御腹に住むにあり、而して其の御腹に住み、神より離れざるは、我を離れ

天に任する外あるべからず。所詮吾れ人にして、我を離れ天に任せすら爲さば、天は如何樣にも、吾れ人を導きたまふと信じ、たゞ我を離るゝ事のみ、天に任する事のみ、大切の勤と爲すが、黒住教祖の宗教なればなり。されば念する事も、我を離れ天に任する所以の、一方法、一修行と爲すのみにて、念する事のみが、唯一の方法、修行なりと爲すにあらざるなり。隨て、普通の意義の祈禱にても、眞面目に願ひ求めて、而して疑はずば、其の場合には知らず、覺へず、神に任せたるものなれば、神の御德は、蒙り得べしと爲すなり。故に如何に幼稚、劣等なるものと、雖も、敢て之を外道視し、排斥するを要とせざるなり。

離我任天の實行上、念する事の甚だ有効の修行なる事は、既に述べたる所にて、略明なるべければ、次に祓と謂ふ事につき、聊か證明する事とせん。

祓とは、一口に言へば、心の雲霧を、ばらふ事にて、一切の念慮を拂ひ去るは、即ち祓なり。所謂黒住教信者にて、日拜に於て或は神前に於て、御祓修行として、天津祝詞其の他を唱ふるが如きも、實は心の雲霧を拂ひ去るが、眼目にて、一切の念慮を去り我無き心を以て、神を拜するは、恐らく神を拜するに於て、當然の事なる

べし。黒住教祖の宗教に於ては、神と一體の心となりて、神を拜するを貴ぶなれば、神を拜するに於て、天津祝詞其の他を唱へて、以て神と一體の場、即ち一切の念慮なく、雲霧なき心に至る修行を爲すは、誠に當然の事と謂ふべきなり。然れども黒住教祖の宗教に於ては、たゞ所謂神を拜するに於て、天津祝詞其の他を唱ふべしと爲すにあらず。常に心の修行、我を離れ天に任する心の修行、或は其の心を保つ修行として、祓を重んずるにて、祓とは、天津祝詞其の他を唱ふる事にては無きなり。是等を唱ふるに於て、祓の修行も含まれ居れども、たとへ何も唱へずとも、常に心の雲霧を拂ふ修行、其の事が甚だ大切なるなり。

前に念する事につき、述べたるが、念する中にも、自ら祓の德備り居るにて、念ずれば、其の所に、自ら一切の雲霧を拂ひ去る事も出來るなれば、祓も、全く念する事と、無關係にてはなし、されど念する信頼を意味せず。念する中に、祓の德は、自らあれども、祓の中に、念する事ありとは謂ふべからず。故に念する事、直に祓なり、祓ふ事、直に念する事なりとは謂ふべからず。然れども念すると謂ひ、祓ふと謂ひ、同じく我を離れ天に任する爲め

の修行にて黒住教祖は祓を活かして用ふれば、外に道の修行無き旨明に示したまひたり。曰く、一口に申さばじやうばらひと申事を御忘れ不被成是を生て道申候得ば外に道は無御座と奉存候、ねてもさめても御心のはらひ一筋に御座候と、教祖が祓を如何なる意義にて用ひたまひたるや、亦自ら明なりと謂ふべし。黒住教祖が祓を重んじたまひたるは、蓋し心の雲霧を、拂ひ去りて、常に神と離れる樣致せば、是れ卽ち神と一體の場に居るにて、其の一體の場に至り、或は一體の心を保つには、一切我の起らぬ樣少にても我か思慮、分別の起りたる時、或は疑念、憂慮の起りたる時、其の思慮、分別、其の疑念、憂慮を拂ひ去る事、必要なればなり、約言すれば、全く我を離れ天に任せたる心に至り、或は其の心を保つには一切の思慮分別を拂ひ去る事、大切なればなり。吾れ人、殊に既に神人一體の關係、御神德の難有きを知り居れる者に於て、少も我を出ださず、一切自分の思慮、分別を拂ひ去れる場合は、卽ち神と合一せる心神の御心のみの場合なれば、常に一切を拂ふて、御心のみの場合に在るは、我を離れ天に任せたる心なり。自分の思慮分別としては、何も無き場合は、卽ち祓ひたる心にて、直に神と一

と成れる心なり。然るに神の一と成れる心に至り、或は其の心を保つを外にして、別に離我任天も無く、道の修行も無ければ、卽ち教祖は常祓を重んじたまひ、之を生して用ふるを外にして、道無しと曰ひたるなり。亦以て黒住教祖の宗教に於ける、祓の意義の如何なるものなるかを知るに足るべく、且つ離我任天の修行として、祓の價値如何をも知るを得べきなり而も茲に注意すべきは、祓を生して用ふると謂ふ事なり。而かして生かして用ふるとは如何なる意味なるやと考ふるに、恐らく離我任天の目的を忘れず、祓てふ事に拘泥せずして、所謂其の目的の爲に活用するにあるなり。祓ふて而して、神と一と成り、神智、神慮の顯はれ來れる場合、或は難有く、面白く感せらるる場合、其の神智、神慮、其の快活、歡喜の情をも拂ふべしと誤解せんか、斯は寧ろ取外しにて祓を活用せるものにあらざるなり。

次に生かすてふ事につき、説明せんか、黒住教祖曰く

○兼々申上置候通り道は御一心の一つに御座候何事も〳〵御生し被成候はゞみな生物と相成候よき事は不及申惡敎にても取成にて皆善事と相成候

……幾重にも〳〵御いかし可被下候

○道は一さひいかす事大一と奉存候何に付ても御いかし可被遊候

生かすとは、心を生かす事にて又心を養ふ事なり。而も萬事につきて、心を生かせば萬事が善事のみと成り、何事も生きる事と成るなり、而して生かすこと直に養ふ事にて、心を常に生かす修行は、心を養ふ修行なりと謂ふべし。教祖は、姿なき心一つをやしのふはかしこき人のしゆぎやうなるらん」と詠じたまひたるが、心を養ふは、又心を生かす事なりと謂ふべく、生かすと謂ひ養ふと謂ひ別の事にあらざるべし。而して何故に、教祖は道は一切いかす事大一なりと爲し、何に付てもいかせよと曰ひたるやと、考ふるに、是れ亦我を離れ天に任する修行なればなり。萬事少も心に苦にせず、善惡共に樂むは、我を離れ天に任する心なり。如何なる大難ありとも、少も爲に煩悶憂慮せず、何事につけても、天の難有き事を思ひ、少も心の累と爲さゃる時は、何事の爲にも、心を穢さず、動さず、却て其を善事と取り做して、萬事を生かして、心の養と成すを得べし。而して斯くの如く心を常に生かし養ふ事は、我を離れ天に任する一の修行なり。我を離れ天

に任せたる者に於ては、萬事に心を生かし、心を養ひ得るは、勿論の事なるが、其の萬事に心を生かし、心を養ふ樣に爲すが、又直ぐに我を忘れ天に任する修行なりと云ふべきなり。黒住教祖の宗教にては、所謂陰氣を忌むなるが何故に陰氣を忌むかと謂へば、陰氣は、面白き神の御心に違へばなり。而も人の陰氣にて、心中面白からず感じ居るは神と離れ居るが爲なり。人もし神と一體となれば、自ら面白かるべき筈、卽陽氣と成るべき筈なり。而して陽氣と成るは、我を離れ天に任する者に於ては、自然の事なれども、心を生かして、陰氣にならず、陽氣に成る樣、心がくる事が、又我を離れ天に任する修行なりと謂ふべきなり。例へば善心に成れば、善事は自ら勤まるものなれども、善事を成すが又善心に成る本なるが如く、人たるもの、全く我を離れ天に任せなば、自ら心が生き、何につけても、陰氣は、起らぬなれども、未た我を離れ天に任したる場に達せざる者には、心を生かして何につけても心を養ひ、陽氣に做す樣、心を用ふるが、我を離れ天に任する修行の一と成るなり。一切を我か物にあらずと考へ一切を御神德の中の物と考へ、惡事災難も何もかも修行と心得、少にても心を傷めず苦しめず、心

陽氣に萬事を樂みくらすに心がけなば、少も苦になる物無し、苦にならねば、樂計なり。樂計なれば、有難きのみなり。此の心は、直に我を離れ天に任せたる心なり。

故に又神と全く合一せる心なり。

黒住教祖は或は、念ずる事を以て、道の修行を教へ、或は祓を以て、生かすを以て、道の修行と教へたまへるも、皆な歸する所は、離我任天の修行を以て、御一體の場に至り、且つ其の場を離れざるに在り。夫の無念てふ事を教へたまへるも、亦然り、無念と謂へば、無念無想とも解すべきなるが、黒住教祖の宗教に所謂無念は、たゞ、無念無想にて在るの狀態を謂ふにあらず。少くとも予は然しかく考ふるなり。請ふ是より無念てふ意義及其の離我任天の修行たる所以を説明せん。

黒住教祖曰く

○何事も〳〵少も御分別なく天命に御任被遊候處無此上も難有御事に御座候

○彼心計の歌ようのものに

有る無きの中にすむべき無物を無と思ふな無き心にて……たゞ明暮難有のみにてなにもかもかんがへ不申云々

○幾重にも〳〵にも分別は少も〳〵入用に無之物と相見へ候

予の見を以てすれば、我を離れ天に任せたる心が、即ち無念の心にて、又無念の心は明暮難有のみにてなにもかも考へざる心なりと謂ふべし、隨て一切の思慮分別を去りて、難有のみと成る修行を爲すは、直に我を離れ天に任する修行なりと謂ふべきなり換言すれば我を離れ天に任せなば、自ら無念となり、難有のみの心となるのみならず難有のみの心となり、無念に成るが、又我を離れ天に任する所以の修行なりと謂ふべきなり。

されば離我任天と無念の關係は、密接不離なりと謂ふべく、而も無念を解して、たゞ無念無想の情態に、心を置くの謂のみと解すべきにあらざるなり。

既に屢々謂へる如く、黒住教祖の宗教にては、御一體と謂ふ事及離我任天が甚だ大切なる主眼にて、黒住教祖、一切の實行、垂教は、畢竟するに、此の二大思想の外にあらず。今茲に聊か辨せんとせる無念てふ事の如き、亦詮するに、御一體の

心と成る事、又我を離れ天に任したる心と成る外に存するにあらず、吾れ人が一切の思慮分別を去りて、難有くのみ思ふ心は、我を離れて、天に任せたる心、又實に神と合一せる心なり。無念にて勤むると謂ふは、思慮分別を去り、天命、天の御教の儘に勤むる心にて、全く我れを離れたる心、天に任せたる心、斯かる心を外にして、完全なる神人合一の心は存せざるなり。而して吾れ人が全く我を去りて、天に任せなば、自ら無念と成るべき筈なるが、吾れ人が實際に、我を去り、天に任する修行として、無念に成るを、勤むる事、實に一の大切なる修行實行なりと謂はざるべからず。

然れども無念に成りさへすれば、可なりと謂ふべきにあらず、無念に成る目的は、我を離れ天に任したる心を以て、万事を處するに在れば、たゞ無念にさへ成れば、可なりと謂ふべきにあらず。されば無念に成ると謂はんよりは、寧ろ無念にて勤むると謂ふ方、誤解を防ぐによかるべし。

人或は思慮分別を去るを以て、困難と爲し或は背理と爲さんが、斯は神人の一體的關係を知らず、離我任天の原理を知らざるが爲にして、予の既に論じ置き

たる所なれば今復、茲に辯ずるの要無きなり。而も尚ほ一言し置くべきは、無念てふ語に拘泥すべからざる事是なり、自我の念慮としては、一切を拂ひ去るべき事、既に言へる如くなれども、難有きのみの心と成るが、黒住教祖の宗教に於ては、無念てふ事の眞意義なれば、無念より生れ來る、天智、天命及難有き尊き感情、意志をも、無くせよとの意義に解すべからざる事、甚だ大切なりとす教祖が難有きのみにて、何もかも考へ不申と、曰ひたる程の意義にて、無念てふ事を考へずば、恐らくは、死灰枯木の如き、無活動の心を養はんとするの弊に陷る無しとせざるなり。然れども自我の思慮分別、我が我れてふ、觀念及之に附隨し生ずべき一切、神の御心任せならざる、感情、意志は、之を全く無き物とし、所謂有難きのみの感情にて、萬事を勤むるの覺悟無るべからざるや、勿論なりと謂はざるべからず。

予は是より離我任天の効驗、即ち其の實行の効果、影響につき、論述せんと期するなるが、之に先ち前に陳べたる離我任天の修行としての、念ずる事、祓の事、生かす事、無念の事、相互の關係につき、聊か尚ほ辯じ置くの要あるを見るなり。

念する事と、祓の關係は、既に幾分明にし置きたるが、念する中に、自ら祓の場合に至るあり、又心の生るあり、祓の中に、自ら無念と成るあり、無念と成り、而して心の生るありて、是等總てが、全く別物、別事にあらず、皆な我を離れ天に任する修行、實行の種々に現はるゝものたるに過ぎずして、眼目は、我を離れ天に任するに在り。所謂御道の修行に於ては、時と場合に由り、或は祓を主とすべきあり、生かすを主とすべきあり、無念を主とすべきあり、又人の如何に由りても、相違あるべしと雖も、苟も我を離れ天に任する實行を、心がくる者に於ては、何れをも、無視せず、何れをも活用して、眞に離我任天の場合を實行するを、怠るべからざるなり、而も其の何れをも活用するに當り、最も注意すべきは、其の何れも、別々のものにあらざる事にあり。然り而して予の見を以てすれば、殊に念ずる事並に常祓が、甚だ大切にて、念じて萬事を處し、且つ常に心の雲霧を拂ひて行かば、自ら心が生き、萬事が生きるのみならず無念にて、難有のみの心にも成るべきなり然れども此邊の事につきては、萬人必ず同一なりとは、限るべからず、人に由り、或は同一の人にても、場合に由り、たゝ念

するのみにて可なるもあるべく、祓ふのみにて可なるもあるべく、必ずしも限るべきにあらざるなり、而も念ずる事を怠らず、又祓ふ事を怠らずして、離我任天の場合を勤めんと期せば、自ら心も生き、無念にて難有く勤め行ひ得べきや、予の疑ひ能はざる所なり。而して吳々も忘るべからざるは、念ずると謂ひ、祓と謂ひ、生かすと謂ひ、無念と謂ひ、其の語に拘泥して、目的主眼を失ふべからざるに在るなり、念ずる事が、直に我を離れ天に任する事、祓ふ事が直に我を離れ天に任せて、御一體のみの心と成る事、生かす事が、直に祓にて、隨て又御一體の心、離我任天の慎の修行なる事、而して無念に勤むる事が、我を離れ天に任して心もて勤むる事に外ならず。故に離我任天を離れて、道の修行無し。必ずしも念する事、祓ふ事、生かす事、無念の事を別々に擧示するの要無きなり。されば離我任天の實行上是等が、必ず先づ行ふべき所なりと爲すにあらずして、離我任天の實行の仕方として、即ち離我任天の實行に於ける種々の方面たるに過ぎざる事を、承知し置く事、甚だ肝要なるなり、前にも既に說きたる如く、念ずる事が、直に離我任天の實行にて、念ずるが爲に、離我任天の場に至るのみならず、念ず

る事が、直に離我任天なり、祓ふと謂ふも、之と同じく、離我任天の實行を爲す所以にして、又離我任天其の者たるなり、生かすと謂ひ、無念と謂ひ、亦然り、生かす事、無念に成る事が離我任天を目的とせる修行にして、且つ離我任天の一實行たるなり。

若し念すると謂ひ、祓と謂ひ、生かすと謂ひ、無念と謂ひ、或は其の他、如何なる教語と雖も、離我任天を中心として之を觀ず個々別種の教訓と看る事とならば、斯は既に黒住教祖の宗教を脱逸せるものと謂ふべきなり。蓋し教祖は、明に一筋の道なるを斷言したまひ、又我を離るゝ事のみ執行すと曰ひ、道は眞に勤め易きものにして、任するの一事にありと、明示したまいたればなり。讀者幸に離我任天と、其の實行上の諸教訓とを、別視するの誤に陷る莫れ。請ふ是より、離我任天實行の効驗に就き、稍詳細に陳ぶる事とせん。

抑も離我任天の効驗たるや、言語文字の及び難きものありと雖も、恐らく個人的には人をして正しく、且つ樂しく生活せしむるに在りと謂ふべし。而して人心若し正しく且つ樂しく生活するを得んか、是れ卽ち正善を貴ぶ人心の道德的

要求と、快樂を求むる人心の本能的要求とを、兩ち滿足するものにして、所謂眞善美の理想を、實現するものとも稱すべく、亦倫理學上、所謂快樂說の要求と克己說の要求を充たすものと謂ふべきなり。而も離我任天の實行は、果して人心を正善ならしむると、共に快樂ならしむるを得るや、所謂眞善美の理想を、實現するを得るや、克己說と共に快樂說の要求を滿足せしむるや、否や、斯は不肖ながら、予の是より辯明せんと欲する所なり。

離我任天の意義及實行上の心得に就ては予の既に略論述したる所、我を離れ、天に任せたる心は、一片の私心私欲無き至眞至正の心なり。何となれば一切を、天の物とし、天の命、天の敎へのみに依て、思慮し行動する心なり、此の心豈に一片の私心私欲あらんや。少にても我が爲めてふ心もて、爲す思慮及一切の行動は、神の御心任せのものにあらずと爲し、天の命のみ、敎へ盡にのみ、思慮し、行動するに於て、何等の不正不善かあらん。夫のカントが善はたゞ善なるが爲に、之を行ふべし、義務心のみに依て爲す行動にあらずは、善ならずと主唱し、良心の命令を、神の命令と信じて、之に從ふが、宗教なりと說ける如きは、黒住教祖の宗教

に於て、天命の儘行ふべし、一切天の御教うけて行ふべしと謂ふに、近似せる所なるべく、予は實にカントの如き嚴肅なる克己説の要求も、離我任天の實行に於て、滿足され得るを信ぜざる能はず。而して我を離れ天に任せなば、神と合一したる心にて、何等の憂愁も、煩悶もあるべきにあらざれば、一切天命を、樂みて活動するの外あるべからず。

我を離れ天に任せ、神と一となれる心は、難有く、面白く、嬉しく、神慮天命をのみ行ふ心なり斯の心、豈に憂愁あらんや、煩悶あらんや、肉體の病苦も亦自ら消滅すべきなり。

人身體强健にして、而して心正しく且つ快活喜樂に、此人生に處するを得ると せば如何。人、我を離れて、天に任せ、一切神慮、天命の儘に、思慮行動するを得ると せば、是をしも眞にして善、善にして美なる生活を送る所以と爲さずして、亦何 をか眞善美を實現するものとや謂はん。而も予が茲に身體の强健を云へるや、他なし黒住教祖の宗教に於ては、我を離れ天に任せなば、病位は何んでも無き ものと爲せばなり。希くば語の俗なるを咎むるなかれ。教祖に於ては、人眞に我

を離れ天に任せなば、病も爲に全治すべしと爲したまひ、離我任天の實行に於て、積年の病苦も一朝にして消滅するあるは、疑ふべからざる實事なり。

離我任天は、心事なれども、其の影響や肉體にも及ぶなり。されば離我任天の効驗の一として、身體の强健を謂ふも、亦何等不都合なかるべし。然れども大切なるは、心の上にあり、離我任天の實行は、人の心をして如何ならしむるか否やは、其の最も大切なる所なり。而も既に言へる如く、我を離れ天に任せなば、至眞至正の心にて、且つ何等の憂苦あるなし、憂苦無ければ、安樂の心のみ、然らば則ち離我任天の實行は人をして、正しく且つ樂しく、生活せしむるもの、天照らす神の御腹に住むときはねてもさめても面白きかなの心狀態に於て、夫の快樂を至高善と爲す倫理説の要求をも充たすものにあらずや。

人若し正しく且つ樂しく生活するを得んか斯は實に幸福の狀態に在るものと謂ふべし幸福を求むるは、万人の希望なれども、幸福の何たるやに至ては、人必ずしも一樣に考へ居らず。或は名利を得るを以て幸福なりと思惟するあり。或は快樂を得るを以て幸福なりと思惟するありて、必ずしも一定せざるなり。

然れども眞正合理の幸福は、名利にあらず、快樂にあらず。人が人たる所以の性能を發揮し、養成して、活動の自由を得るに在り。換言すれば、人たるの性德を發展し、且つ自由自在に活動するに在り、輓近倫理學界に有力なる、自我實現說或は完全說並に活動說の如きも、要するに斯かる意義にての幸福を是認し、唱道するものたるに外ならざるなり。然り而して人は其の性能に於て、正しからん事の要求と、正しくあり得る事の自由を有すると共に、樂しまん事の願望欲求を有するなり。人の道は、唯だ正しく生活するに在り、正しく生活するには、あらゆる欲情を制せざるべからずと爲す克己說の人性を滿足する能はず、人をして動もすれば、不活動的に陷らしむるの弊を免れざるが如く、一方人の至高善は、たゞ快樂に在りとの說も、到底人をして滿足せしむる能はず、何となれば、人は快樂其の者を、直に至高善と爲し能はざる、先天的道德心を有すればなり。眞正合理の倫理說に於ては、人をして正しくあると共に樂しくあらしむる所のものならざるべからず、克己說と快樂說を、超越したる態度に於て、二者の要求を滿足するものにてあらざるべからず。恐らく此點に於て所謂自我實現說完

全說、或は活動說の如きは、克己說、快樂說等に勝れるものと謂ふべし。而して黒住教祖の宗教に含まれたる道德觀を、倫理學的に、命名するを得るとせんか、予は一種の完全說と稱すべきものにして、自ら自我の實現、活動主義をも包容するものと謂べく、隨てあらゆる倫理說の善所と長所を、幷有するものと思惟せざる能はざるなり。其の故如何となれば、黒住教祖は明に、誠を道德的理想と爲したまひ、而も誠は圓滿の謂にして、圓滿卽ち誠は、神の性德、人は神を本心とせるもの、人は誠の心圓滿の心を有せざるべからずと爲したまひて、圓滿を理想と爲したまひたるなれば、圓滿の意義にての完全說なりと謂ふべきは當然なればなり。教祖の詠歌にも「まるき中にまるき心を有つ人は、限り知られぬまる。中なり」と言へるがありて、天地の誠の中に、我を離れて其誠の德に、同化し、自我も一の誠の心となるは、人にして人の性德を完ふする所以、而も本來、人は天地の誠卽ち神を離れてあるにあらず、神は人の心にも在りたまひ、在りたまふが故に、人の心にも作動したまふなれば、吾れ人、我を離れ天に任せなば、直ぐに神人一體なり。自我は、天意神慮のみに依りて、天意神慮のみ行はんとす。卽ち誠

の心のみにて、誠のみを行はんとす。是れ豈に人の理想し得べき、最高至極の道徳にあらずや、而も神を理想とし又神は誠、即圓滿と見、圓滿なる神の中に在りて、圓滿の心を有せん事を期するものなる以上、宗教の理想たる神人合一の理想を實現すると同時に、人の性徳の圓滿を理想とする、倫理的要求を充たすものにあらずや、予は之を稱するに、一種の完全説を以てし、而もあらゆる健全なる倫理的要求を充たすものなりと謂ふに於て毫も失當なる所以を發見し能はざるなり。

離我任天の効驗が、個人的には、人をして正しく且つ樂しく生活せしむるものなる事既に略論述せる所なるが、而も斯は概括的に然かく言へるにて、正しく且つ樂しく生活するに於て、人のあらゆる任務が勤まるか、殊に我を離れさへすれば、人のあらゆる任務、善行が勤まるべきか、是れ予の聊か論明し置くべき所なり。然れども此に先ち正しく生活する事と、樂しく生活する事とは、各別事にあらずして、正しく生活する事が、直に樂しく生活する事樂しく生活する事が、直に正しく生活する事なるを、辯じ置かざるべからず。換言すれば正しくあ

ると謂ふ事と、樂しむと謂ふ事は、一方に於ては、正しく爲し、一方に於ては樂むと謂ふが如く、或は正しきが上に又樂しむと謂ふが如きにあらずして、正しき事其の事を樂み、樂む事其の事を正しと爲すが、黒住教祖の道徳觀の一特色なるを明にせざるべからず。

黒住教祖は「難有き文面白き嬉しきのみきをそなふぞ誠なりけれ」とも詠したまひ、面白きは、大神の御心なりとも示したまひ、我を離れ天に任せたる心は天命の儘、天の御教の儘、而も其の天命、其の御教を、難有く面白く嬉しきのみの心を以て、勤むるものと説きたまひ、如何なる憂慮、煩悶、怯懦、疑惑も、皆、我を離れず、天に任せざる、罪惡の致す所と爲したまひ、一切天にのみ信頼し奉り、少も疑はず、苦まず、難有く天命の儘、樂みくらすが人の道にて、難有く面白く嬉しくさへあれば、是れ誠なりと示したまへるなり。されば黒住教祖に於ては、疑惑、憂慮、怯懦も、以て罪惡と觀したまひ、人は難有き心、面白き心、嬉しき心、而も此三を具備せる心が、直に誠にて、神と一體なる心と爲したまへるなり。

抑も人は何が故に疑惑するか、憂慮するか、煩悶するか、怯懦なるか、畢竟は自我

を自我のものと爲し、而も自我の欲望を、自我の力にて果さんと欲するが爲にあらずや一切天のものなるを知り、身も我も心もすてゝ、天地の誠のみの心、即ち神に丸く任せの心とならば、何も憂慮すべきもの無く、煩悶すべき事無く、お病も生ずべきにあらず。一たび我を離れ天に任せんか、自我は神の御腹に在り、神のみ信頼し奉り、神德神力にのみ依り、天命神慮のみ、万事に於て遂行せんとす、其の天命と信ずる事が、即ち人の爲す可き善而して之を爲すが、正しくある事、而も其の正しくある事は、直に天命を樂む所以なり、難有く面白く嬉しく思ふて生活する所以なり。難有き事のみ思へ人はたゞけふのたふとき今の心の『向ふ事皆御かげかと思ひなばねてもさめても難有きかな』何事も天の爲すのと思ひなば苦にも世話にもならぬものなり『たのしみも我が樂と思ふまじたゞ天地の樂にして』如上三四の道歌にても、明なる如く、一切天命の儘に、勤め行ふ事、而も其の天命を難有く面白く嬉しく思ふ心のみにて行ふ事が、神の御心にかなふ正しき事にて、正しくあると謂ふ事と、樂しむと謂ふ事とは別事にあらざるや、黒住教祖の宗教に於ては無論の事と謂はざるべからず。

普通世人の考にては、正しき事は、好ましからずとも爲さゝるべからずとなすが、道德の要求なるが、黒住教祖の宗教に含まれたる道德に於ては、樂しんで、即ち好み且つ喜びて爲すにあらずんば、未だ眞の善を爲すものとは見ざるなり。難有く面白く嬉く思ふ心が、我を離れ天に任せたる心、樂しき心が直に正しき心、正しき心が、直に樂しき心なれば、樂しきのみの心にて、天命をのみ勤むるが、正しく生活する所以、正しきのみの心にて、天命をのみ勤むるが、樂しく生活する所以なり。實に正しきと同時に樂むと謂ふのみならず、正しくある事を樂とし、樂しくある事を樂むに於て、所謂人をして正しく且つ樂しく生活せしむるが、離我任天の大効驗なりと謂ふべく、黒住教祖道德觀の一大特色なりと謂はざるべからず。

何故に我を離れ天に任せなば、それにて万事の務が勤まるかと謂はゞ、我を離れ天に任したる心は、誠の心にて、神と一體、神慮天命のみに從ひて、万事を爲す心なれば一切の事天に任せて行ふ中、自ら一切事に於て、天命の儘行ひ得べく、時により、處により、又身分により、種々人間の爲すべき世の務、一切成らずと謂

ふ事無かるべきなり。

心誠となれば、前にも謂へる如く、圓滿の心となり、難有く面白く嬉しきのみにて、家族に對し、隣人に對し、將た國家に對し、社會に對し、其の隨時隨所に、天命の儘當に爲すべきを行ひ得べく、而も父母兄弟夫婦、一般人衆に對し、難有く、面白く嬉しく敬愛して、各宜に適ひたる行を爲し得べきなり。

約言すればあらゆる關係の者に對し、有難く思ひ、面白く思ひ、嬉しく思ふて、其れ〳〵に人の履むべき道を行き得べきなり。所謂忠孝の德義も、博愛の理想も、天と一なる誠我を離れ天に任せたる、正しき且樂しき心を以て、之を實際に行ひ得べきなり。黒住教祖は「天地にたゞ一筋の其の道を直に行こそ樂しかりけれ」と詠じたまひ、又道は誠勤め易きものなりと示したまひ、一切教は天より起ると明言したまひて、離我任天の實行に於て、たゞその一筋の道に於て、万事がとハのふ旨訓へたまひたるが、人の本心は、天照大神の分心にて、分心なるが故に、直に天照大神なれば、人は一に心の神を大切にし、所謂良心の命令を、神の命令と、思ひ、万事に其の神の命令のみ行はん事すら違へずば、是れ心の正直を保

つにて、其の天に任したる、正直の心のみにて、一切の人事に處せんか、個人的には、心自ら正しく、自ら樂しきのみならず、世界的には、四海兄弟の理想を實現し得べく、所謂黄金世界を、此の世に實現し、或は所謂神の國を、此世に實現し來る事、亦難きにあらざるなり。

黒住教祖の道德觀に於ては、人をして神と合一せしめ、其の合一したる心を以て、一切を神の爲に、神の御心の儘に、又神の御德の御力にのみ依て、成し遂げしめんとするものにして、天地に遍滿したまふ神は、人にして苟も、我を離れて、天に任せ、一切教を天より蒙りて、其の儘疑はず、慄れず、大丈夫なる勇健の意志至公至明なる智快活歡喜の情を以て、万事を處せんか、万事に、人を助け導きたまはざる筈無きなり。人たるもの、我を離れて天に任せ、本心の命令は、卽ち天の命令なりと信じ、天の命令にさへ從へば、大丈夫なりと信じ、少にても本心の命令に戻るは、天に逆ふものなりと悟り、只管に天の命の儘に任せ從はんと勤めて怠らずば、心豈に不正不善に陷らんや、其の行豈に不忠、不孝、不仁、不義なるあらんや。疑ふ勿れ、道は直に天照大神なり、任する事實に易き事なり、而して神に任

するは、即ち、道に住む事にて、之を外にして、眞正の道德も、宗教も存せざるなり。而して此の事の、唐も大和も氣付かざりしぞ、誠に不思議なる御事なるかな。否豈に獨り唐と大和のみならんや、西洋古來の哲人、及宗教家に於ても、全く此處に氣付きしものあるを、見ざるなり。聞かざるなり。黒住教祖の卓見亦驚くべきにあらずや、而も單り黒住教祖の卓見として驚きて休むべきにあらず。予は天地の神の、深奥なる惠愛の大發現として、黒住教祖でふ大人格が、此の世に生れ、斯の勤め易き而も圓滿なる道の顯はれたるものなるを信せざる能はざるなり。

離我任天の實際的効驗影響については、尙ほ論及すべきもの、一にして止まらざるべしと雖ども、本章は既に其の多くを述べたれば、之れを省略し、是より以上論述したる所に關し、起り得べき二三の疑問を想像し、聊か之を辯じ、以て一層黒住教祖の宗教に於ける道德觀の意義を明にし置かんと欲す。

人あり或は云はん、離我任天の訓は、人をして無爲ならしめ、無活動ならしむるものにあらずやと。是れ誠に生し得べき疑問なり。然りと雖も離我任天は、決し

て無爲ならしむるものにあらず、無活動ならしむるものにあらざるなり。蓋し我を離れ天に任せて、以て神と合一せる心は、神慮、天命の儘、疑はず、慮せず、而も快活勇健に喜樂に、云爲行動する心なり、神は活動の神にして、無爲無活動にあらず、人は神慮、天命の儘、活動せざらんとするも、能はざるべきなり。苟も神と一となれる心、即ち活動の神と一となれる心に於ては、絶へず活動的に、且つ進取的なるべきなり、たゞ絶へざる進取的、向上的活動も、常に大丈夫の心、安泰喜樂の情を以て爲さるべきなり。されば離我任天の實行は、決して人をして無爲ならしめ、無活動ならしむるものにあらざるなり。加之離我任天の實行其の事が、絶へざる活動を意味するにて、黒住教祖は、たゞみなくに任せ可被成候と示したまひ、或は少にても道を離るゝ時は、直に危き旨、戒めたまひて、絶へず油斷なく、道に住み、天命任せに爲すべき由、懇諭したまひたるなれば、其のたゞみなく、其の絶へず、油斷せず、天に任する事は、既に不斷の活動なるなり。任すと謂へば、無爲、無活動を意味するが如く、聞ゆべけれど、實は任する事が、一の而も大切なる活動なり。而して吾れ人が、我を離れ天に任すれば、一切教は天より起るなり、

日々其の教をうけて樂しみ暮すは、天命神慮の儘に、愉快に、喜樂に、活動する事たるのみ。誠に離我任天を解して、無爲、無活動を意味するが如く思惟するは、大誤解なりと謂はざるべからず。

次に、人或は離我任天を以て、完全に神人の合一を實現するものなりと謂へるに對し評して云はん、我を離れ天に任すればとて神と人の合一を得ん事難し、何となれば人には罪惡ありて、罪惡ある人が、直に神と一ならんと欲するも能はざるべければなりと、斯の如き批評亦起り得べき所なれども、罪惡の爲に、我を離れ天に任するとも、神と合一する能はずと爲すが如きは、畢竟、神人の一体的關係と、親子的關係を解せざるが爲にして、而も我を離れ天に任するが、罪惡を脱離する所以なるを知らざるなり。人一たび我を離れ天に任する實行を爲さんか、是れ罪惡より脱離して、神と一ならんとする者、神豈に人を拒否したまはんや。教祖も天に任するは、親に從ふ心と說きたまひたるが、身も我も心をすて、天地のたつた一の誠ばかりと成るは、全心全力を、神に献するものにして、孝の至忠の極、如何なる過去の罪惡も、消滅せざる爲し。一旦罪ある者は、贖なく

して、神と一となる事能はずと謂ふか、一切を神に献し、神慮、天命のみに任するこそ、眞正の贖なりと謂ふべけれ。神は天地の主なり、親なり、吾れ人我を離れ天に任するに於て、何ものか、神と人との合一を隔ぐるものあらん、我を離るれば足る、任すれば足る、之を外にして豈に贖なるものゝ必要あらんや。

神は、寸時も早く、人の我を離れ天に任するを好みたまふなるべし。過去の罪惡の爲に、離我任天の不可能、神人合一の不可能を謂ふが如きは、蓋し幼稚の見のみ、劣等の信仰のみ、黒住教祖の宗教に於ては、實に我を離るれば足ると爲すなり、天に任すれば足ると爲すなり、而して離我任天の大訓は、黒住教祖の宗教に於ける大特色のある所にして、又最も大切なる所、而も之を不合理なりとし、之を不都合なりと排斥せん事は、神人の一體的關係と、親子的關係を認むる者に於ては、不可能の事少くとも矛盾なり自家撞着なりと謂はざるべからず、何となれば、神と離れて在らざる人、而も神の子たる人が、全く我を離れて、天に任せ、神と御一體と成り、万事御一體の儘にて、即ち一切神に信頼し神の教の儘に樂みて生活し得べきは、甚だ明白なる道理なればなり。

論するものあり、或は云はん、天命神慮の儘、勤め行はん事は、基督教徒に於ても理想とする所にして、獨り黒住教祖の宗教に於てのみの事にあらずと。然り、天命神慮の儘、勤め行はん事は、基督教的信仰に於ても、其の理想とする所なるべしと雖も、我を離るゝに於て、神と一と成り、而して天命神慮の儘、樂みくらすべしとは、恐らく基督教のバイブルに於て、何人も發見し、能はざる所なるべし。たとへ目的は天命神慮の儘に、万事を遂行するに在りとするも、而も此点、基督教の、黒住教祖の宗教に、近似する点なりとすべきも、其の人をして天命神慮の儘に勤めしむる所以の道斷じて同一にあらざるなり。普通の意義の基督教にては、耶蘇を救主と信する事を要し、耶蘇の名に於て祈る事を要とし、或は十字架上の贖を信する事を要とす。而も此の如き事を信する事、現代の人心には、容易の事にあらざるなり。然れども耶蘇基督の宗教と、黒住教祖の宗教との稍精細なる比較講究は、予の茲に必要とする所にあらず。故に比較論は成るべく避くる所なるも、既に言へる如く、少くとも予は基督教のバイブルに於て、我を離るゝのみ修行すべし、或は何事も天に任すべしとの簡易にして、雄健なる道德觀、

「天照らす神の御腹に住むときはねてもさめても難有きかな」天照らす神と人とは隔なく直ぐに神ぞと思ふ嬉しさ「一切教は天よりおこる也其教を請て樂暮すが信心なり」天地にたゝ一筋の其道を直に行てそ樂しかりけれ」と云ふ如き、完全なる神人合一的意識信仰の現はれ居れるを、發見し能はざるなり。耶蘇基督の信仰的意識は、高尚のものにてありしなるべし。然れども、バイブルの記事に依れば、未だ我を離れたるものとは謂ふべからず。夫の有名なるゲッセマチの祈の如き、予は多大深厚の同情を表すると共に、神に對する信頼心の未だ至らざる所ありしを、認めざる能はざるなり。蓋し基督が「父よ御心にかなはゞ此杯をわれより取り離ち給へ、されどわが心のまゝをなさんとするにあらず、みこゝろに任せ給へ」と祈られたる、實に離我任天の場合に近似せるも未だ及ばざりし意識、信仰なりと評せざるべからず。父なる神の御心にかなふと否とは、神と一なる意識に於ては、自ら明白に知らるべき筈にて、又みこゝろに任せ給へよとは、我を離れ天に任せたる高等の意識よりは、言ふべき事にあらず。我を離れさへすれば、直ぐに一體神慮天命は乃ち之を知るべく、人は其の神慮天

命に任せさへすれば可なり。父なる神に對して、かなはゝと言ひ、任せたまへと言ふが如きは、未だ天は天、人は人と別に思へる迷惑の範圍を脱せざるものと評するも、何の不可かあらん。綱島梁川子の如きは、基督の此の祈を評して、世にも天地の親ごゝろに打任せたる子ごゝろの、最善、最高、最美、最強の發現ではなしと稱讃せられたれども、黒住教祖の宗教より言はゝ、惜むべし、未だ最善、最高、最美、最強の發現なりとは容すべからざるなり。兎に角に、黒住教祖の宗教に於ける、離我任天の訓、又離我離我任天の信仰意識はたとへ、近似せるものはありとも、全然同一の意義にて基督教のバイブルにも、發見し得る所にあらざるなり。誠に離我任天を以て、神と合一する所以と爲したまひたるは、黒住教祖獨創の大識見大自覺にして、而も天より賜りたる大啓示なりと謂ふべく、所謂天命直授にして、而も古今未曾有の御事なりと謂ふべきなり。夫の淨土眞宗にての他力信賴の信仰の如き亦離我任天の場に近きものなれども、主とする所は、死後未來の救濟にありて、現實の人生に於て、我を離れ、天に任せ、而して天命の儘一切を處すべしと謂ふにあらざれば、固より同日の談にあらざるなり。

黒住教祖の宗教に含まれたる道德觀に就ては、不完全ながら、以上論述說明せる所にて、暫く滿足せざるべからず、然れども今や本章を終るに先ち、夫の七ケ條の訓誡に就き、聊か一言し置かざるべからず。

七ケ條とは何ぞや、日々家內心得の事と題し、信心の事、腹を立て物を苦にする事、慢心にて人を見下す事、人の惡を見て己に惡心を增す事、無病の時家業を怠る事、誠の道に入りながら心に誠無き事、日々難有事を取外す事等の七ケ條より成れるものなり。黒住教祖は先づ此七ケ條に由て、親ら其の家庭に、眞の信心、眞の道德を實現せんと爲したまひ、且つ一般を此に則りて道に進ましめんと爲したまひたるなれば、黒住教祖の道德觀を說くに際しては、自ら此の七ケ條につき、言ふ所無き能はざるなり。然れども七ケ條につき、一々其意義を說明するが如きは、予の玆に企て得る所にあらず、又必要とする所にもあらず、予はたゞ大體的觀察を試みて休まんとす。

予の見を以てすれば、七ケ條は道を信するものゝ、常に心の鏡として、其の果して道に住み居れるか、我を離れ天に任せたる心にて生活し居れるか否やを、鑑

省するに於て、大切有効なる訓誡なりと謂ふべし。人若し眞に道に住み神と離れず、常に一筋の誠の道を、樂しみ居りなば、自ら七ヶ條の訓誡に含まれたる所を、悉く守り得べけれども、人の心は、動き易きものなれば、常に七ヶ條を、心の鋭として、離我任天の場を取外さぬ樣心がけざるべからず。然れども人若し黒住教祖の宗教は、其の道德の方面實踐の方面に於て、七ヶ條より成立するものとせんか、斯は甚だしき誤解なり。道、豈に七ヶ條のみにあらんや、道は唯一筋のみ而も一筋の道の應用は、獨り七ヶ條のみにあらず、千樣万樣なりとも稱すべし。何となれば、人間の此世に處するや、其の境遇に由り、事情に由り、天命の儘行ふべき事は、種々樣々なればなり。さりながら人若し七ヶ條を、心の鋭として、自らを處し、且人と交らんか、斯は離我任天の心を以て、万事に處し得るの人なりと謂ふべし。七ヶ條は離我任天の信仰、道德を中心とし、骨子とせるものにして、離我任天の實行出來ずば、七ヶ條に含まれたる教訓は、之を實行し得べからず、又七ヶ條の實行出來て、離我任天の勤らざる筈無し。離我任天と七ヶ條とは、一にして二、二にして一なる密接不離の關係を有するものと謂はざるべからず。然れども

黒住教祖の道德觀に於ける根本思想は、神人一體を基礎とせる、離我任天に在りと謂はざるべからず。此の根本思想を離れ、普通一般の意義にて、七ヶ條を解せん事は、到底不可能なりと謂ふ可なり本章黒住教祖の道德觀は、不圖も長文と成りぬ、謂ふ是より第四章黒住教祖の永生觀に移らん。

第四章　黒住教祖の永生觀

永生とは所謂生通也、黒住教祖は道直に生通なりと曰ひ、天照大神の御腹に住みて、ねてもさめても難有きのみの心、面白きのみの心が、直に無限久遠の生命を有すと爲したまひたるなり。

夫れ天地に無限の生命あり、久遠の活力あり、此の無限の生命、久遠の活力の本體が直に天照大神なり。黒住教祖が誠に道は六ヶ敷事は少しも無御座候兼々申上候通直に天照大神也さすればいきどうし也と曰ひ又道直に天照大神也と示したまひたるより考ふれば、天地に充滿せる生命活力と心を一にし、少も離れざる事は、我を離れ天に任せて、神と一體と成る事、所謂道に住む事にて、道

に住みさへすれば、即ち神と離れず、絶へず一體の心を失はず、難有き又面白き嬉しきの心のみにて生活しなば此の生活や、神と一なる生活にして、神の生活の無限久遠なると共に、斯の如き人の生活も無限久遠なり、即ち生通なりと謂ふべきなり。

心は活物、形は死物とは黒住教祖の明に示したまひし所、而も生死も富も貧苦も心一つの用樣なりとは又其の明に諭したまへる所、活物たる心が生きて、神と一體となり、少も我無き心となれば、形も生きるなり、心誠に神と一體のみの心となり、生々勇健の心となれば、如何なる大患難病も之を治する事至つて易し、然れども其の心を絶へず神に任せて、神慮天命のみ從ひ行ふが人の道にて、又神慮天命のみを勤め行ふに於て絶へず難有く面白く嬉しきのみ思ふて、少しも煩悶せず、憂愁せず、日々樂み暮すが道の本旨にて、其の樂み暮す生命直に神と一體なる生命は天照大神の御腹に難有く無限久遠に生活するものなれば、人斯かる生活、生命を有するこそ即ち永生を得たるなれ生通の場に達したるなれ。此の五尺の形體存續が決して生通にはあらざるなり、此の形體も、神慮天

命の儘に長壽を保ち得べきは、勿論にて、天に任せる心が、此の形體の存續を必要とする限り、我を離れたる心が、此の形體に於て神慮天命を行ふべしと爲す限り、所謂不老不死なるを得べしと雖も、此の形體の存續を希望するが如きは、未だ我を離れざるもの、天に任せざるもの固より黒住教祖の宗教、所謂御道にての生通を味ひ得べきにあらざるなり、教祖は生るも死ぬるも天地なれば苦に成るもの無御座と曰ひたるが、人は形の上にて死すると謂ひ、生くると謂ふも、天照大神を離れざるもの、而も其の形にて生くると謂ふも、死ぬると謂ふも、同じく天照大神の御腹たる天地に於ての出來事なれば、固より苦となるべきにあらず。されば眞に黒住教祖の宗教を、信し得る者に於ては、形の上に於ての生死は、無頓着なるべき筈にて、黒住教祖の所謂生通は形を主としての生通にあらず、我を離れ天に任せたる生神と一體なる自我、其の者の生通なり、而も自我の本體は心にして、其の心が神に在りて、神の御心任せの儘の場のみに住みなば、天命神慮と一なる心の儘に、形体に於ても生活も持續し得るなり。病の爲に、やむを得ず此の世を去るとか、此の形を去るとか謂ふが如き事は、道に住め

るものに於てあり得べからず、天命任せの心には、自由自在なり、何となれば天命もし我に幾百歳を保たしめんとしたまふならば、我は幾百歳の壽をも保ち得べきなり。我は天命の儘に、此の形體を去るも、去らざるも自由なり、自在なり。人を身心の二より成ると觀じ、身は滅するも心即靈魂は不滅なりと爲すは、恐らく一般普通の思想なるべし。黒住教祖の宗教にては、始より身は無き者、實有にあらずと觀じ、實有なるもの、即ち實在は心のみと爲すなり。形は實在なる心の所生所顯となし、其の所生所顯としての存在、即ち現象としての存在は認むるも、現象なるが故に、實有、實在を離れたる獨立自存なるものとしては、見ざるなり。人と雖も、實在、實有なるは、人に於ける神にて、人に於ての實在は、直に神なり。而して自我なる心は、既に謂へる如く現象我にして、實在なる心は唯だ神あるのみ。天地の心は己が心なり。外に心の有りと思ふなと教祖の曰ひたるに徴しても、天地の心たる神は、即ち人の本心にして、自我なる心は、其の天地の心たると、同時に人の心たる神の顯現せる所と爲すは、黒住教祖の思想たるを推すべし。然れども前にも既に論じたる如く、自我は現象我なれども、現象我なるが

故に、虚無なるにはあらず、神の實在とし、本體とせる、而も神に由て、多少の自由活動を爲し得る者なれば、自我は一の現象我にして、神の御腹を離れず、一切神を根抵として存在し、活動するものなれども、神を離れざる、而も神の子たる自我は存在せるなり。虚無ならざるを實有と云はんか、自我は誠に實有なりと謂はざるべからず、而も忘るべからざるは、自我は自らの、力に由て實有なるにあらざる事是なり。讀者幸に言語の末に拘泥する勿れ。

黒住教祖の宗教に於ては、誠に神人の一體的關係と共に親子的關係を重んず。而して生通は實に神を離れて在らざる、而も神が其の御腹に於て生みたまへる子なる自我が一切其の神のみに任せ奉りて、樂しみ暮す、生活の、無限不窮に向上的進歩的なるを謂ふなり。形體は此土に滅すれども、靈魂は天堂或は極樂淨土に往生すべしと謂ふにあらずして、現實なる生活に於て、直に神の御腹に住み、無限に、久遠に、神虚天命の儘、樂み暮すべしと爲すなり。形を去りて而して後、自由悦樂の天國に轉住すべしと爲すにあらず、現實の形を有する儘に直に、神の御腹に、極樂世界に高天原に、安住すべしと爲すなり。五尺の形體を脱する

も脱せざるも、自我の住むべきは、道に在るなり。而して其の道は直に神なり。道に住むとは、神に住むにて、神に住めば、心常に生々たるべし、快活なるべし何の苦痛かあらん、憂愁かあらん、道に住める者の心には、苦痛も無く、憂愁も無し。而して其の苦痛も無く、苦痛無き心は安楽、自由、悦楽の心なり。生きたる心なり。而も亦不滅の生命なり。

自我は心と形より成ると思ひ、形は死するも、心だけは不滅なるを得べしと思惟するが如きは、黒住教祖の宗教にては無し。身も我も心も棄てゝ、天地のたつた一の賊或は心ばかりに成るは、黒住教祖の宗教に於ける、大主眼にして、此の賊ばかり、心ばかりに成れる自我の生命は不窮なり。不滅なり。生通なり。而して此の生通の場には形を去りて而して後、至るべしと謂ふにあらず。此の形を有ちながら、直ぐに、至るべきなり。寸時も一刻も早く此の場に至り、而して此の場を離れざるを勤めざるべからず。黒住教祖が道は直に天照大神なり。天照大神の御心なりと曰ひ、又道を離るれば直にあやうしと諭し、道直に生通也と曰ひたる意義亦推し得べきなり。然れども一切取違ひ多しと曰ひたる如く、生通て

ふ語に惑ひ、此の形體を以て何時までも生き得らるや、否やと、無用のせんさくを爲す人も無きにあらざるが如し、斯は實に大誤解なりと謂はざるべからず。生を好み死を忌むは人情の常なるが、黒住教祖の宗教にては、眞の生死は、心にありとして、心を常に生かすべき旨教祖は示したまひぬ。曰く、誠に道は生どほしにて皆心からいきさへ仕候得ば限り者無御座候……願はくば生とほしの處を御勤可被爲下候彌以日神御一體に相違無御座候まゝ

限りなき天照神と我心へだてなければ生とほしなり

たゞ心陽氣に相成邪陰をはなれ長壽を御たもち可被爲下候

生通は、たゞ生命の持續にあらずして、神と離れざる快活、快樂の永恒的持續なり。而して心を生かすとは、心陽氣と成る事にて、快活、怡樂の心直に陽氣の心なり。曰く

一道は○きより外は無御座候……

丸き中に丸き心をもつ人は

かきり知られぬ○き中なり

是則いきとうし也何事も限りをつけたまふべからず、丸き御神に年はより不申少の間もかの丸き難有事御忘れ被成間敷く面白も嬉敷も苦に成もかなしきも心一つのきわめ也

天照大神への御信心は少も〳〵もいんききらひ也たゞ少の間も御ゆだん被成間敷候丸るき中とは、天地の誠の中、神の御腹の中との謂にして、丸き心、即ち誠の心をもつ者は、神の御腹に於て無限の永生を保つなり。是則いきとほし也。の一言以て其の旨意のある所を諒すべし。而して天照大神への御信心は少も〳〵いんきぎらひなりと曰ひたるや、人の心の快活ならず、喜楽ならざるは、畢竟するに、神と一ならず、神の御腹に、神慮天命を楽まざるが爲にして、真の信心となれば、自ら心が生きて、難有く楽しむのみなれば也、限り無く真の信心を爲さば、其の限り無く真の信心にて生活する事、即ち有難く面白きのみの心にて何時までも生活する事が、直に生通なり真の永生なり。黒住教祖の宗教に於ける、永生覩が、普通の霊魂不滅論ならざるや、亦甚だ明なりと謂ふべし。然れども所謂生通に於て、普通一般の願望たる、生命の持續、霊魂の不滅に關す

る欲求をも満足せしむるものたるや無論なり。たゞ生命の持續が、所謂生通にはあらざれども、生通の中には、日々生命の持續、自我としての心の不滅を含み居れりとや謂ふべけれ。而も黒住教祖の宗教にては、所謂死後の運命如何に重きを置くものにあらず又必ずしも生通の意義にての霊魂不滅論を唱ふるを要とせず。吾れ人、一たび神人一體の眞理を悟り、而も現實に神の御腹に、神に任せて、天命をのみ楽みくらす者と成り、絶へす神とは、一體の場にさへあれば、所謂活物を捉へたるにて、無限久遠の生命は、既に自らのものと成れるなり。「天照神と人とは隔無く、直に神ぞと思ふ嬉しさ」「限り無き天照神と我心隔無ければ生通なり」との歌にても明なる如く、我を離れなば直に神と合一すべく、而も合一の經驗さへ、之を得なば、死後の運命如何を疑ふに及ばざるなり。吾れ人、誠に神と一と成り、日々を、否寸時一刻も、神を離れさへせずんば、其處に生通は存す。

霊魂の滅不滅、之を問ふの要無きなり、死後の生活如何、之を尋ぬるにも及ばざるなり。何となれば天地萬物の主宇宙活力の本體たる神は、親として現實に我

を愛し我を其の御腹に於て惠み、且つ導きつゝ在すにあらずや。身は滅するも、心は不滅なるか、死てふ事は、我に如何なる影響を來たすものなるか、如斯疑問は、之を解決せずして可なり。我は神と一なれば足る、神と一なれば既に生通の實を握りたるなればなり。我は難有く面白く心を生かして天命の儘、限り無く、今日唯今より樂しみ暮さんのみ。嗚呼、天地に死無し、神はイタ。ナル、ライフ。永恒の生命其の者なり、我之と一と成りて、神の愛護、指導の經驗、疑はんと欲するも能はず。我豈に死後の運命を疑はんや、生くるも死ぬるも天地、神の御腹なれば、固より苦に成るべき筈無し。一切天に任せんのみ。任するは、親に從ふ心、道德の極致、宗教の極致、而して生死を超越せる安心喜樂の境域なり。眞正の永生も亦自ら茲に存するなり。

永生即ち生通が、たゞ生命の持續にあらざる事、既に謂へるが如し、而して黒住教祖の永生觀に於ては、間斷なく心を生かすと謂ふ事、甚だ大切なるを忘るべからず。前にも言へる如く、神は所謂いんきさらひにて、常に陽氣に心を有ちて、少も陰氣に陷らざる樣、絶へず且つ何時迄も心を生かして行くが、甚だ肝要な

りとす。故に黒住教祖に於ては、生き通しは又生かし通しなり。心を絶へず生かして行けば、常に心が生くる事と成り、其の常に生かして、而して時々刻々に殺さぬ樣爲すが、我を離れ天に任す修行なると同時に、生通の修行なりとす。教祖は生かさすとも殺さぬ樣修行すべき旨示したまひたるが、其の殺さぬ樣爲す事が即ち生きる修行にて、直に生通の修行なり。生かす事、殊に絶えず心を生かし通しに爲すが、直に生通の修行なりとせば、生かすは一の活動にて、精神的努力を意味するなり。而して其の生くる努力、修行は、我を離れ天に任する努力、修行にして、生通と謂ひ、離我任天と謂ひ、全く別事にあらざるを諒すべく、而も心常に生きて、少も陰氣を出さず、心陽氣にして樂みくらすを得ば、是れ我を離れ天に任せたる實行の効果にして、心陰氣にして、快々樂まず、或は煩悶苦慮するが如きは、心を殺すものにて、何故に殺すものなるやと謂はゞ、神を離るればなり。生命の根本たる神を離れたる魚の如く死せざるを得ずたとへ身體は存續するとも、精神的には死したるものと謂ふべし。教祖は善人にも罪ある旨示したまひたるが、たとへ善事、德行と雖も、生きたる心を以て爲すに

あらずば死人の行爲なり、精神的には死したる者の行爲なり。予頃日感する所あり書して曰く

天地の活力、活靈是を神と謂ひ、道と謂ひ、誠と謂ふ。人我を離れ神と合致すれば人亦誠と同化し、此に大覺を得、此に永生を得、一切の煩悶去り、無窮の悅樂來る也。

此には神を天地の活力、活靈と謂へるが、神は又天地の生命なり、生通なり、神に於て死ある無く、苦痛無く、煩悶無し。人我を離れ天に任し、常に絶へず、心を生かし苦痛無く煩悶無き生活を送り得んか、是れ神と離れざる生活、天地の生命と同化せる生命也。不窮ならざらんとするも能はず、悅樂ならざらんとするも能はず。何となれば、神は無限に生きたる神なり。人神と一となれば、神の心と一なり、神の無限久遠なる生命と合致して離れざるもの、斯の如き人には、死あらず、永生あるのみ、悅樂あるのみ。天照らす神の御心、人心一に成れば生通なりと、教祖の示したまひし如く、天心と人心合致すれば所謂一心一體也、少にても我と云ふ者あらば、天と隔をつけるにて、直にねの國、死の谷、罪の淵に陷るの危險を

敢てするもの、誠のみの心にて、少も天と離れずは大安樂、大丈夫なり、心明にして迷無くは、天照大神は、直に我が一心に顯はれたまふて、運をそねたまふなり。何の死かあらん、滅かあらん、あるものは、生通のみ樂しみ通しのみ。

誠に黒住教祖の所謂生通は、生かし通にして、又樂み通しなり、心を常に、何時迄も生かしなば、限り無く生きられ、又限り無く樂みくらすを得るなり、而も生かすと謂ふも、樂しむと謂ふも、必ずしも別事にあらず、生かせば直に樂しく成り、樂めば直に生くるなり。生かす事が、樂む事、樂む事が、生かす事なり。教は一切天よりおこる也、其の教を受て樂みくらすが、信心にて、又人の道而して直に生通の道なり。教祖が、道は一筋の道なりと曰ひ、道直に生通なりと曰ひたるや、亦誠に宜なりと謂ふべき也。

生通は生かし通にて、又樂み通しなりとは予の既に述べたる所なるが、黒住教祖の宗教に於ては、其の樂みも、我が樂と爲すべからざる事、大切にて教祖が

樂しみも我樂しみと思ふまじ
たゞ天地の樂しみにして

と詠じたまひ、又歌に〳〵難有事計りに御座候と曰ひたる如く、樂しみ通しの心は、難有事計にて通す心なり、難有いとは、恐らく敬愛喜悅の情にて、一切を御蔭と思ひて、樂しみ通しに爲す心、亦生通しの心なりと謂ふべきなり、前に述べたる心を生かすと謂ふも、難有く思ふて心を神より離さず、神の御腹に住みて、天命、神慮の儘を樂むに外ならず、天照らす神の御腹に住む時はねてもさめても難有きかなの御歌の如く、其のねてもさめても難有きかなの感情の中には、神に對する敬愛の情に離れざる喜悅の感を含み居るにて、自から所謂樂の心を有せるなり、されば黒住教祖の宗教にて、樂しむは、難有き情にて樂むにあり、即ち神聖なる樂、天心にての樂なりと謂はざるべからず、而して其の天心にての樂に於ては、其の樂も我か樂とは、思はざる樂なり、一切我かものと思ふは迷にて、直に罪惡なり、而して死したる心なり一切我かものとせず、たゞ難有く天命の儘を、樂み勤むるは、生たる心なり、時間に於て、永く限り無く此處に心を生かして樂しみ勤ざるべからざるのみならず、万事に於て生きたる心を以て之に處し、万事を心の養とし、難有のみにて行はざるべからず、故に生死、即死活は

万事の上に在りと謂はざるべからず、是れ何事も彼生かし可被成候と曰ひ、生きさへすれば大神の道なりと曰ひたる所以なるべし。

生きると謂ひ、樂しむと謂ひ、難有事計と謂ひ、語異なれども、必ずしも別事にあらず其の見樣、其の說き方の異なれるのみにて、一筋の道を、種々の方面より說き示したまひしに外ならざるべし、果して然らば生きると謂ふを樂しむ事より離して考ふべからず、樂しむと謂ふも、難有いを離して思ふべからず、難有く又面白く嬉しく思ふ心が、即ち生きたる心樂しむ心にして而も道の心、直に又生通しの心なりと謂ふべきなり。

然り而して此處に最も忘べからざるは、生きるも、樂むも、全く御蔭なる事實なり、嗚呼御蔭の意識こそ、難有事計の心を生む母なれ、一切を御蔭かと思ひて、天命の難有き事を味ふ人こそ、恐らく黒住教祖の宗教を解し得たるものとこそ、言ふを得べけれ、難有き事のみ思へ人はたゞ今日の尊き今の心の向ふ事皆御蔭かと思ひなばねてもさめても難有きかな、固より一切を御蔭かと思ひて、神慮天命を味はふのみが、御道の修行なりとは謂ふべからざるも、一切を御蔭か

と思ひて、其の御蔭たるを味はひ知り、難有きのみの心を養ふ人は恐らく御道を解し得たるものなるべし。而して眞に難有のみの心にて、一切万事に處し、常に生き、絶へず樂しむ人は、神と一なる生活に入りし者にして、卽ち生通しの人なりと謂はざるべからず。生死も富も貧苦も何もかも、心一の用樣なるが、其の心を天に任すが、道にて、而も難有事計にて暮す心は、天に任せ奉り、心は陽氣に面白く何時迄も又何事にも生きて限り無きなり。難有ふなりさへすれば生きら。る而して我も生き人も生かして天地の誠の中に限り無く樂しみくらすを得べし。如何に神人一體の道理を知るとも、難有き心にて、生きるにあらずば、神の御腹に住みながら、難有き事を知らざるにて、甚だ危しと謂はざるべからず。聰明なる讀者は、既に氣付かれたるならんが、生通と言ふも、實は離我任天を離れてあるに非ず。離我任天の修行が、直に生通の修行にて、生通の修行が、又直に離我任天の修行なれば、永生觀も道德觀を離れてあるに非ず。隨て彼此の說明が、互に交渉重複するを免れざるは、自然の數なりと謂ふべし。而も彼此の說明は、相まつて、所謂一筋の道の何たるを、解し易からしめんのみ。

前にも言へる如く、黒住教祖は明に道の誠に勤め易き一筋の道たるを示したまひ、而も其の一筋の道は、道に住む事、卽ち天に任するに在る事を斷言したまひ、又道直に生通なりと示したまひしなれば、黒住教祖の宗教に於ける永生は、我を離れ天に任したる神人一體の永恒久遠の生活にして、換言すれば圓滿の心を以て、無窮無限に、神に在りて生活する事たるなり。而して圓滿は誠誠は圓滿にして、圓滿の心は、正しく、且つ善に、美はしき勇健の心ならざるべからず。而も我を離れ天に任したる心は、圓滿なる神と合一せる心なれば、自ら勇健に眞、善美の理想を實現するものたるを得べし。而して圓滿なる神の性德が此の宇宙万有に顯現するや、進歩的なるが故に、宇宙万有の一たる人に於ける神性神德の顯現も、進歩的なるを知らざるべからず。黒住教祖の思想に於ては、確に神德の顯現も次第に厚く相成る事卽ち進歩的なるを認めたまひしと謂はざるべからず。蓋し教祖は今日も神代にして、神代も次第に神德厚く相成る旨明言したまひ又天照大神の御開運は、教祖の祈りたまひし所にして、御開運てふ事は、御神德顯現の進歩的增加的なるを意味すればなり。されば我を離れ天に任

し、神と一と成れる生活、即生通も、進歩的生活なるを知り得べきなり。無爲静寂なる生通にあらずして、有爲進歩の生通なり。無限に、無窮に神と、離れず圓満なる性徳を向上的、進歩的に、實現する生活こそ、人の眞正なる生活にして又眞正なる永生なりと謂ふべけれ。而して何故、離我任天の修行は、直に斯の如き永生、生通の修行なりやと言はゞ、他なし。人たるもの、全く我を離れ天に任すれば、天、人に活動したまふて、神の性徳を根本とせる人の性徳、自ら無窮に、進歩的、向上的なる發展を遂ぐべければなり。天地と共にめぐりし心こそ限り知られぬ命なるらめ。神徳の顯現の儘に動く心は、天地に於ける御徳の進歩的發顯と共に、人自らの性徳を、無限、無窮に發展し得べく、眞正なる所謂、自我實現は、此に行はるゝなり。丸き中に、丸き心を有ちて、限り無く丸き中に、樂しみつゝ活動するは、神人一體的なる、人の眞正なる生活にして、人、我を離れ、天と一と成りさへすれば、神の子たる、性徳益々顯現し、親神の御腹にありて、進歩的に、圓滿なる生活活動的に自由なる福祉を享有する事、限り無かるべきなり。或る人が言へる如く、艱難にも神を憶ひ、安樂にも神を憶ふて、生活すると謂ふが如きは、未だ低き信

仰にして、難も難とせず、一切神の命の儘、神の御蔭のみにて、樂しみくらす生活は、離我任天的生活にして、神と一なる生活、隨て無限に、無窮に、神徳の顯現と共に、自然の性徳を顯現する生活なりと謂ふべく、吾れ人の理想し得べき、最も、完全なる生活の理想なるのみならず、宗教的意識として、最も高尚なる理想を有するものと謂はざるべからず。兎に角、黒住教祖の所謂生通、即ち永生は、神と一なる生活にして、其の中に、吾れ人の生命、欲の滿足のみならず、倫理的要求の滿足を含むもの、無限に、たゞみ、無く、神に任せ、神心のみの道心、即ち天心にての、無窮なる生活を謂へるものなる事、疑無しと謂はざるべからず。されば道德觀を離れて、永生觀の存せざる事、亦無論の事なりと謂ふべし。

神に離れざる生活の、進歩的、無窮の進行が、眞の永生にて、前にも言へる如く、神を離れたる生活は、精神的には死の生活なり。眞の生死は、心にありて、其の心が、常に神にありて、限り無く生くること、生通の本旨なれ。而も、其の生くるや、我れ獨り生くるにあらず、我も生き人をも生かして、難有く、面白く、圓滿の生活を爲さゞるべからず。しかして、我れも生き人をも生かすと云ふは、自他共に、神に在

りて、樂しみくらす事なり、我も人も、神の御腹に住める、神の子供なるを知り、互に敬愛して、難有く面白く交り、天命の儘、共に助けて、相親しみつゝ暮しなば、我も人も心陰氣に成る事無く、陽氣に、愉快に、樂しく暮すを得べし。誠ほど世に難有き者は無し。誠一で四海兄弟と示したまひし如く、神と離れざる心の誠以て世に處し、人に交らば、所謂智仁勇の三德も具備し、忠孝の大義、博愛の大道も、自ら勤め得べきなり、而して其の誠は、難有き又面白き嬉しきの三氣を具へたる、而も一片の私心私慾無き所謂天心の誠なれば、忠孝も、博愛も、如何なる德義善行も、正しき且樂しき、所謂生きた心を以て爲すなり。故に忠孝も、博愛も、生きた心の生きた活動とは成るなり。たとへ國家のため、或は公衆のため、勤むる事にても、陰氣の心不快心ながらも、義務なるが故に爲すと謂ふが如きにては、未だ以て生きたる心の生きたる活動とは云ふべからず。一切の勤を爲すに、難有き面白き嬉しき陽氣の心、即ち快活の心を以て爲すにあらずば、心に誠ある者と見ざるが、活道德を旨とせる黒住教祖の御趣意の一にして、我も生き人を生かすと謂ふに於て、其の活道德の意義が含まれ居り、生きると謂ふ事、生かすと謂

ふ事が、直に大切なる道德的意味を有し居る事、甚だ注意すべき所とす。誠は直に神心にして、之と一と成り、神の御心任せ、神の御心のみの場合に在りて、一切、人の爲すべき業、勤むべき事を、成さんと欲する爲には、常に生きる事、肝要なり。少にても陰氣起らば是れ神心を離れたる、死の心なり、生死、死活は、常にあり、又、万事にあり、而も絶へず生き、生かして、陽氣の心快活の情を以て、世に處し人に交らば、陽氣の心快活の情、約言すれば生きた心には、活きたる神在すなり。されば万事成就せすと謂ふ事無し、而して生き且つ生かす修行を怠らざるは、即ち生通の修行を怠らざるにてたるみ無く生き、何時迄も生きさへすれば是れ限り無き生通たるなり。五尺の形體を去りて而して後、始めて永遠の命に入ると謂ふにはあらず、今日、唯今が、直に生通の實行を要す。道直に生通なり、道に住めば、則生なり、離るれば則死なり、惜むべし、世、多くは死人のみなり、而も死したる心を以て、死したる道德を談するが如きは蓋し其の惜しむべきの第一ならんか。

形體の持續が、生通の本旨にあらざる事は、無論なれども、心生くれば、自ら身體

も強健にて長壽を保つを得べし。而して此形ある間は、心生くれば形も自ら生き、弱きも強く、病めるも健に、而して天命の儘、現實の世界に在りて、充分に人の任務を果し且つ自由自在の生活を送り得べきなり。黒住教祖の宗教にては心を主とし、形を從とし、心を重んするは無論なれどもさりとて形を無視するには無し。永生卽生通は此形體に於ての存續を謂ふにあらざれども身心共に強健に、天命ならば何時までも不老不死にして、樂しみて人生を送らざるべからず。此身此儘限り無き生通の場に在りて此身からの生通、此世からの生通を爲すが甚だ大切なりとす。死後の世界とて、別に在るにあらず、同じく天照大神の御腹のみ生通を欲する者は、現實の世界に在る間に於て、既に生通の實を得、天命の儘、現實の世界に於ける、種々の勤を、樂しみて爲し、難病も災難も、天よりの修行を蒙る者と心得、一切難有き天命を外にして、何も無しと信じたるみ無く、何事も天に任せて、大丈夫の心勇ましき心、樂しき心卽ち陽氣な生きた心を以て現實なる世界に於ける万事を處せざるべからず。而も人果して斯くの如く、常に絶へず、神と御一體の儘にて生きんか、其の人の一生は、斯世に於て、既に

生通たるなり。而してたとへ天命にて此形を去るとも、外より强ひられて去るにあらで、神と一なる自我が、天命の儘、喜び勇みて此世を去るなり。生きるも天地、死するも天地なり。而して我は天の我にして、而も天は近く我の内にも在して我と離れたまはず、我は天意の儘、神命の儘に動かんのみ。去るべき時來るか我の去るを好しとする時來れるなり。神に任せ神と離れざる我が去るべからずと思惟する時は、天未だ我の此形を去るを命じたまはざるなり。我は天命の儘に生きんのみ。此形體に於ての生死、亦天命の儘、我が自由自在に爲し得る所なり。心生くれば形も生くるなり。天の御用の此世に在る間は、我は此形を去るべしと思ふ能はず、天の御用の無き時は我始めて此形を去るべきを自覺し、而して後去るべし。生死も富も貧苦も何もかも心一の用樣なり。何事も天の爲すのと思ひなば苦にも世話にもならぬものなり。有無の山生死の海を越へぬれば茲ぞ安樂世界なるらん。天照らす神の御腹に住むときはねてもさめても難有きかな。天照らす神の御心人心隔無ければ生通なり。難有やかゝる目出度世に出でゝ樂しみ暮す身こそ安けれ。保つともまた棄つるとも思ふまじたゞ樂

しみの心ばかりに樂も我樂と思ふまじたゞ天地の樂にして以て黒住教祖の宗教的自覺信仰の如何にありしやを知るべく、生通の眞意義亦以て諒得すべきなり。而して前にも言へる如とく、道直ちに天照大神にて、道に住むは、天照大神の御腹に在りて、而も有覺的にたるみ無く神に任せて生活する事なれば、神に任せて生活する者は、神慮天命を行ふ者、人は乃ち神と一心一體と成りて活動するなれば、何等の不自由、何等の障害も、其の天と一なる人の活動には存せざるなり。人は有限不完の者ながら無限完滿なる神と一と成りて、神意天命を行ふ場合に於て、何を欲し、何を爲すも、不可能の事あるべきにあらず、則ち所謂自由自在の御德を蒙りて、如何なる御蔭にても受けられずと謂ふ事、斷じて無きなり。希くは漫に迷信呼りを無す勿れ、之を道理に照らし、事實に徵し、所謂精神力の自然を支配するは、合理當然の事たるなり。夫の病のなほる不思議なりと爲し、信すべからざる奇蹟談と爲すは、未だ道理の何たるを知らず、自然の何たるを解せざる、約言すれば、未だ神德の何たるを知らず、世界、人生の何たるを解せざるが爲なり。苟も宇宙に充滿せる活力を、心靈的に看取し、而も人の精神

力なるものは此活力の所生所顯にして、此の活力を根抵とせるものなる、確固不拔の眞理を諒得せんか、自由自在の御德を蒙るべしと曰ひたる黒住教祖の言、信せざらんとするも能はざる也。

黒住教祖の永生觀に就て、殊に注意すべきは、現實の生活其の者を重んじ、現世に於て絶へず、たゆまず生き通を爲すべしと謂ふにあり。既に言へる如く、死して後、始めて永遠の生命に入ると謂ふにあらずして現在の生活其の者が、直に永遠の生活に入らざるべからずと爲す事、甚だ注意すべき事とす。而して此の現在の生活に於て、永遠の生活に入ると謂ふ事は、物的生活を離れて、心的生活に入る事にて、形の事を離るゝのみが、我を離るゝ事にはあらざれども、形の事を離るゝ事は、我を離るゝ一要件にして、又心的生活に入り、永生を得る一要件なりとす。而かも物的生活を離れて、心的生活に入るべしとは、言ふものゝ、其の離るゝてふ語に拘泥して、形の事は無視すべしとは解すべからず。形の事を主とする觀念を離れ、形の事に拘束せられず、心を活して、心を主人として形を使用する事が大切なり。心的生活と謂ひ、物的生活と謂ふも、比較的の事にて、心の

事を主とするを心的生活と謂ひ形の事を主とするを物的生活と謂ふのみ。形の事を離れて而して心能く形を活用し得べし。黒住教祖の宗教は心を主とし、其の主たる心を天に任せて神人一體の儘に今日唯今を大切に而も難有く面白く嬉しく暮しなば、そこに永生あり、これが生通にして限りは無しと爲すなり。而も天地の道には死なく滅なく、夫の形と雖も、實は滅するにては無し、理學者も物質不滅を說き居るが如く、形と雖も、其の實質は不滅のものなり。而して何故に不滅なるやと謂はゝ、物質も天地に充滿せる神力其の者を根抵と爲せるもの、神力其の者の顯現なればなり。黒住教祖が天地の道に死と謂ふ者無しと曰ひたるや、亦宜なりと謂ふべし。然れども人たる者、此の形體に於いて、永久に生活せんと欲するか、斯は愚蒙の見なり。此の形に目を付けて、此の形の存續如何を考ふるは、決して御道にあらざるなり。教祖は「何事も取ちがへにて生を死と思ひ、死を生とおもふこそ氣毒成次第也」と曰ひ、又彼かげの命をしみ本體の生物ばかりの心をころす也」とも曰ひて永生とは、此の形を主としたる者に非ざるや明なり。されど吾れ人が此世に在る間は、心も生き、形も生きるが道の

趣旨なり。心生くれば、形も生きるなり。病なるは苦にすべき者にあらず。苟も此の世に在りて生活する以上、身體の强健なるを可とす。而も身體の强健は、心が神と一になりて、强健と成れば、自ら强健となるなり。近來歐米にも精神治療なるもの、漸く盛なる趣なるが、斯は實に喜ぶべき事にて、醫療は固より重んずべきも、心生くれば、形亦生くるの眞理、決して疑ふべからず。或る學者曰く、衛生術の秘訣は身體の事を思はざるに在りと。斯は實に味ふべき言にして、餘程御道的なりと謂べし。御道卽ち黒住教祖の宗教にては、心をして、形の事を忘れしめ、而も斯して、形の健康を保しむるを以て、一要旨と爲すなり。御道は生通の道にして、病直しの道にあらざれど、病の直るも、御道の一効驗なり。されば病ある人は、先づ病を直して可なり。而も其の病や、心と神と一と成り、有難きのみの心卽ち生通の場の心に成れば、自ら治すべきなり。されば生通の中に、自ら病の直はる事も、含まれありと謂ふべきなり。

第五章　結論

予は不肖を顧みず、黒住教祖の宗教と題して、既に數旬の間貴重なる本紙に於て、讀者諸彦に見へたり、而して今や本紙には金光教側面觀なる一論文連載せられつゝあり、而も金光教と對照的に黒住教祖の宗教を論せん事は、予の好まざる所、予は不完全ながら、茲に結論として、成るべく簡潔に、第一章乃至第四章に至る叙述説明の、梗概及黒住教祖の宗教に對する概括的評論を試み、以て本篇を終らんとす。

夫れ黒住教祖の宗教や、第一章に於て述べたる如く、天地に充滿せると共に、超越せる無限絶對の神に於て多神の存在を認め、第二章に於て説きたる如く、神人の一體的關係と、親子的關係を認め、第三章に於て示せる如く、離我任天を以て神人合一の實踐的教説と爲し、第四章に於て論じたる如く、現實的にして、而も倫理的なる永生を主唱する者と謂ふべし。

讀者は記憶せらるゝならん、予が緒言に於て、黒住教祖の宗教は、絶對的宗教たるの資格を有するものなりと言へるを、又人心の全要求を滿足するものなりと言へるを、予が如上第一章乃至第四章に説ける所固より不完不備なるべし

と雖も、予に於ては少くとも何故に黒住教祖の宗教が、以上の資格を有する者と謂はるべきかの理由は、既に明なるものありと信ずるなり。

讀者幸に黒住教祖なる名稱に惑ふ勿れ、又從來動もすれば誤傳曲解せられたる教説の如何に拘泥する勿れ、予の見を以てすれば、黒住教祖の宗教は、從來黒住教の教書講壇に於て誤傳曲解せられたるもの無きにあらず、精神的なる大宗教を物質的に説明し、高尚なる大道を卑俗に講明せんとしつゝ、知らず覺へず、道の眞相を誤傳曲解したる事、無きにあらざるなり。然れども今や社會文運の旺盛なると共に、黒住教祖の宗教は、漸くにして其の眞相を發揮し得るに至らんとす、予は不肖、固より一篇の陋文、以て其の眞相を明にし得たりと言はず、而も其の幾分を明ならしむる一助たり得しならんと思惟せずんばあらざなり。然れども緒言に於ても言へる如く、黒住教祖の宗教は、教祖其の人の人格を離れて存せず。隨て黒住教祖の性格を、多少曉得するにあらざれば、其の宗教の意義價値を明にし得べきにあらず、而も予は黒住教祖の性格事蹟に就ては、暫く之を牧放浪君の好著に讓り、專ら教義の方面のみ物したれば、讀者若し牧

君の著を參照する無くんば、黒住教祖の宗教を理解するに於て、不充分なるを感ずべきなり。然り然りと雖も黒住教祖の人格を離れて、其の宗教は知り難しとは言ふものゝ、若し教祖其の人を信ずるが、黒住教祖の宗教なりと謂はんか、斯は甚だしき誤解なり、黒住教祖の宗教は所謂御道にて、御道は或る歴史的人物、宗教的大天才を、信仰の標的と爲すものにあらざるなり、黒住宗忠てふ大人格は、以て百世の師たるべし、而も神の獨子には非ず神人の仲保者にもあらず、誠に教祖宗忠神は、御道の祖なり、大尊師なり、天の與へたまひし大指導者なり、然れども御道卽ち黒住教祖の宗教にては、万人を齊しく神の子にして、且つ神と一體不二なるものと認め、全く神心、卽天心と成るを主眼と爲すものなり。誠に道は一筋の道なり、其の一筋の道が、黒住教祖の宗教なり、黒住教祖は天命に由て其の一筋の道の開祖大先覺者大尊師と成りたまへるなり。儒や佛や、日本古來の神道や、新來の外教や、大道の一端たるのみ。神儒佛如何なる宗教も、以て敵視すべきもの無し、黒住教祖の宗教には外道なるもの無し、何となれば、如何なる宗教にも、多少、神の眞理顯はれ居ればなり、而も眞理其のもの、生命其のも

のを標的とするが、黒住教祖の大主義、大主張にして、則ち絶對的宗教たり得る所以なり。

予頃日天眞の生涯なる一新著を閲す、內外出版協會九月の發行にして、トライン氏の原著イン、チューン、ウイッ、ゼ、インフイニットの翻譯なり。予曾てゼーム氏の宗教經驗論、其他に由りて、トライン氏の名を知り居りたれば其の名の爲に、之を購ひ、試に一讀して、其の說く所、宛として黒住教祖の宗教に對する一解說とも見るに足るを覺へぬ、予固よりトライン氏の所說に首肯し難きものあれども、そは寧ろ言語文字の末にありて、本來の思想信仰、其の者は頗ぶる御道的なるを感ずると共に、一種の快感禁せんとするも能はざるものありき、而してトライン氏が、世界的宗教と題して述べたる言に曰く、神は萬人の神である、萬人の神を信仰の對象とすれば、天主教會に佛僧の讀經を聞き、佛寺に回々教徒の禮拜を見ることも出來る(中略)今日の國民的宗教は統一せらるべき運命を有つて居る、統一するのは吾人である、統一された宗教は世界的宗教であると。予は之を讀むと、黒住教祖の或は神社に、佛閣に、道を說き、佛者儒者神道家

を、其の門弟と爲したまひたる事蹟を想起し、轉た教祖人格の偉大と、其の主張の宏濶なるを感じぬ。而して其の宣傳に係かる宗教の內容如何を、窺へば、誠に絶對的宗教たる資質を有すると同時に、現代の進歩、文明に順應するものなるを感せざる能はず。而も予が絶對的なる語を用ふるは對比を絶する意義にて、之を用ふるにあらずして包括的、統一的の意義にて、之を用ふるなり。されば絶對的宗教は直に世界的宗教なりと謂ふべく、而も黒住教祖の宗教が、果して絶對的宗教にして、且世界的宗教と謂はれ得べきや否やは、讀者の虛心に公明なる功究を要する所なるべし。聞くならく、トライン氏の著は、歐米の讀書社會が「斯くの如く讀者をインスパイア(靈動)する書は、曾て世に出でたることなし」と稱讃せし所なりと。予はトライン氏の所說に就き、聊か抄錄して以て、如何に其の所說が、御道的にして予が本編に於て叙述し說明せる黒住教祖の宗教に近似するものなるかを明にし、且つ其がトライン氏に先つ約百年の往昔、既に顯現せる宗教的眞理の一解說たるに過ぎずして、黒住教祖の門弟子たる、予輩に於ては毫も珍とすべきものにあらざるを示すと、同時に、黒住教祖の宗教は、現代

の文化を呼吸しつゝある人士の、殊に輕侮し、忽諸に附すべからざる所以の一端を明にし、以て本篇を終結する事とせん。然れども讀者若し予を以て、トライン氏の所說を妄信し、氏を以て稀に有るの味方として、其の所說を引証すると爲さんか、斯は大誤解なり、何となれば、歐米に於て、最も進歩したる哲學及宗教思想は、概して所謂御道的なるは、予の敢て公言し得る所、少くとも確信し得る所にして、トライン氏の所論所說も、竟畢其の最も進歩せる思想の所生所顯に外ならざるのみならず、予の之を引証するや、會ま、氏の著の邦語に譯述せらるゝありて、何人にも參照の便宜あるを惟へばなり。

予不肖と雖も、豈に獨りトライン氏を以てオーソリチーと爲すものならんや。而も同氏の著が、歐米の讀書社會に大好評を博したる一事、亦以て同氏の說の輕視すべきにあらざると、共に現代の歐米人士が、何を欲求しつゝあるやを諒するに足るものあるなり。請ふ次にトライン氏の所說を抄して、紹介する事とせん。

トライン氏曰く

○樂天主義は事物を十分に、且つ其の正しい關係に於て觀察する、之に反して厭世主義は其の觀察の範圍が頗る狹小で、且つ常に事物の一面を窺ふに過ぎぬ、故に前者を以て智者の觀察とすれば、後者は愚人の其れである。

○宇宙の實體は無限の生命と無限の勢力である。是れ實に萬物を生み萬物を支配する大原因である。

○吾人は精神上神と一體で神と人との別は個體的小生命と無限の大生命たるとに外ならぬ。

○ゴッドマンとは何ぞ、神たる人間である肉體に於ては未だ人間ではあるが其の心的生命は既に宇宙と一體になり神として無限の力を發揮することの出來る人の謂ひである。(ゴッドマンは神人なり)

○神人交通の門戸を開く鍵は「我は神と一體なり」との大自覺である。既に此の門戸を開き得た者に取つては死生一如苦樂一般融々たる春光常に身邊に滿ち四周の事物、一として己の意に適せざるはない。

○永久の健全法とは如何。人界の神となるのである、心界の人となるのである、

即ちゴッドマンとなるのだ。ゴッドマンは即ち病と死とを免れた人である。吾人は神と一體たることを自覺すると同時に、忽ち心界の人となり、我は肉と血とよりなれる物質であるとの念慮を其の瞬間から失ふのである。從つて病苦の對象たる此の肉體は靈の宿るべき精舍と變じ、肉體あるが爲めに發生した幾百千の私慾私利の念は、烟散霧消夢想ひ起すことが出來なくなるのだ。嗚呼ゴッドマンとなりさへすれば、永久の健全を樂しみ得られる。然るに人は何すれぞ、昏々として無明の巷に徘徊し生涯病魔の虜となるのに甘んずるのであるか。

○ラスキンは、汝の身を快活なる思想の宿となせと言つた。

○完全の健康は、人間自然の狀態で、病弱苦痛不安と云ふが如きは皆是れ神意に反せる不調和の現象である。

健全なる精神は健全なる身體に由りて造られるのではなく健全なる身體が、却つて健全なる精神に由りて造られるのだ。

○今の世に萬能藥があると言はゝ、誰しも頭から否認するであらう。けれども

ゴッドマンは此の靈藥の効驗を受けて居るのだ。愉快なる精神は卽ち萬能藥である。憤怒憎惡怨恨の毒熱も、此の靈藥を服すれば、僅かに一服で立地に全治する。故にゴッドマンの境遇は病氣に苦められぬ生活である。唯ゴッドマンと雖も、……時に或は病魔の侵來を受けることがないとも限られぬ、其の時の用意に神が萬能藥を授けられたのだ。

○神は完全である。神の心を以て我が心とせば、我や卽ちゴッドマンで心身の健全は言ふまでもない。

○神は吾人が「我は神と一體なり」との大自覺を開くと共に、吾人のあらゆる願を容れ給ふので、吾人は、此に至って始めて自由圓滿の人となるのである、されば我若し神人無二の境遇に入らば、最高智も、求めずして感受し得らるゝ道理である。

○吾人が神人無二の大自覺を得ると共に吾人の精神が直ちに萬能の神と變ずることは、今更改めて說くの必要もあるまい（言語の末に惑ふ勿れ）

○世には最高智の本源を神とするのみにて進んでゴッドマンとなるの工夫

を積むことなく、神を身外に置いて、眞理を得るに焦心する者がある。彼等は永久に無明の闇を脫することの出來ない者である。

○一たび「我は神と一體なり」の大自覺を得た以上は、我が精神、卽ち神の精神、精神の聲卽ち神の聲である。故に其の聲に順應して生活すれば、我は天國の人で、所謂大自在、大圓滿の靈物となるのである……

聰明なる讀者は必ず、如何に其の思想の黒住教的なるかを諒せらるゝなるべし（全然同一とは言ふべからざるも）然れども前にも言へる如く、之を以てトラインの氏のみの說を惟ふは不可なり。而も現代に於て甚だ有力なる思想たるに至つては無論なりと謂はざるべからず。嗚呼世界は既に從來の宗教のみにては滿足せざるなり。神人不二、離我任天、無限の生命を宣傳し、實際に神德の顯現を証し得る否な証しつゝある偉大の宗教、而も現代に於て最も進步せる思想、信仰を內容とせる絕對的宗教、世界的宗教は果して何ぞや。

夫れ黒住教祖の宗教は、人をして直に無限の生命、勢力、宇宙の實在なる神と一體なるを悟らしめ、所謂ゴッドマンと成るの道なり。而も現實の生活を重んじ、

至公至明の心を以て、快活怡樂の情を以て、無限に生活せしむるものなり。而して黒住教祖は高尚偉大なる宗教的思想信仰の宣傳者たりしのみならず、實驗者、實行者なりしなり。教祖は實に人にして神なりし也、神にして人なりし也。而も何人と雖も教祖の遺訓に則り以て神人一體の德を實現せんか、則ち人にして神たるを得る也、神にして人たるを得る也、難有い哉。

身も我も心もすてゝ天地の
たつた一のまことばかりに
まるき中にまるき心をもつ人は
限りしられぬまるき中なり
天照らす神の御腹に住むときは
ねてもさめても難有きかな

黒住教祖の宗教 終

明治四十一年三月廿一日印刷
明治四十一年三月廿五日發行

黒住教祖の宗教奥付
正價金五拾錢
郵税金八錢

著作者 岡山縣岡山市大字上之町五十五番地 桑田常藏

發行者 岡山縣岡山市大字西中山下八十五番地 合資會社細謹舍代表者 宮野浪治郎

印刷者 岡山縣岡山市大字上之町五十五番地 市川休太郎

發行所 岡山縣岡山市大字上之町五十五番地 合資會社 細謹舍書店
【振替貯金口座四七七四番】

(不許複製)

特約販賣所

東京市京橋區南傳馬町二丁目 目黒書店
大坂市東區備後町四丁目 吉岡寶文館
岡山市東中山下 國の教雜誌社
【振替貯金口座二五九〇番】

324
76

013969−000−2

324−76

黒住教祖の宗教

桑田　無堂（常蔵）／著

M41

ABB−0216